

京都府遺跡調査概報

第120冊

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡

(平成16年度)

- (1) 三日市遺跡第4次
- (2) 馬路遺跡第4次
- (3) 池尻遺跡第5次

2006

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



(1)調査地遠景(南から)



(2)調査地遠景(北西から)



(1)調査地全景(北から)



(2)調査地全景(東から)

序

京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

本書は、『京都府遺跡調査概報』として、平成16年度に実施した発掘調査のうち、農林水産省近畿農政局の依頼を受けて行った、国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、御活用いただければ幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、亀岡市教育委員会などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成18年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理 事 長 上 田 正 昭

凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡

(1) 三日市遺跡第4次

(2) 馬路遺跡第4次

(3) 池尻遺跡第5次

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および概要の執筆者は下表のとおりである。

	遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
	国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡			近畿農政局	
(1)	三日市遺跡第4次	亀岡市河原林町河原尻菖蒲	平16.5.24～平16.7.2		森島康雄
(2)	馬路遺跡第4次	亀岡市馬路町六反田	平16.12.7～平17.2.27		村田和弘
(3)	池尻遺跡第5次	亀岡市馬路町池尻前ノ側	平16.9.6～平16.11.5		石崎善久

3. 本書で使用している座標は、世界測地系国土座標第6座標系によっており、方位は座標の北をさす。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の真北をさす。

4. 本書の編集は、調査第2課第1係が当たった。なお、遺物の写真撮影は、同資料係主任調査員田中彰が行った。

本文目次

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡平成16年度発掘調査概要

はじめに-----	1
位置と環境-----	2
(1)三日市遺跡第4次-----	3
(2)馬路遺跡第4次-----	9
(3)池尻遺跡第5次遺跡-----	36

付表目次

(3)池尻遺跡第5次遺跡	
付表 調査トレンチ一覧-----	45

挿図目次

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡	
第1図 調査地周辺遺跡分布図-----	2
(1)三日市遺跡第4次	
第2図 調査地位置図-----	3
第3図 調査区平面図-----	4
第4図 北壁土層断面図-----	4
第5図 出土遺物実測図(1)-----	5
第6図 出土遺物実測図(2)-----	6
第7図 出土遺物実測図(3)-----	7
第8図 出土遺物実測図(4)-----	8
(2)馬路遺跡第4次	

第9図	馬路遺跡調査地位置図	-----10
第10図	調査区位置図	-----11
第11図	E地区遺構配置図	-----12
第12図	E地区南壁土層断面図	-----12
第13図	E地区検出遺構土層断面図	-----13
第14図	E地区竪穴式住居跡S H03平面・断面図	-----13
第15図	F-1・2地区遺構配置図	-----15
第16図	F-1地区南壁土層断面図	-----16
第17図	F-1・2地区検出遺構土層断面図	-----16
第18図	方形周溝墓S T01平面図	-----17
第19図	方形周溝墓S T01周溝土層断面図	-----18
第20図	方形周溝墓S T01周溝S D311遺物出土状況図	-----18
第21図	方形周溝墓S T02平面図	-----19
第22図	方形周溝墓S T02周溝土層断面図	-----20
第23図	方形周溝墓S T02周溝S D02遺物出土状況図	-----20
第24図	掘立柱建物跡S B01平面・断面図	-----21
第25図	掘立柱建物跡S B02平面・断面図	-----22
第26図	掘立柱建物跡S B03平面・断面図	-----23
第27図	柱穴P 50遺物出土状況図	-----24
第28図	掘立柱建物跡S B04平面・断面図	-----25
第29図	焼土坑S X411平面図	-----26
第30図	土坑S K413遺物出土状況図	-----26
第31図	柱穴P 19遺物出土状況図	-----27
第32図	G地区遺構配置図	-----28
第33図	G地区西壁土層断面図	-----28
第34図	G地区検出土坑土層断面図	-----29
第35図	E地区出土遺物実測図(1)	-----30
第36図	E地区出土遺物実測図(2)	-----31
第37図	F-1地区出土遺物実測図(1)	-----32
第38図	F-1地区出土遺物実測図(2)	-----33
第39図	F-1地区出土遺物実測図(3)	-----34
第40図	F-1地区出土遺物	-----34
第41図	F-2地区出土遺物実測図	-----34
(3) 池尻遺跡第5次		
第42図	調査地位置図	-----37

第43図	トレンチ配置図-----	38
第44図	A地区主要トレンチ平面図(1)-----	39
第45図	A地区主要トレンチ平面図(2)-----	40
第46図	B地区トレンチ平面図-----	42
第47図	C地区トレンチ平面図-----	43
第48図	各トレンチ土層柱状図-----	44
第49図	各トレンチ土層柱状図-----	45
第50図	出土遺物実測図(1)-----	47
第51図	出土遺物実測図(2)-----	48
第52図	調査地周辺地形図およびコンタ・旧地形復原案-----	49

図 版 目 次

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡

(1)三日市遺跡第4次

図版第1	(1)西区全景(西から)	(2)中央区・西区全景(東から)
	(3)東区西部全景(東から)	
図版第2	(1)東区東部全景(西から)	(2)北壁土層堆積状況(南から)
	(3)遺物出土状況(南西から)	
図版第3	出土遺物(1)	
図版第4	出土遺物(2)	
図版第5	出土遺物(3)	
図版第6	出土遺物(4)	
図版第7	出土遺物(5)	
図版第8	出土遺物(6)	

(2)馬路遺跡第4次

図版第9	(1)調査地全景(北上空から)	(2)調査地全景(西上空から)
図版第10	(1)調査前風景(北から)	(2)作業風景(東から)
	(3)E地区全景(南東から)	
図版第11	(1)E地区溝S D14・19完掘状況(南から)	
	(2)F-2地区全景(北から)	
	(3)F-1地区遺構検出状況(南から)	

- 図版第12 (1) F-1 地区掘立柱建物跡検出状況(南から)
 (2) F-1 地区掘立柱建物跡全景(南から)
 (3) F-1 地区柱穴P50遺物出土状況(北東から)
- 図版第13 (1) F-1 地区方形周溝墓S T02完掘状況(東から)
 (2) F-1 地区方形周溝墓S T02完掘状況(南から)
 (3) F-1 地区溝S D05全景(北から)
- 図版第14 (1) F-1 地区溝S D01土層断面(北から)
 (2) F-1 地区溝S D310土層断面(北から)
 (3) F-1 地区溝S D311土層断面(東から)
- 図版第15 (1) F-1 地区溝S D311遺物出土状況(東から)
 (2) F-1 地区溝S D311遺物出土状況(南から)
 (3) F-1 地区溝S D311遺物出土状況(東から)
- 図版第16 (1) F-1 地区土坑S K413遺物出土状況(北西から)
 (2) F-1 地区土坑S K413遺物出土状況(北から)
 (3) G地区全景(北から)
- 図版第17 出土遺物(1)
- 図版第18 出土遺物(2)
- (3) 池尻遺跡第5次
- 図版第19 (1) A2 トレンチ上層全景(南から)
 (2) A2-2 トレンチ上層全景(北から)
 (3) A2-2 トレンチ下層全景(北から)
- 図版第20 (1) A3 トレンチ上層全景(北から)
 (2) A3 トレンチ下層全景(南から)
 (3) A5-1 トレンチ全景(南から)
- 図版第21 (1) A5-2 トレンチ全景(西から)
 (2) A6 トレンチ全景(北から) (3) A7 トレンチ全景(南から)
- 図版第22 (1) A8 トレンチ全景(北から) (2) A10 トレンチ全景(北から)
 (3) A10 トレンチ全景(南から)
- 図版第23 (1) A11 トレンチ全景(北から) (2) A12 トレンチ全景(北から)
 (3) A13 トレンチ全景(南から)
- 図版第24 (1) A14 トレンチ全景(東から) (2) A15 トレンチ全景(南から)
 (3) A15 トレンチ全景(北から)
- 図版第25 (1) A16 トレンチ全景(北から)
 (2) A16 トレンチ溝上面弥生土器検出状況(北から)
 (3) A17 トレンチ全景(北から)

- 図版第26 (1) A 17トレンチ縦穴式住居周壁溝状遺構検出状況(東から)
(2) B 1 トレンチ全景(南から) (3) B 3 トレンチ全景(南から)
- 図版第27 (1) B 4 トレンチ全景(南から) (2) C 1 トレンチ全景(北から)
(3) C 3 トレンチ全景(南から)
- 図版第28 (1) C 4 トレンチ全景(北から) (2) C 5 トレンチ全景(南から)
(3) C 5 トレンチ全景およびC地区近景(北から)
- 図版第29 出土遺物(1)
- 図版第30 出土遺物(2)

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡 平成16年度発掘調査概要

はじめに

この調査は、近畿農政局が実施している国営農地再編整備事業「亀岡地区」に伴い、近畿農政局の依頼を受けて当調査研究センターが行った。調査範囲は、京都府教育委員会と亀岡市教育委員会による試掘調査の結果をもとに、近畿農政局をはじめとする開発部局と調整を行って決定した。

平成16年度は、時塚遺跡第6・8・10次調査、三日市遺跡第4次調査、馬路遺跡第4次調査、池尻遺跡第5・7次調査、車塚遺跡第7次調査、蔵垣内遺跡第4次調査のほか、三日市遺跡第3次調査地の埋め戻し、ならびに、河原林遺跡・馬路遺跡第3次調査、三日市遺跡第3次調査の整理報告業務を行った。現地調査は、調査第2課調査第1係長小池寛、調査第1係主任調査員引原茂治・中川和哉・森島康雄、同専門調査員岡崎研一・黒坪一樹、同調査員石崎善久・村田和弘・福島孝行が担当した。

時塚遺跡第6次調査は、平成16年4月23日から平成16年9月7日まで、調査面積3,800㎡を、時塚遺跡第8次調査は、平成16年8月2日から平成16年11月18日まで、調査面積1,200㎡を、時塚遺跡第10次調査は、平成16年12月1日から平成17年2月27日まで、調査面積4,120㎡を、三日市遺跡第4次調査は、平成16年5月24日から平成16年7月2日まで、調査面積150㎡を、馬路遺跡第4次調査は、平成16年12月7日から平成17年2月27日まで、調査面積1,570㎡を、池尻遺跡第5次調査は、平成16年9月6日から平成16年11月5日まで、調査面積600㎡を、池尻遺跡第7次調査は、平成16年10月21日から平成17年3月16日まで、調査面積3,430㎡を、車塚遺跡第7次調査は平成16年12月13日から平成17年3月7日まで、調査面積1,570㎡を調査した。なお、蔵垣内遺跡第4次調査は、平成17年3月11日から平成17年3月16日まで、700㎡の重機掘削を行った。

時塚遺跡第6次は平成16年8月21日、池尻遺跡第7次D地区は平成17年2月6日、時塚遺跡第10次・馬路遺跡第4次・池尻遺跡第7次E地区・車塚遺跡A地区は、平成17年2月27日に、それぞれ現地説明会を行った。

今回は、三日市遺跡第4次調査、馬路遺跡第4次調査、および池尻遺跡第5次調査について報告し、そのほかの調査については、来年度以降に報告する。

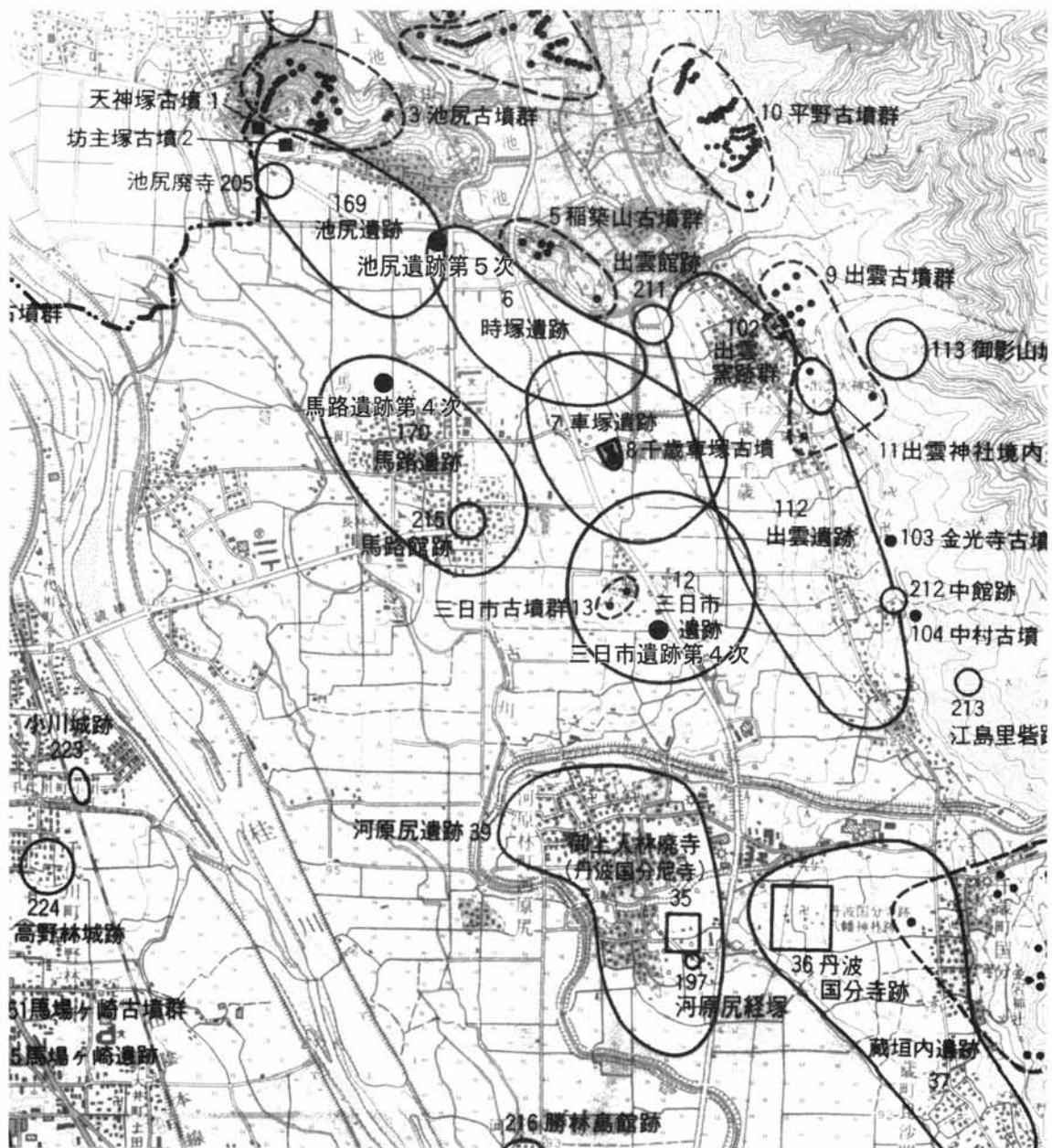
現地作業においては、京都府教育委員会、亀岡市教育委員会をはじめとする関係機関の協力を得、また、地元自治会、地権者、地元住民の方々の御理解と御協力をいただいた。記して感謝したい。

(森島康雄)

位置と環境

亀岡盆地内では、桂川の両岸に段丘地形が見られるが、右岸のほうが発達している。調査地の位置する桂川左岸は、背後の若丹山地から供給され形成した礫層が、三俣川や七谷川により扇状地となり、それが更に段丘化している。その表面は盆地中央に向かってゆるく傾斜している。七谷川と三俣川によって段丘が分断される形になっているが、七谷川南側に広がる段丘上には国分寺・国分尼寺が、七谷川北岸から三俣川の間広がる段丘上には千歳車塚古墳がそれぞれ立地している。集落は全体的に点在した様相である。この地域には、丹波国分寺・国分尼寺や、一宮(出雲神社)が置かれ、古代においての重要な地域であったことが分かる。

左岸で最も古い遺物は、案察使遺跡で出土した縄文時代早期の土器である。三日市遺跡では中期から後期にかけての土器が、車塚遺跡では後期の土器・石器が多量に出土している。車塚遺跡



第1図 調査地周辺遺跡分布図(S=1/25,000)

の土器には角閃石を含むものも多く、生駒西麓地域との関連も想定できる。大淵遺跡では、晩期の土器を用いた甕棺が出土している。弥生時代には、右岸の太田遺跡で環濠集落が営まれた。左岸では、池尻遺跡で前期の遺物・遺構が検出されている。中期に入ると、里遺跡や案察使遺跡で集落が営まれた。池尻遺跡では中期の遺物も出土し、馬路遺跡では方形周溝墓が数基見つかり、墓域としての一面をもつ。弥生時代の車塚遺跡でも方形周溝墓が検出されている。時塚遺跡では後期の遺構が検出され、この時期の集落であったものと思われる。

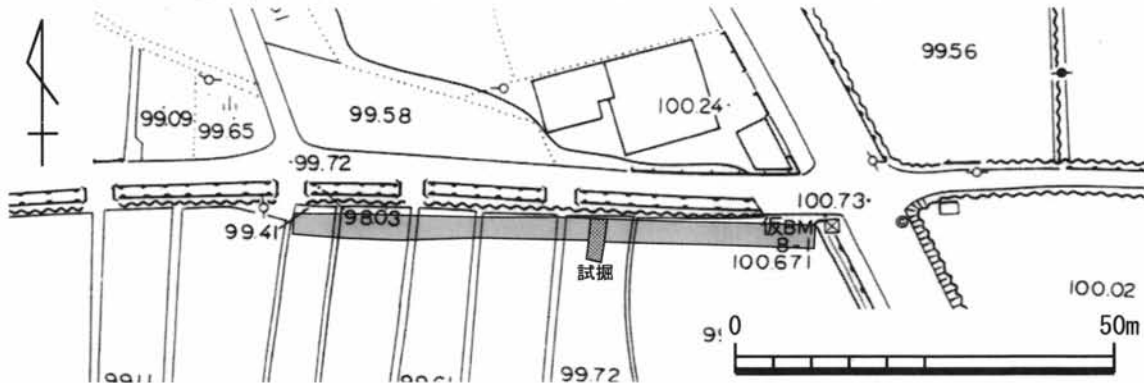
古墳時代には、この時代をほぼ通し、河原尻遺跡で住居が営まれた。里遺跡では、前期から中期にかけての住居跡が見つかった。この地域でも古墳は営まれる。中期の七谷川以北地域には大型方墳である坊主塚古墳や榊塚古墳が、七谷川以南地域には二重周溝と葺石をもつ前方後円墳である保津車塚古墳や円墳の保津山古墳が営まれた。時塚遺跡では、周溝をもつ方墳が2基検出され、一方では盾持ち人形埴輪も見つかった。千歳車塚古墳は、三段築成で盾形周濠と埴輪をもつ後期の前方後円墳である。全長82mで、後期古墳としては近畿でも屈指の大きさである。

奈良時代に入ると、丹波国分寺・国分尼寺(御上人林廃寺)が建立された。国分尼寺周辺の河原尻遺跡では、この時期の竪穴式住居跡と掘立柱建物跡が多数検出され、国分寺建立前後の大規模集落と思われる。三日市遺跡にある瓦窯跡は、国分寺・国分尼寺の創建瓦を焼成した瓦窯であることが分かっている。車塚遺跡でも三日市遺跡で焼かれた瓦が出土している。更に、車塚遺跡には集落とは考えがたい大型の柱穴が検出しており、官衙のような性格をもつことが想定される。池尻遺跡では、瓦や礎石建造物跡など古代寺院の存在を示す遺物・遺構が検出され、漆関連遺物も出土している。丹波国府の位置は今日でも議論を呼んでいるが、以上の要素から池尻遺跡がその候補地の一つに挙げられている。(谷上真由美)

(1) ^{みっかいち}三日市遺跡第4次

1. 調査経過

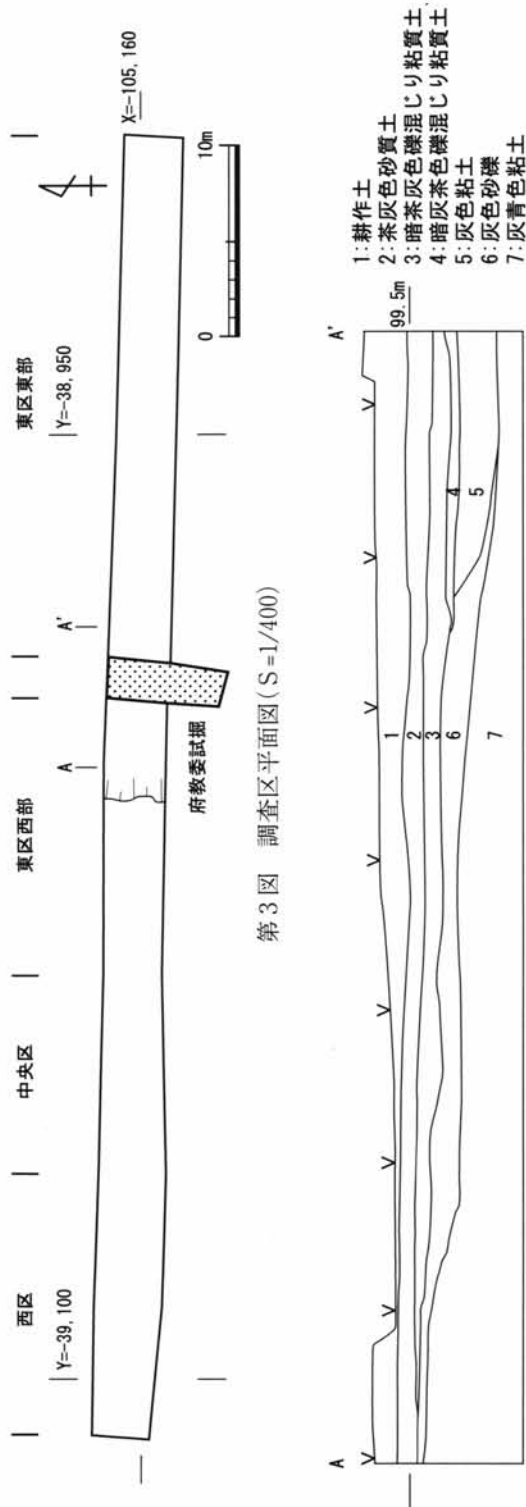
三日市遺跡は亀岡市河原林町河原尻小字菖蒲に所在する。第4次調査地点は、丹波国分寺創建



第2図 調査地位置図(S=1/1,000)

瓦窯の灰原が検出された第3次調査地点から南方に延びる段丘崖を東側に回り込んだ段丘上に立地し、三日市集落の南側にあたる。調査対象地は水路予定地であり、京都府教育委員会による試掘調査で奈良時代の遺物がまとまって出土したことから、本調査を実施することとなった。

調査は平成15年度末に開始したが、平成15年度の調査では、調査対象地の中に作付け中の畑があったため、調査区が東西2か所に分かれることとなり、それぞれ、西区、東区とした。平成15年度の調査は、西区全体と東区の府教委試掘トレンチ以西(東区西部)は床土まで掘削し、東区の



第3図 調査区平面図(S=1/400)

府教委試掘トレンチ以东(東区東部)は、灰色粘土上面まで層ごとに掘削したところでいったん終了した。平成16年度には、西区と東区の間の前年度に作付け中であつた畑部分(中央区)を加えて調査を行った。

2. 層序

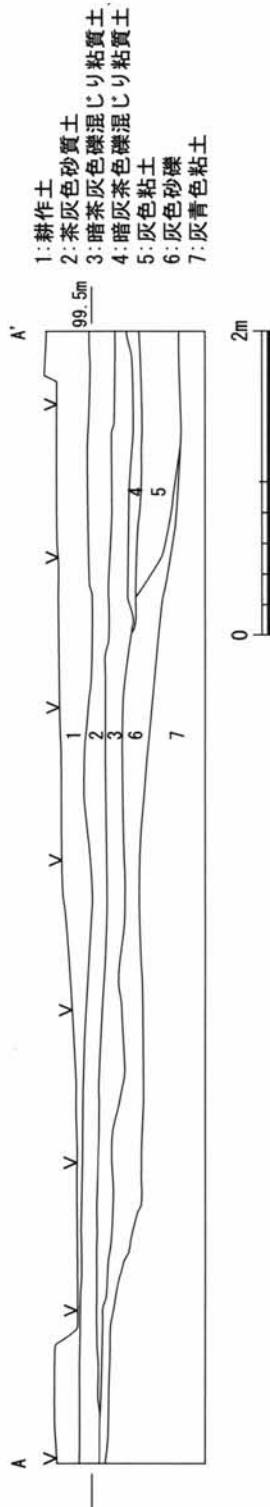
調査区の土層堆積状況は府教委の試掘トレンチ付近を境に大きく異なる。調査区西端から府教委試掘トレンチの約5m西方までは床土直下に黄茶色の地山が現れた。これより東側では、地山が東側に向かって下がり、その上に、暗茶灰色礫混じり粘質土、暗灰茶色礫混じり粘質土、灰色砂礫、灰青色粘土層が堆積していた。この灰青色粘土層が地山とみられる。また、府教委試掘トレンチより東側では、灰色砂礫の上に灰色粘土が堆積している。

調査区東半部の灰青色粘土層上面で灰色粘土が土坑状に落込んでいるところが数か所認められたが、人為的な掘り込みとは考えられない。各面ともに遺構は認められない。

3. 出土遺物

暗灰茶色礫混じり粘質土までの層には瓦器椀や土師器皿などの中世土器が含ま

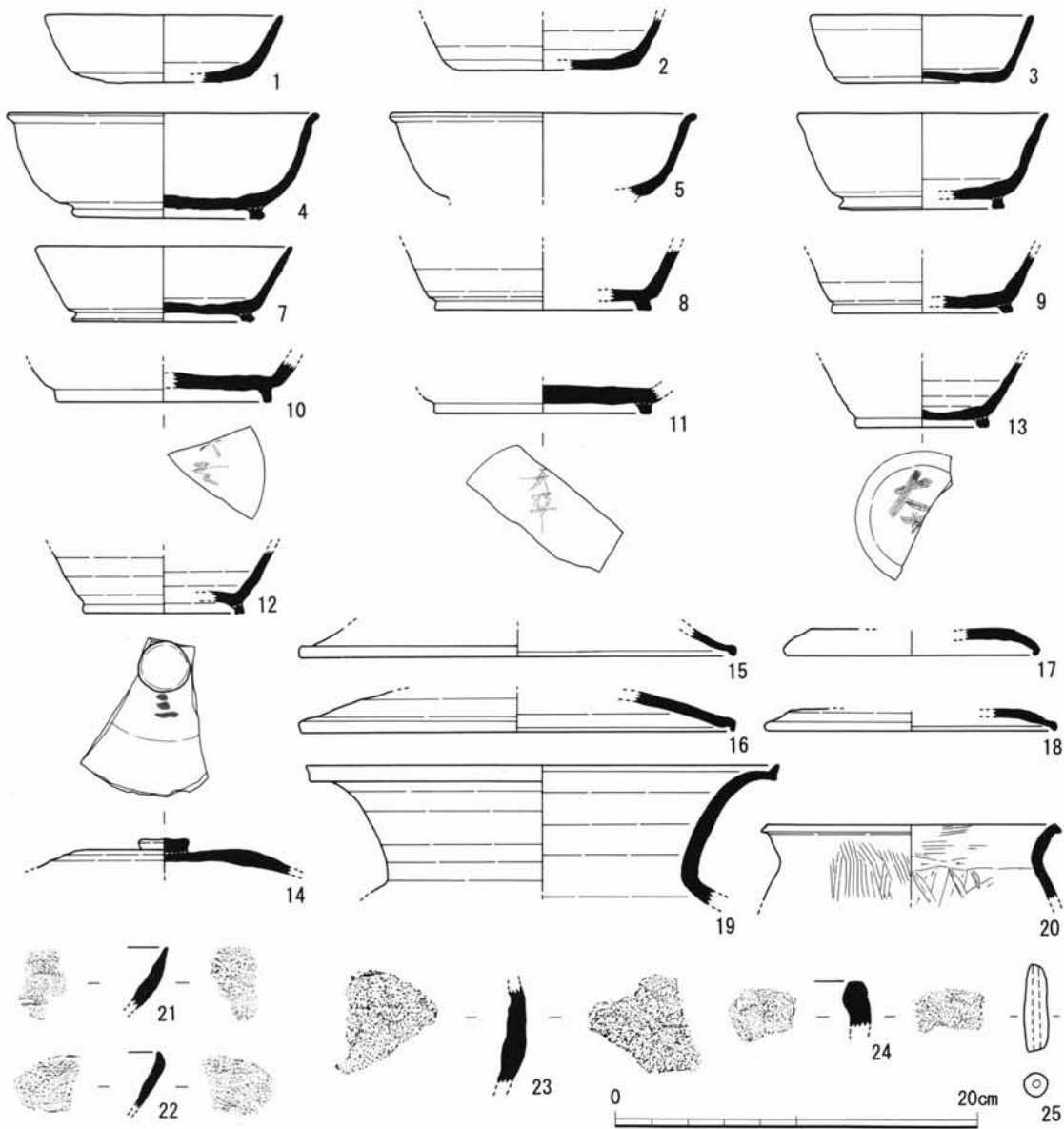
第4図 北壁土層断面図(S=1/50)



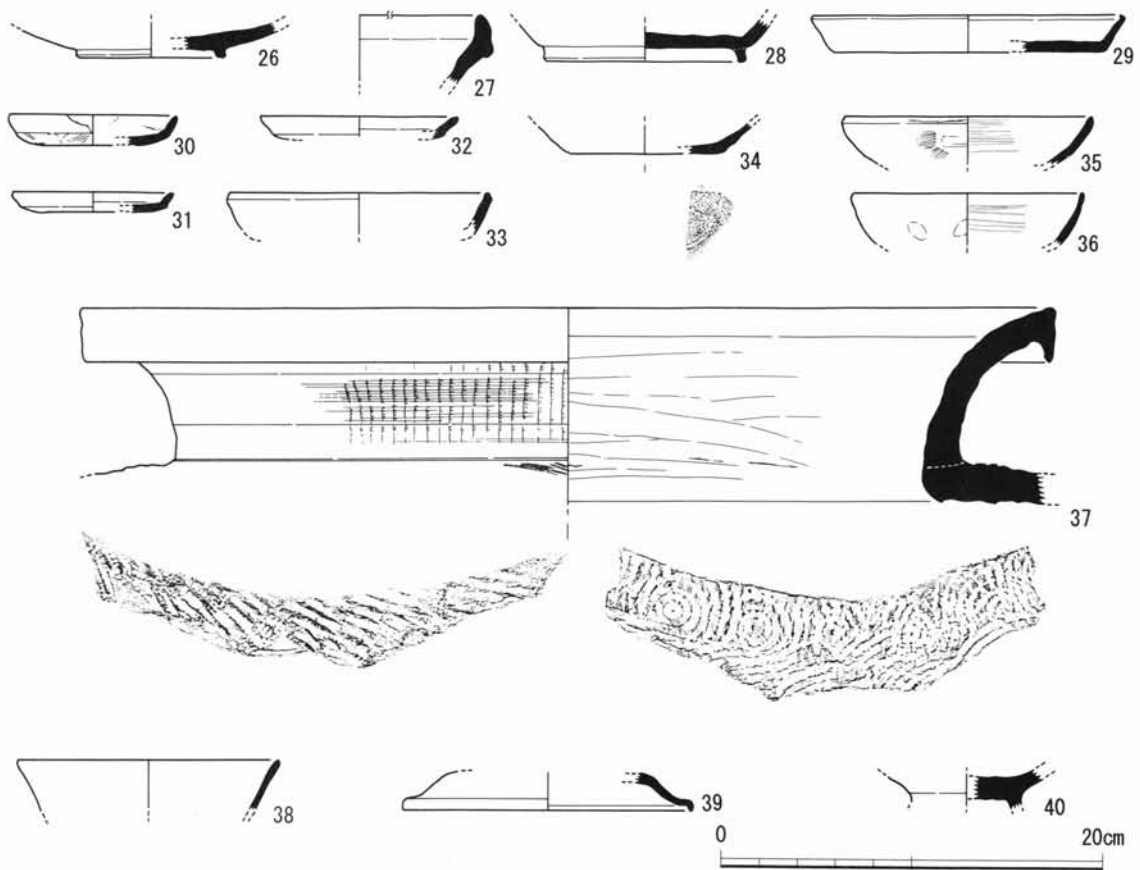
れ、灰色粘土、灰色砂礫からは奈良時代の遺物が出土した。

奈良時代包含層出土の土器

1～3は須恵器杯Aである。1は、焼成がやや甘く、淡灰黄色を呈し、口縁部のみ灰黒色を呈する。2は黒色粒を多量に含む特徴的な胎土をもつ。3は焼成が堅緻で、外面に自然釉が掛かる。4～11は須恵器杯Bである。4・5は体部が丸みを持ち、口縁端部が短く外反する。4の内底面はやや平滑になり、墨の痕跡が認められるので、硯に転用されていたことがわかる。6は外面に濃緑色の自然釉が厚く掛かっている。10・11は底部外面に墨書が認められる。10は判読できないが、11は「天□」と書かれている。2文字目は不鮮明であるが、「平」の可能性はある。13は壺の底部と思われる。底部外面に「本」と読める墨書がある。14～18は須恵器杯B蓋である。14は外面に「三」の墨書が鮮明に残っている。15は天井部が笠形になる。19は須恵器壺である。20は土師器甕である。体部内面は縦方向にヘラケズリ調整を施した後、ヘラ先で斜めに刻んだような痕跡が



第5図 出土遺物実測図(1)



第6図 出土遺物実測図(2)

残る。外面は口縁部まで煤が付着する。21～24は製塩土器である。薄手で胎土細かいもの(21・22)と厚手で胎土の粗いもの(23・24)がある。21～23は粘土紐接合痕が明瞭に残る。25は土錘である。細かな胎土で淡橙乳色を呈する。

表土・耕作土出土の土器

26は灰釉陶器皿である。内面に灰釉が掛けられている。耕作土から出土した。27は東播系須恵器鉢である。床土から出土した。

中世包含層出土の土器

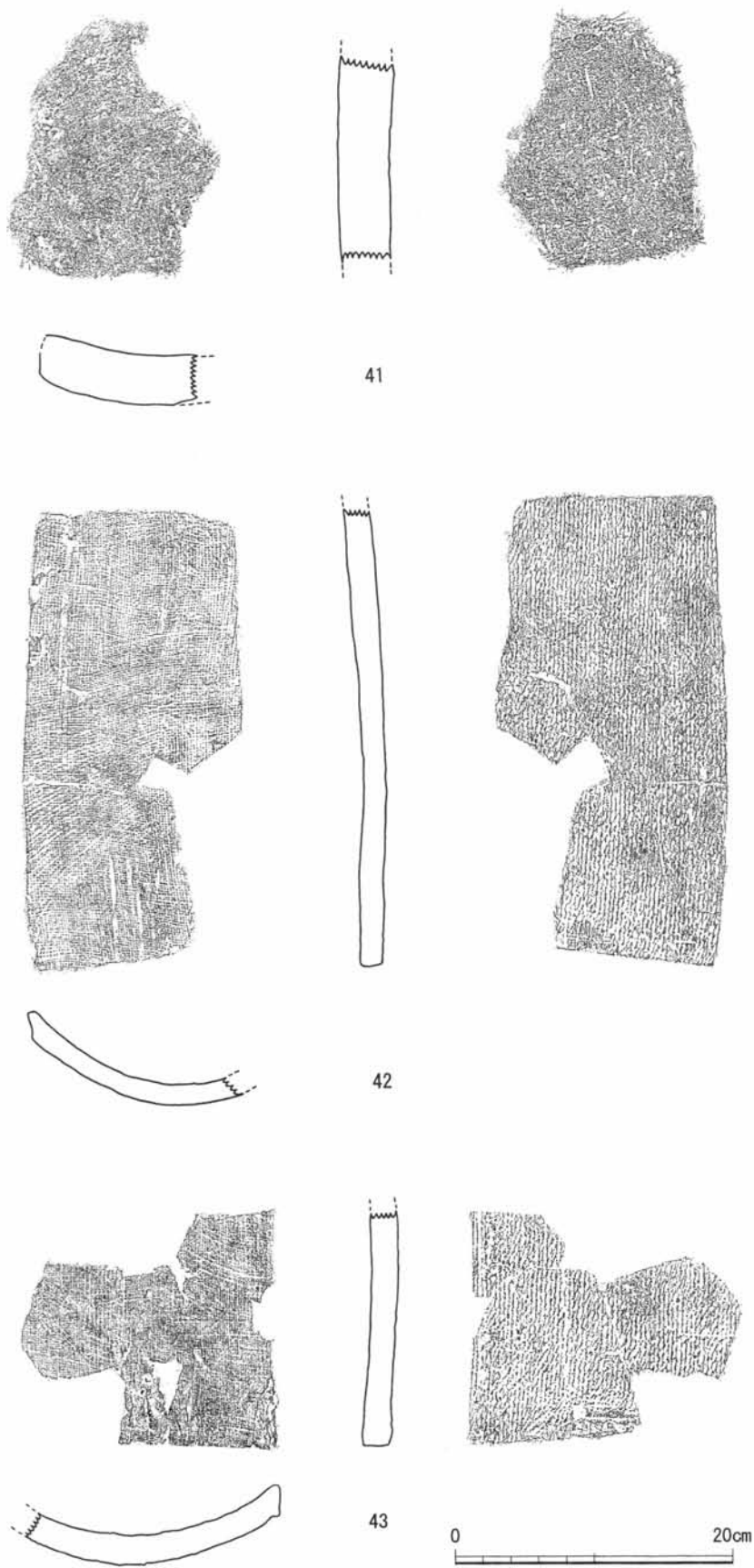
28は須恵器杯B、29は須恵器皿である。30～32は土師器小皿、33は土師器大皿である。32は灰黒色を呈し、黒色土器に近い焼成である。33は口縁部外端に面取りを施す。34は回転台土師器杯である。底部は糸切りである。35・36は瓦器椀である。内面に圏線ミガキが施されるが、34の方がやや密である。37は須恵器甕である。口縁部内面には強いヨコナデが施されているが、粘土紐の継目が認められる。

出土層位不明の土器

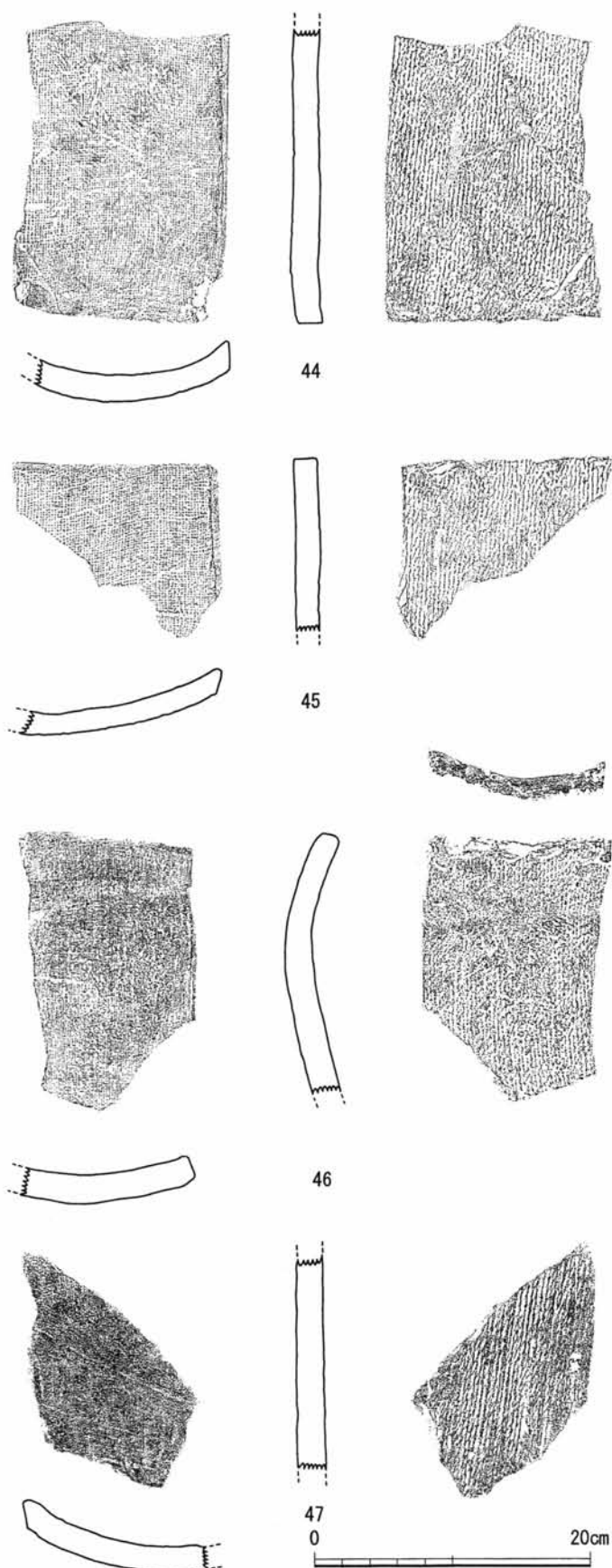
38は須恵器杯B、39は須恵器杯蓋である。40は竜泉窯系青磁椀である。底部外面は蛇の目に釉剥ぎされている。

瓦

奈良時代包含層からは、三日市遺跡第3次調査地の東に隣接して存在すると予想される国分寺



第7図 出土遺物実測図(3)



第8図 出土遺物実測図(4)

創建瓦窯で焼成したとみられる瓦が出土している。

41は瓦当面は残っていないが、無顎の軒平瓦である。42～47は平瓦である。いずれも一枚作りで凹面はコビキ痕跡と布目が、凸面は縄タタキが観察できる。凹面側縁は面取りが施される。44は凹面側の広端部中央にも面取りが施されている。42・46の凸面に離れ砂の痕跡がみられること、43の凸面側縁付近が側縁に沿って盛り上がっていること、43・47の凹面に指押さえなどの調整が認められることなどから、凹形台を使用しているものと思われる。

4. まとめ

今回の調査では、明確な遺構は検出されなかったが、調査区東半部で検出された湿地状の落ち込みの肩付近で奈良時代の遺物がまとまって出土した。この中には、三日市遺跡で焼成されたとみられる丹波国分寺の創建瓦・墨書土器・製塩土器などが含まれている。これらが、調査区西半部側から投棄されていることから、調査区の西に広がる段丘上には、三日市遺跡の瓦窯に関連する施設が展開する可能性が高いと考えることができるだろう。

(森島康雄)

(2) 馬路遺跡第4次

1. はじめに

馬路遺跡は、亀岡市馬路町壁木・梅原・六反田ほかに所在する。馬路町付近の低位段丘は三俣川や七谷川によって分断され、七谷川の南側には丹波国分寺や国分尼寺、河原尻遺跡などが所在し、七谷川と三俣川の間には千歳車塚古墳や時塚遺跡などが所在する。また、当遺跡の北側には池尻遺跡が所在するように、遺跡が集中して分布している地域である。

馬路遺跡は、低段丘上にある馬路の集落や北部に広がる田畑部を囲む形で広がっており、遺跡範囲は東西約700m、南北約800mを測る(第9図)。これまでの調査によって、弥生時代～中世にわたって営まれた遺跡であることが判明している。

当遺跡内では、平成8年度に亀岡市教育委員会が試掘調査(第1次調査^(注2))を実施しており、平成15年度には、京都府教育委員会が国営農地再編整備事業にともなって、当遺跡のほぼ全域において試掘調査(第2次調査^(注3))を実施した。また、その試掘調査の結果を受けて、当調査研究センターが第3次調査(A・B・C・D地区^(注4))として、平成15年度に発掘調査を実施した。

第3次調査の調査範囲は、遺跡の北半部にあたる。調査は北東部でA・B地区、北西部でC・D地区の調査区を設定して行った。A地区では、古墳時代後期～飛鳥時代の竪穴式住居跡6基や平安時代後期の掘立柱建物跡4棟、溝などの遺構を検出した。B地区では、弥生時代中期後半の方形周溝墓1基や土坑などを確認した。C地区では、飛鳥時代の竪穴式住居跡2基や平安時代の溝などを検出した。また、平安時代の溝S D01からは、「田中」と書かれた墨書土器が出土した。D地区では、飛鳥時代の竪穴式住居跡3基のほかに、鎌倉時代以降の遺構と思われる方形や楕円形を呈する焼土坑を集中して検出した。

今回報告するのは、平成16年度に行った馬路遺跡第4次調査である。

2. 調査概要

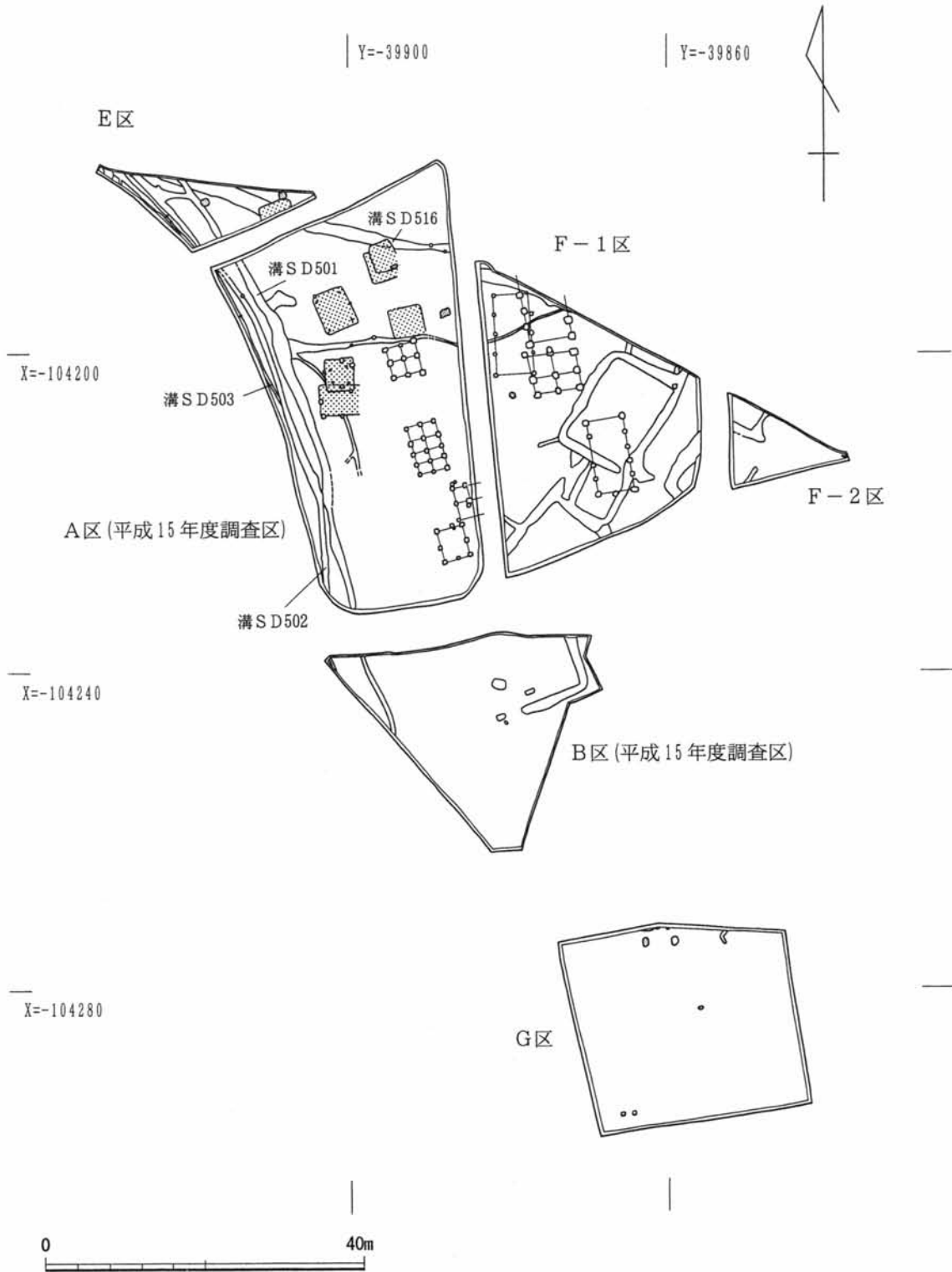
調査地は、遺跡範囲の北東側にあたり、第3次調査のA・B地区に隣接した地点である。調査地は、大きく3か所に分かれており、調査区名は、北から順にE・F(1・2に細分)・G地区とした(第10図)。

E・F-1地区の標高は、現地表面で約100mである。F-1地区の東側に隣接する一段低い東側のF-2地区とは、約0.5mの高低差がみられる。遺跡の東側は、周辺の田畑も同様におおむね西から東南の方向に向かって低く造成されている。

現地表面が最も高いE・F-1地区は、平成15年度の調査で弥生時代～中世にかけての遺構を検出したA地区に隣接し、また、その約50m南側に設定したG地区は、平成15年度の調査で方形周溝墓や溝などの遺構を検出したB地区に隣接していることから、今回の調査地においても同時



第9図 馬路遺跡調査地位位置図(1/1,000)



第10図 調査区配置図

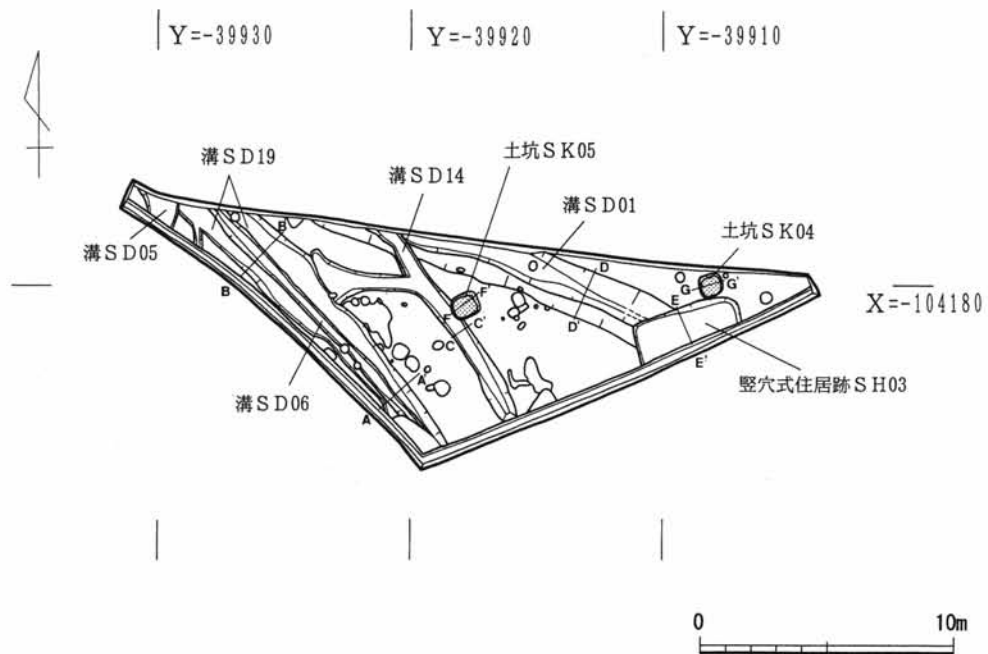
期の遺構が検出されることが予想されたため、G地区において京都府教育委員会が試掘調査を行った。その結果、遺構が存在することが確認されたため、面的な調査を行なうこととなった。

調査は、まず重機による掘削作業で耕作土と床土を分けて掘削し、遺構検出面上面まで掘削したのち、人力による遺構精査と遺構の掘削作業を行なった。

各調査区での調査概要は以下のとおりである。

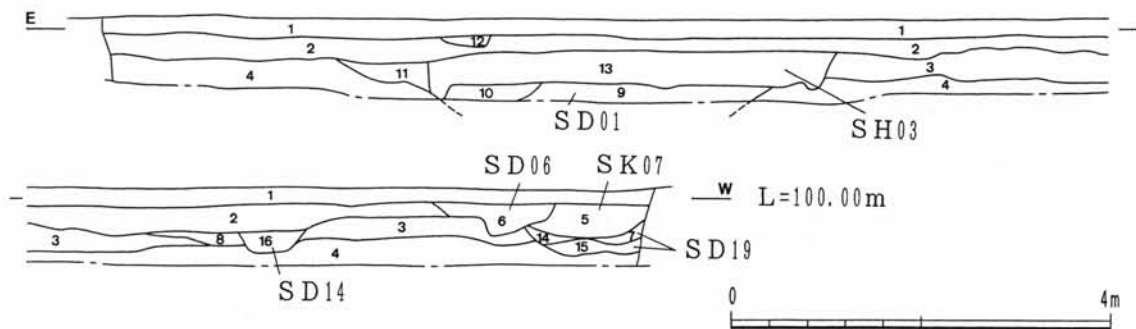
(1) E地区(第11~14図)

E地区は、平成15年度の調査区であるA地区の北側に設定した調査区である。遺跡範囲の北限



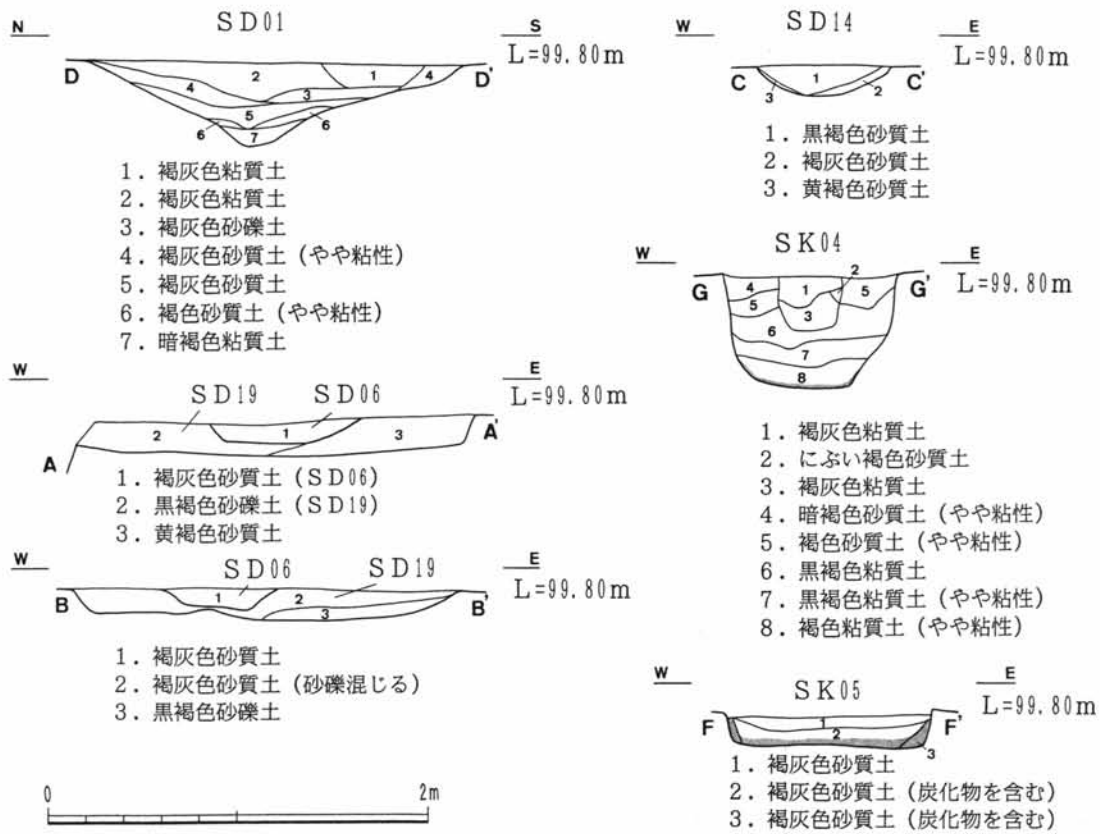
第11図 E地区遺構配置図(1/300)

南壁土層断面

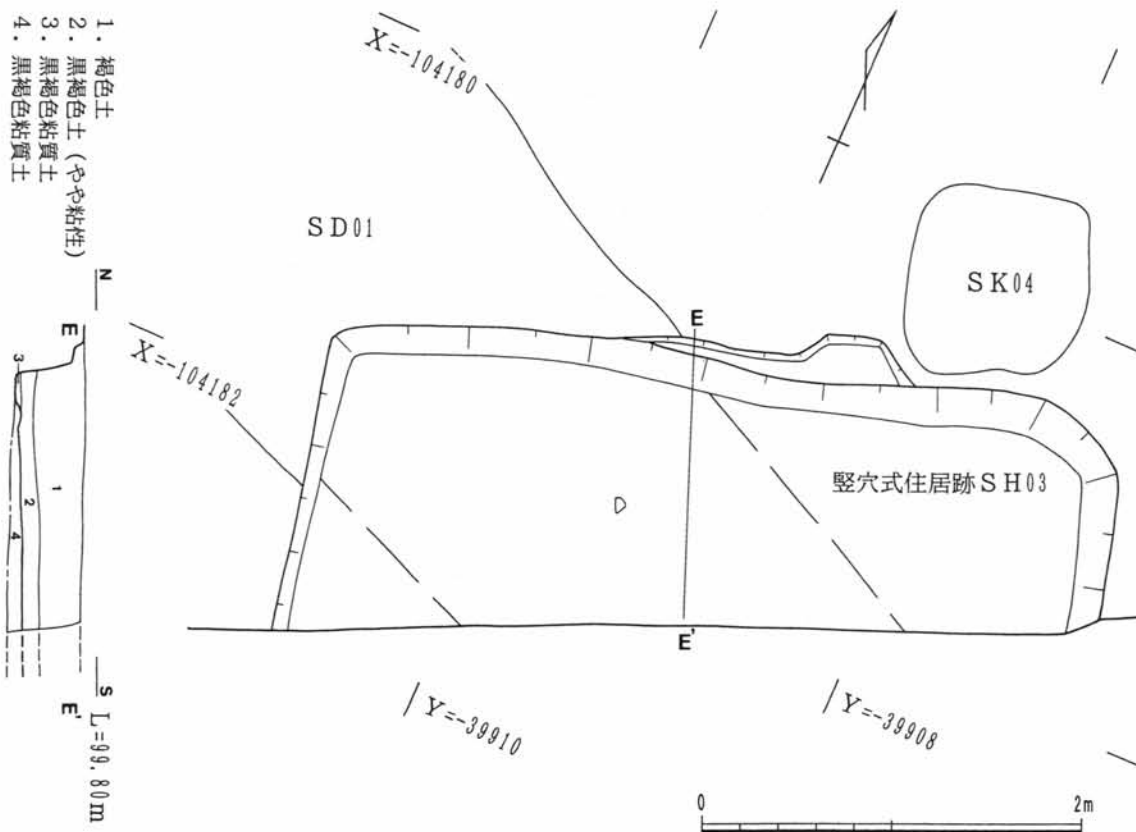


- | | |
|-----------------------|-------------------|
| 1. 耕作土 | 9. 暗褐色粘質土 (SD01) |
| 2. 褐色粘質土 (鉄分・マンガン混じる) | 10. 黒褐色粘質土 |
| 3. 明褐色粘質土 | 11. 暗褐色粘質土 |
| 4. 黒褐色粘質土 (粘性あり) | 12. にぶい黄褐色粘質土 |
| 5. 灰褐色粘質土 | 13. 褐色土 (SH03) |
| 6. 褐灰色粘質土 | 14. 褐灰色砂質土 (SD06) |
| 7. 暗褐色粘質土 (SK07) | 15. 黒褐色砂礫土 (SD19) |
| 8. 灰褐色粘質土 | 16. 黒褐色砂質土 (SD14) |

第12図 E地区南壁土層断面図



第13図 E地区検出遺構土層断面図



第14図 E地区縦穴式住居跡SH03平面・断面図

であることから、遺跡の範囲内に逆三角形の調査区を設置することとなった(第11図)。

この調査区での遺構は、耕作面である現地表面から約0.4mの深さの明褐色粘質土層上面で検出した。遺構面までの基本的な層序は、上層から、現在の耕作土・床土・その直下が遺構を検出した明褐色粘質土層となる(第12図)。

調査の結果、検出した遺構は、弥生～古墳時代の遺構、飛鳥～奈良時代の遺構、平安時代以降と思われるものの時期を特定できない遺構に大きく分けられる。

弥生～古墳時代の遺構としては、中期の遺物が出土した溝S D19、後期の遺物が出土した溝S D01 aや溝S D14、竪穴式住居跡S H03を検出した。飛鳥～奈良時代の遺構では、東西方向の溝である溝S D01 bや南北方向に流れる溝S D06などを検出した。また、平安時代以降の遺構と思われるものでは、土坑S K04、土坑S K05を検出した。検出した遺構のなかで、新しい時期の遺構については、溝や柱穴などの遺構の深さが浅く、後世に少なからず削平を受けていると考えられる。

また、E地区で検出した遺構は、さらに北へと続いており、遺跡とされている範囲の北限よりさらに北側へと広がっていることが確認できた。

①弥生～古墳時代

溝S D01 a 調査区の北端で検出した東西方向の溝である。この溝は、幅約2.1m、深さ約0.45mを測る。溝の断面形状は、逆三角形を呈する。土層断面で溝の堆積状況を確認した結果、上層に古式土師器などを含む幅約0.5m、深さ約0.1mの溝状の層(第13図の土層番号1)が確認でき、後世に掘り込まれた溝であることがわかったため、これを溝S D01 bとし、下層の溝を溝S D01 aとした。

弥生時代の遺物が出土する層は、第13図の土層番号2～6に相当するがおおむね下層部分から出土した。出土した遺物は、弥生時代後期前半に属する土器などであった。この溝は、昨年度の調査区であるA地区の北限で検出した東西方向の溝S D516の西延長にあたる。

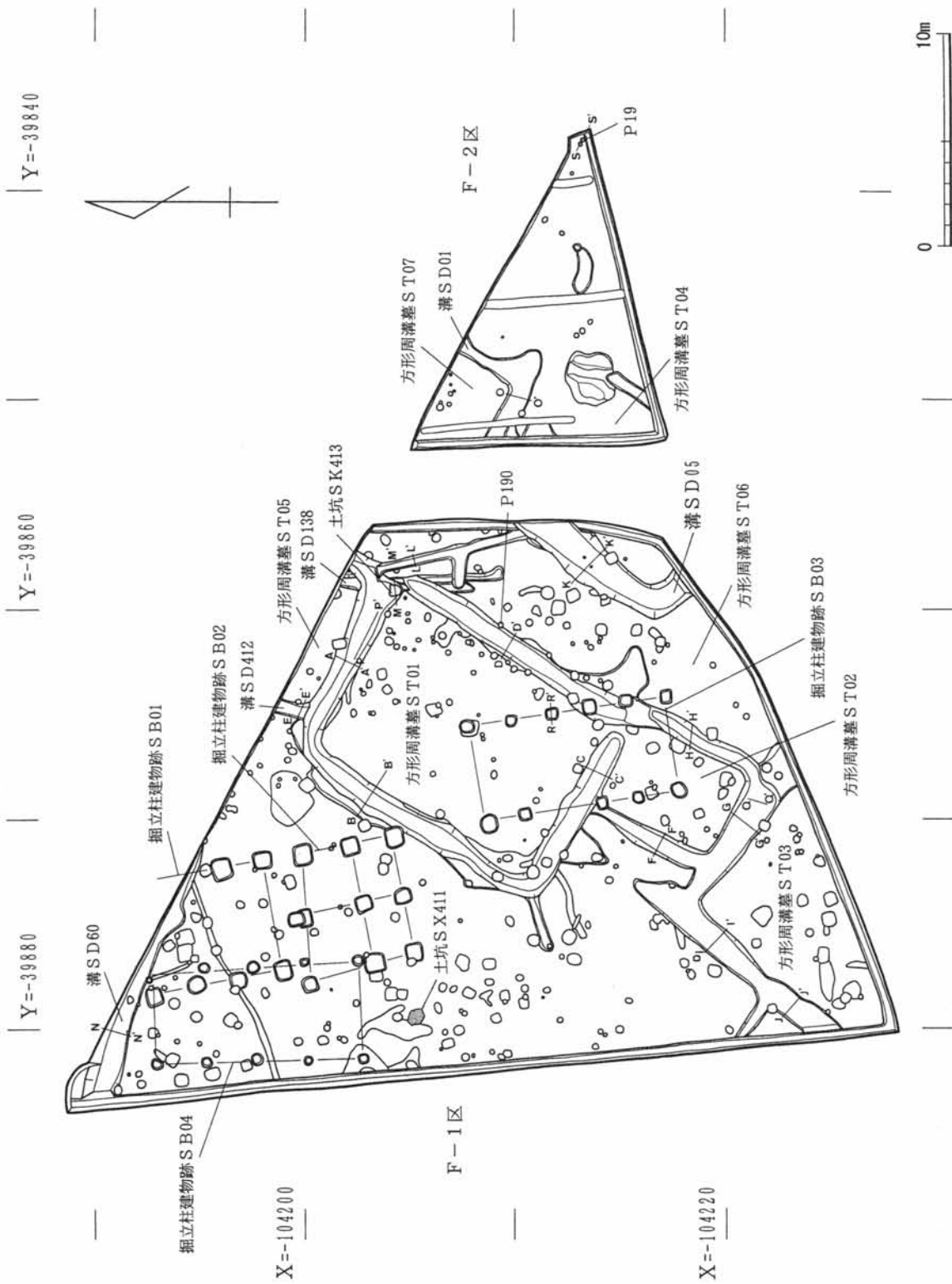
溝S D14 この溝は、調査区の中央で検出した幅約0.7m、深さ約0.15mを測る南北溝である。この溝は、A地区で検出した南北方向の溝S D501の北延長部にあたる。

この溝の埋土からは、弥生土器が出土しており、昨年度の調査概要では、溝S D501は出土遺物が少なく時期不明と報告されていたが、今回の調査で弥生時代後期の溝であることが確認できた。

溝S D19 この溝は、調査区の東端で検出した幅約2m、深さ約0.2mを測る南北溝である。この溝は、A地区で検出した南北方向の溝S D503の北延長部であると考えられる。出土した遺物から、弥生時代中期に属するものと思われる。

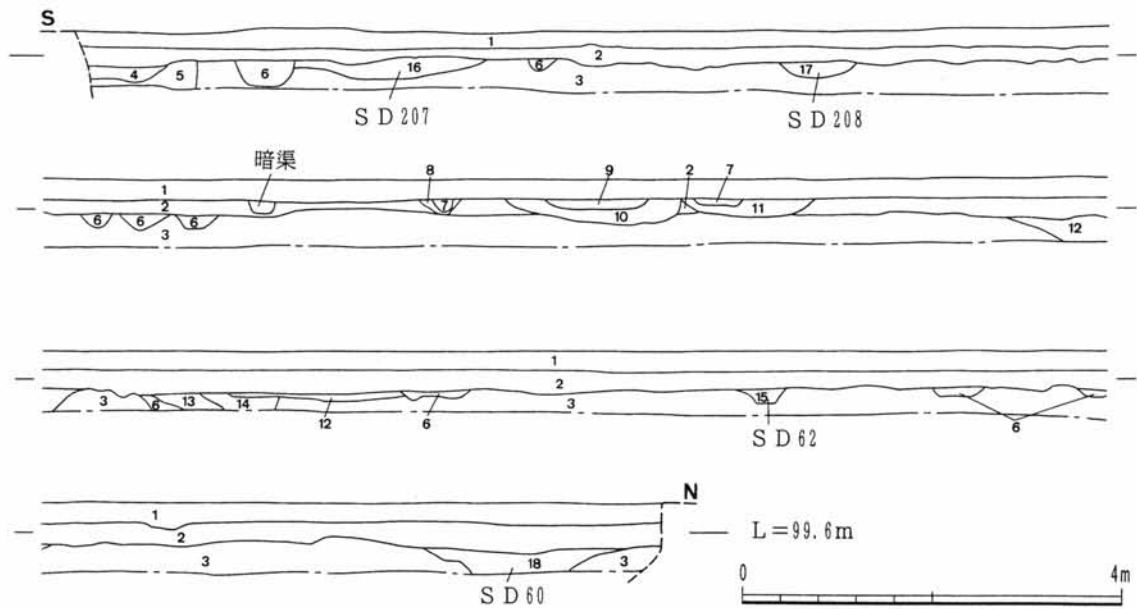
昨年度の調査概要では、溝S D501と溝S D503は平行していることから同時期の可能性が高いと考えたが、溝S D14(=S D501)が弥生時代後期、溝S D19(=S D503)が弥生時代中期であることが判明した。

竪穴式住居跡S H03 調査区の東端で検出した一辺約4.3mを測る方形を呈する住居跡である。



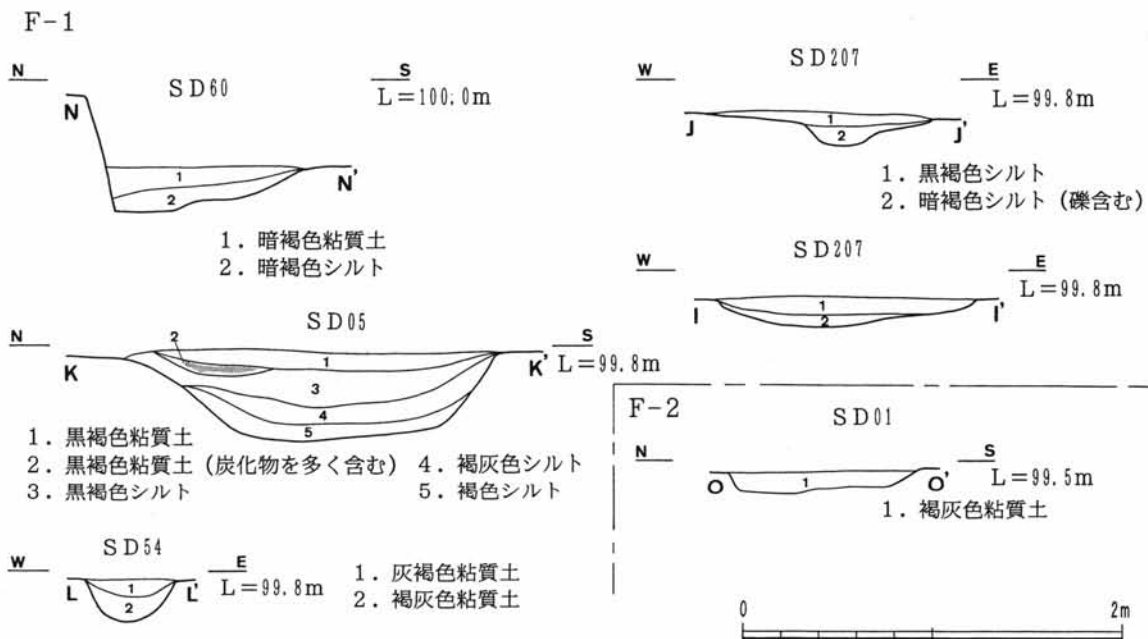
第15図 F-1・2地区遺構配置図(1/300)

F-1 西壁土層断面

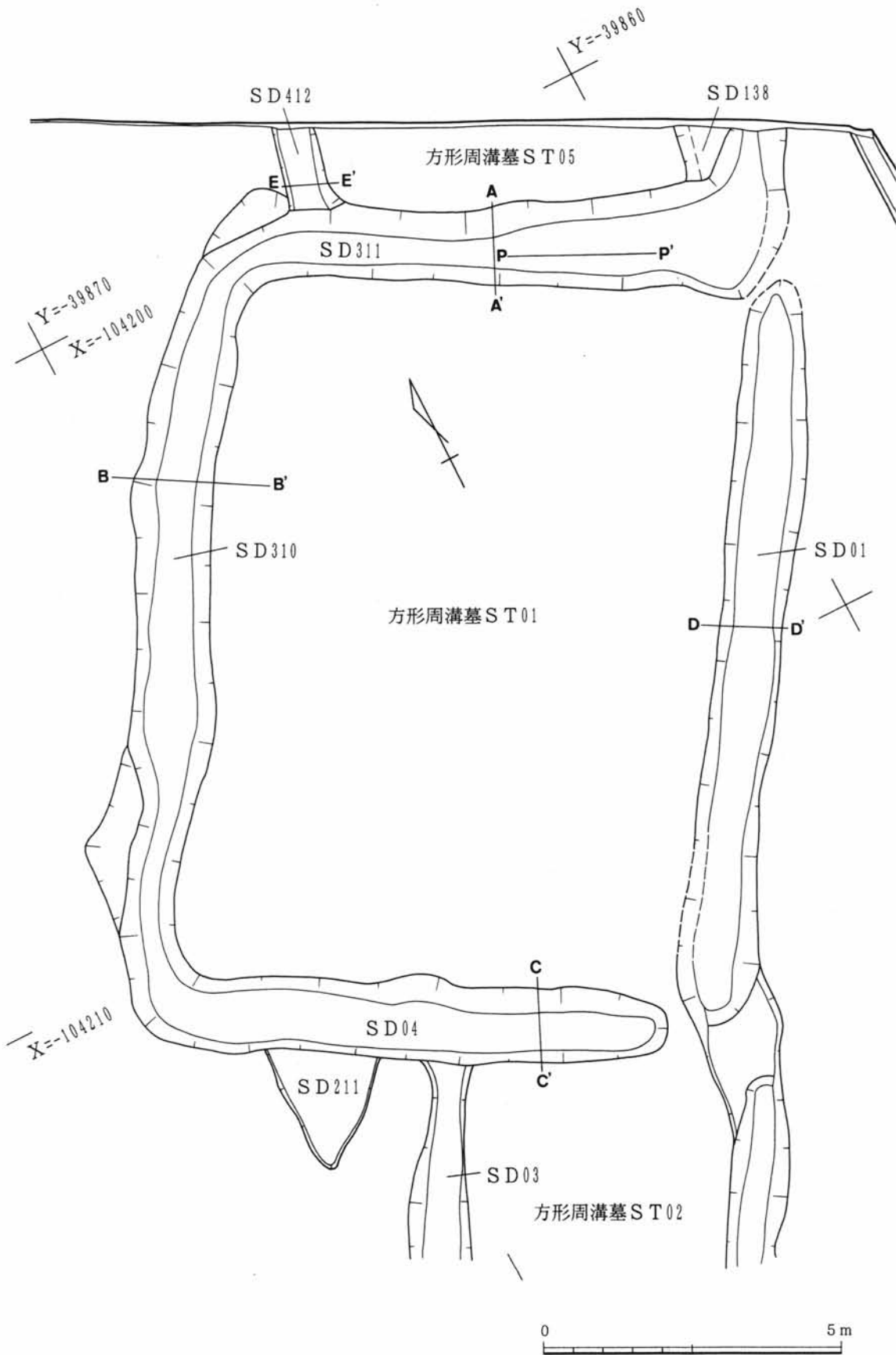


- | | |
|--------------------------|------------------------------|
| 1. 耕作土 | 10. 灰黄褐色粘質土 (炭少量混じる) |
| 2. 灰褐色粘質土 (1~3cmの礫少量混じる) | 11. 黒褐色粘質土 |
| 3. 褐色粘質土 (1~5cmの礫少量混じる) | 12. 暗褐色粘質土 (褐色粘質土ブロック含む) |
| 4. 褐色土 (5mm~1cmの礫多く含む) | 13. にぶい黄褐色粘質土 (10cm程の礫少量混じる) |
| 5. 褐色土 (1~5cmの礫大量に含む) | 14. 暗褐色粘質土 |
| 6. 黒褐色粘質土 (やや粘性) | 15. 褐色粘質土 (粘性あり) |
| 7. 黒褐色粘質土 | 16. 黒褐色シルト (SD207) |
| 8. 褐色粘質土 | 17. 黒褐色シルト (SD208) |
| 9. 灰褐色粘質土 (焼土、炭混じる) | 18. 暗褐色粘質土 (SD60) |

第16図 F-1地区南壁土層断面図



第17図 F-1・2地区検出遺構土層断面図

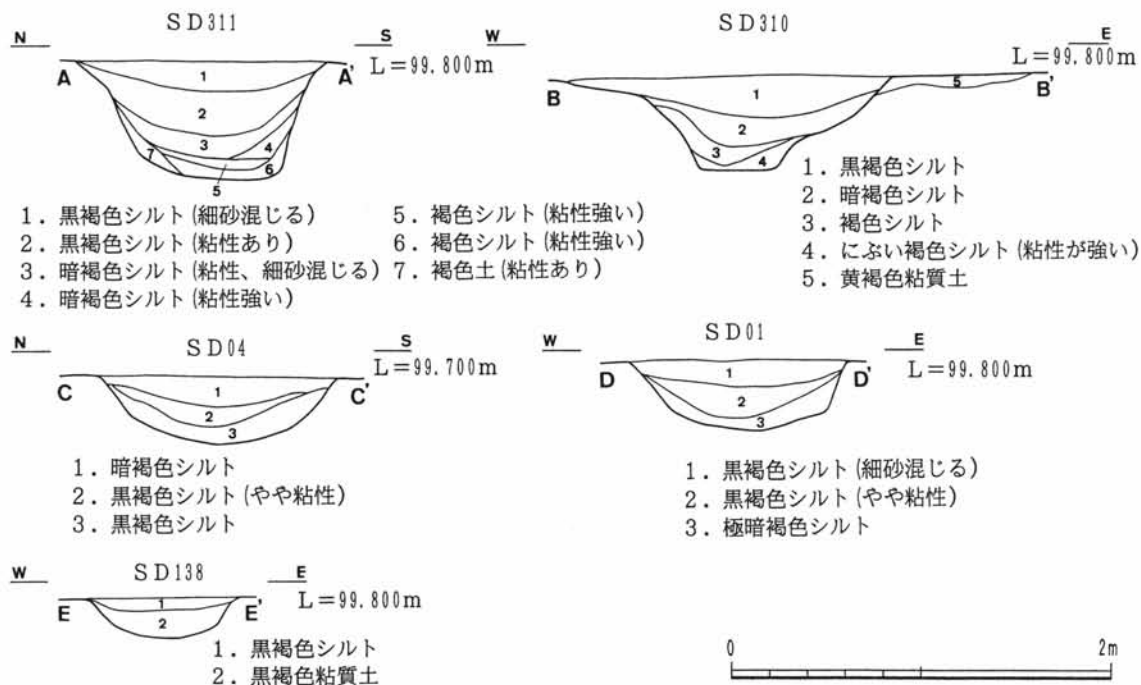


第18図 方形周溝墓ST01平面図(1/100)

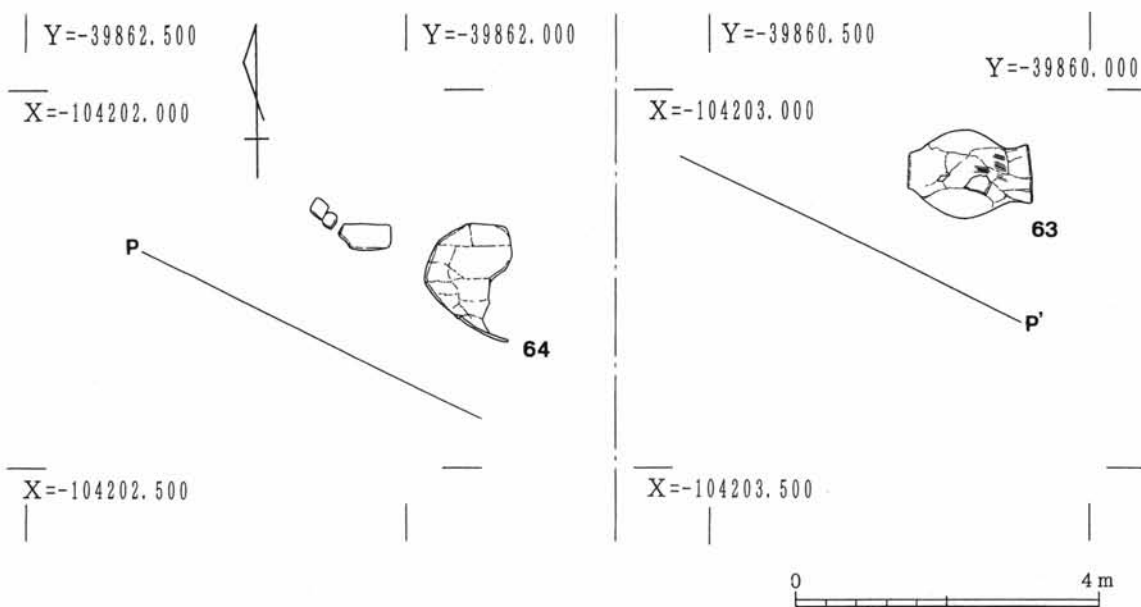
遺構検出面から床面と思われる層の上面までは、約0.3mの深さを測る。

今回の調査区内では、SH03の北側半分のみを検出にとどまった。そして、昨年度の調査区であるA地区においても検出できなかった。北辺の長さから住居跡の規模を考えると、南側半分はA地区とE地区との間に設けられている畦の範囲内に収まると想定することができる。

この住居跡内の堆積している層の下層部分は湧水量が多く、床面の認識が困難であったために周壁溝や支柱穴は平面的には検出できなかった。出土遺物から、住居跡の時期は古墳時代前期に属すると思われる。また、遺構の切り合い状況から、溝SD01bよりは新しい時期であることが確認できた。



第19図 方形周溝墓S T01周溝土層断面図



第20図 方形周溝墓S T01周溝SD311遺物出土状況図

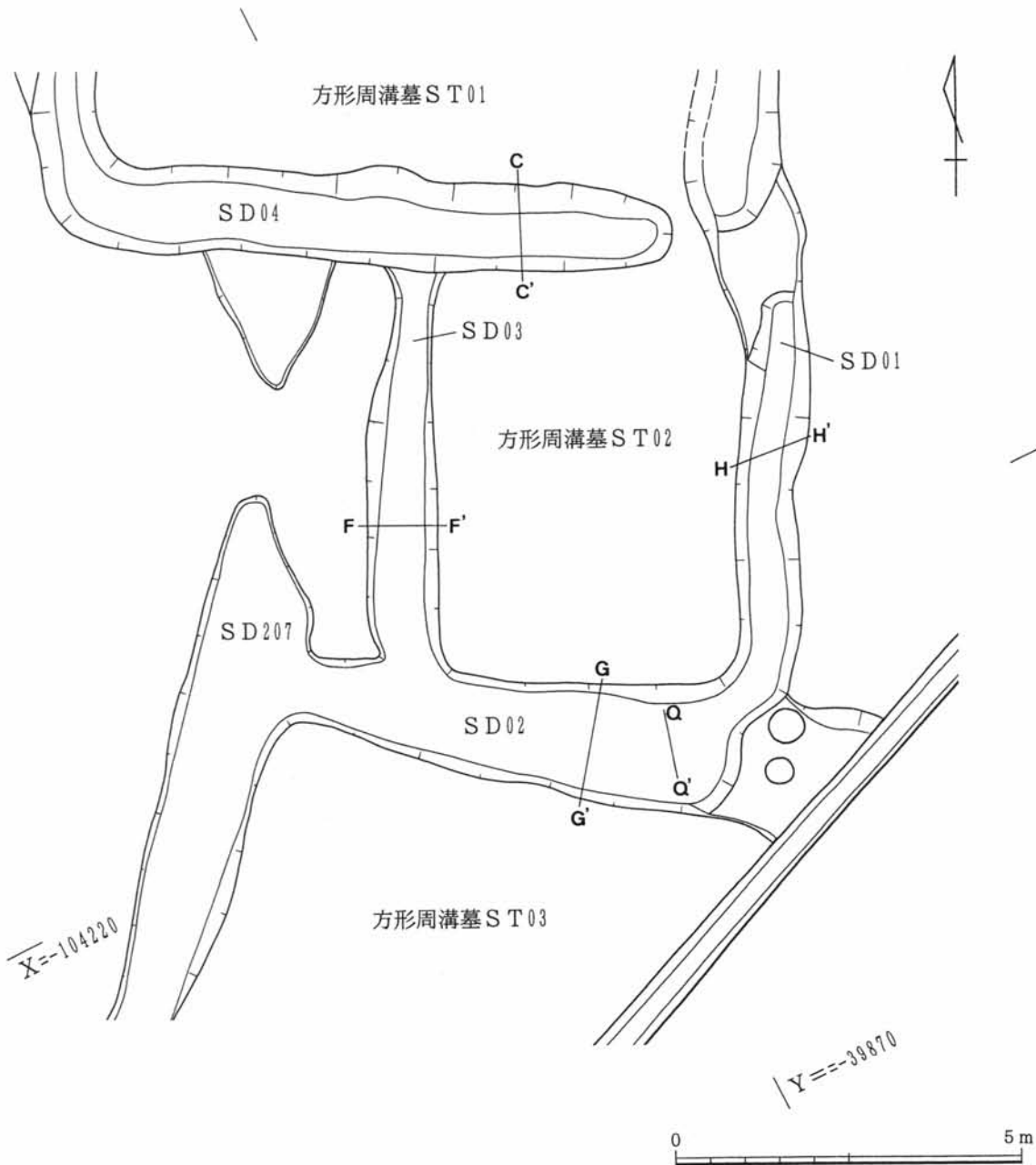
②飛鳥～奈良時代

溝SD06 最大幅約0.35m、深さ約0.1mを測る南北溝である。この溝は溝SD19の中央に掘り込まれた溝である。この溝からは、明確な時期を示す遺物が出土しておらず時期は不明であるが、弥生土器は出土せず、少量ではあるが須恵器の破片が出土している。

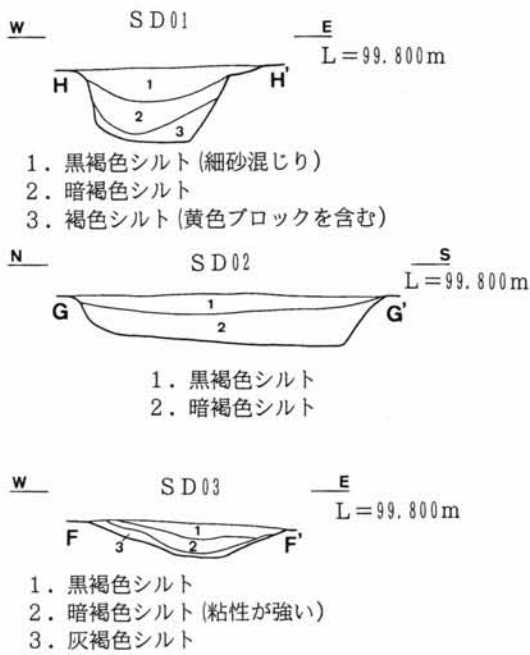
③時期を特定できない遺構

土坑SK04 竪穴式住居跡SH03の北側で検出した、一辺が約0.9mを測る方形の土坑である。深さは約0.6mを測り、底部には炭が薄く堆積していた。土坑内からは、土錘などが出土した。

土坑SK05 溝SD14の東側で検出した、一辺が約1mを測る方形の土坑である。深さは約0.15mを測り、底部には炭化物を含む炭が堆積していた。また、土坑の壁面は、焼けて赤く変色



第21図 方形周溝墓ST02平面図



第22図 方形周溝墓S T02周溝土層断面図

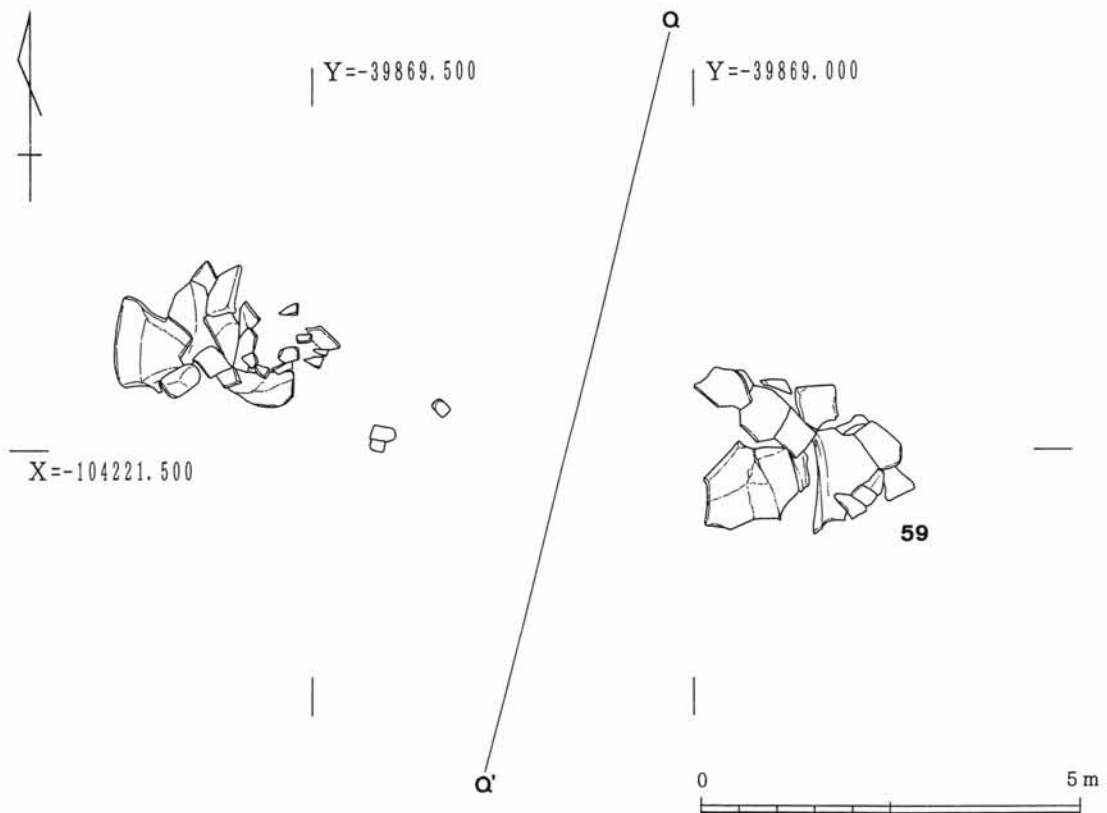
し硬化していた。この土坑は、溝SD14を切り込んでつくられている。この土坑からは遺物は出土しなかったが、土坑SK04と同時期のものと考えられる。

このほかに、調査区内で不定形な土坑を数基検出しているが、出土遺物がなく詳細な時期は不明であるが、おそらく同時期の遺構であると考えられる。

(2) F-1・2地区(第15~31図)

この地区は、平成15年度に調査したA地区の東隣の水田にあたる。今回の調査では、A地区の東側部分で検出した掘立柱建物群の東側でさらなる建物跡の検出が期待された。また、その南側で平成15年度に調査したB地区において方形周溝墓も検出しており、この地点でさらに方形周溝墓が検出されることが予想された。

調査の結果、この地区で検出した遺構は、F-1地区では現地表面から約0.3mの深さで検出し、



第23図 方形周溝墓S T02周溝S D02遺物出土状況図

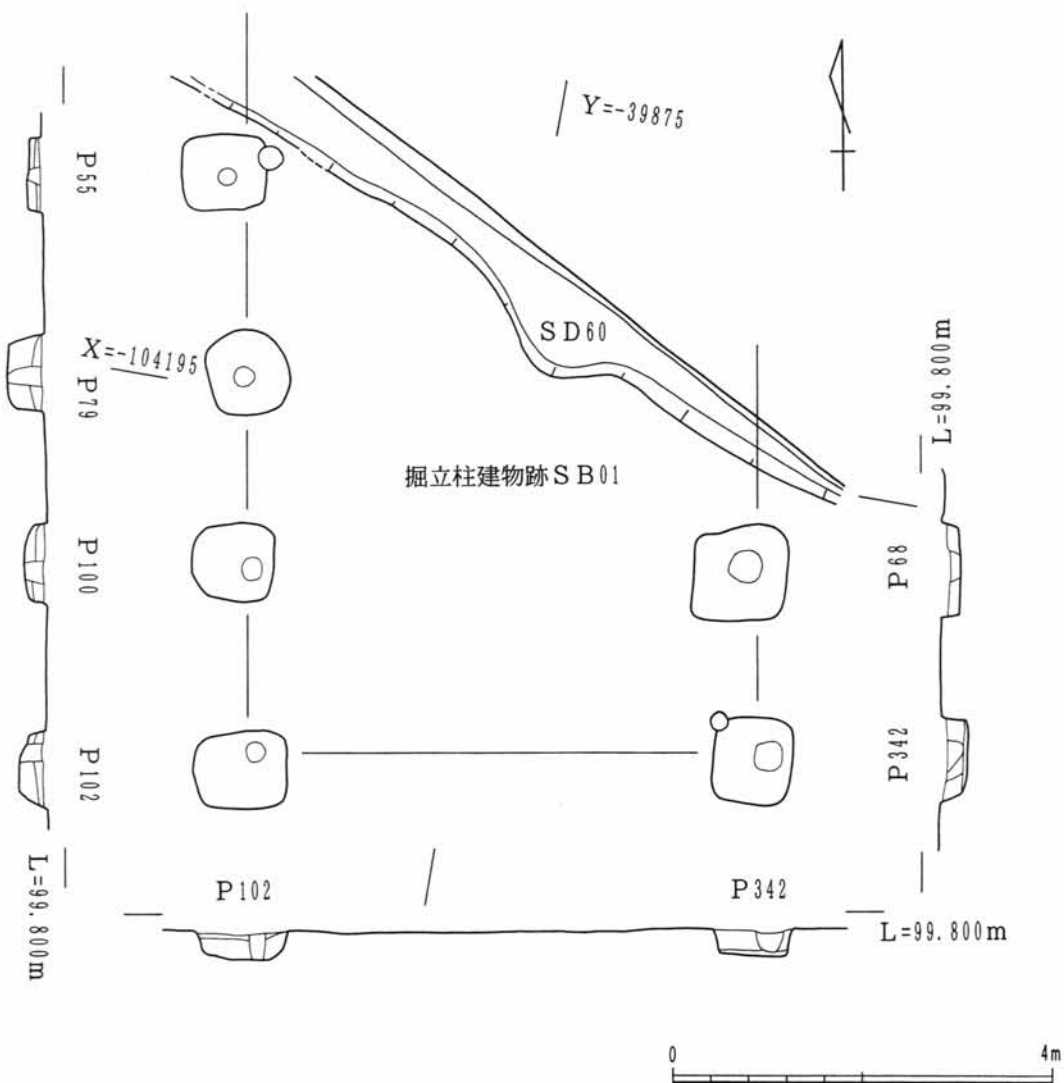
F-2地区では約0.2mの深さで検出した。また、F-1地区とF-2地区の現地表面の比高差は約0.5mあり、F-2地区が低くなっている。それによって、検出した遺構も残存状態が悪く、後世に著しく削平されたことがうかがえる。

遺構面までの基本的な層序は、上層から現在の耕作土、床土、遺構検出面となる褐色粘質土層となる(第16図)。

F-1・2地区で検出した遺構は、弥生時代の遺構と飛鳥～奈良時代の遺構とに分かれる。F-1地区の中央から東側にかけて、方形周溝墓と考えられる周囲を溝で囲まれた方形遺構を検出した。また、東隣に設定したF-2地区においても検出し、合計7基の方形周溝墓(S T01～07)を検出した。また、F-1地区の北西側と中央南側では、掘立柱建物跡を計4棟検出した。

①弥生時代

溝SD60 F-1地区の北端で検出した、幅約1.1m、深さ約0.25mを測る東西方向の溝である。この溝は、A地区の北限で検出した東西方向の溝SD516の東延長にあたる。遺物は、弥生

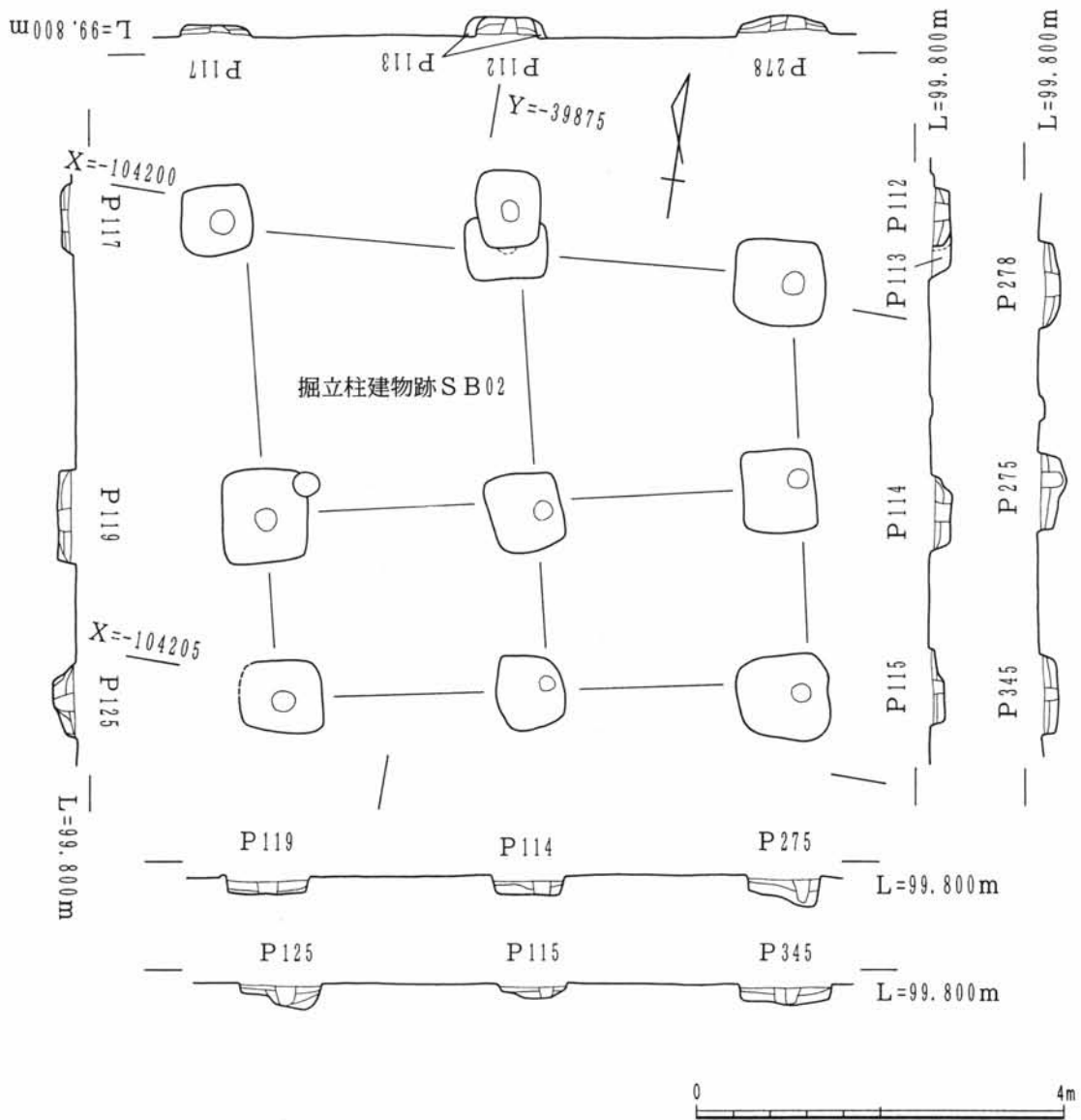


第24図 掘立柱建物跡S B01平面・断面図

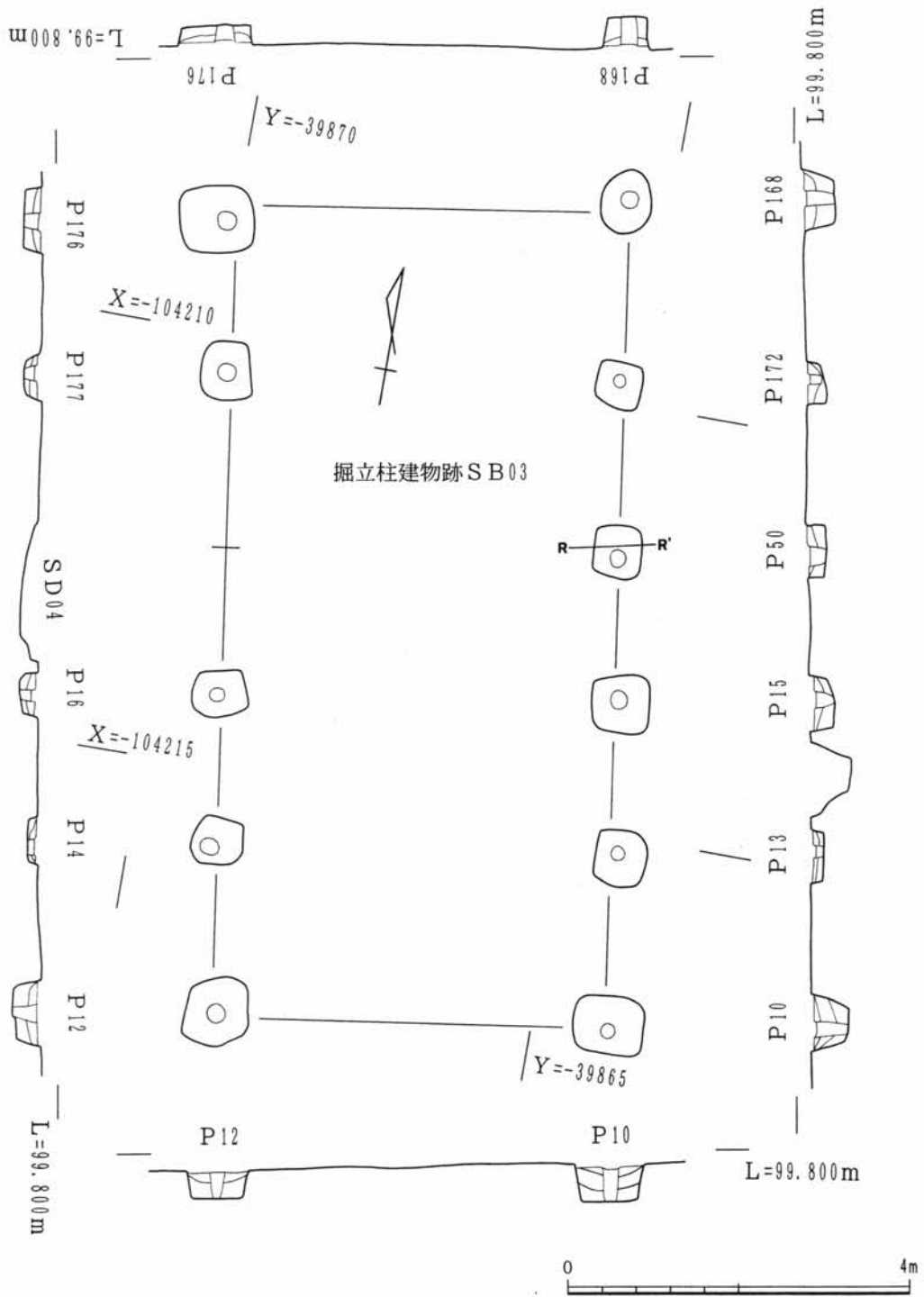
時代中期の土器などが出土した。

この調査区で検出したこの溝SD60と、A地区の溝SD516とE地区で検出した溝SD01はつながっており、一条の溝であることがわかった。また、この溝は今回検出した方形周溝墓の東西方向の周溝と同じ方向でもある。これらのことから、この溝は、弥生時代中期においては、方形周溝墓が集中する南側と未調査である北側とを区画する溝であった可能性が考えられる。

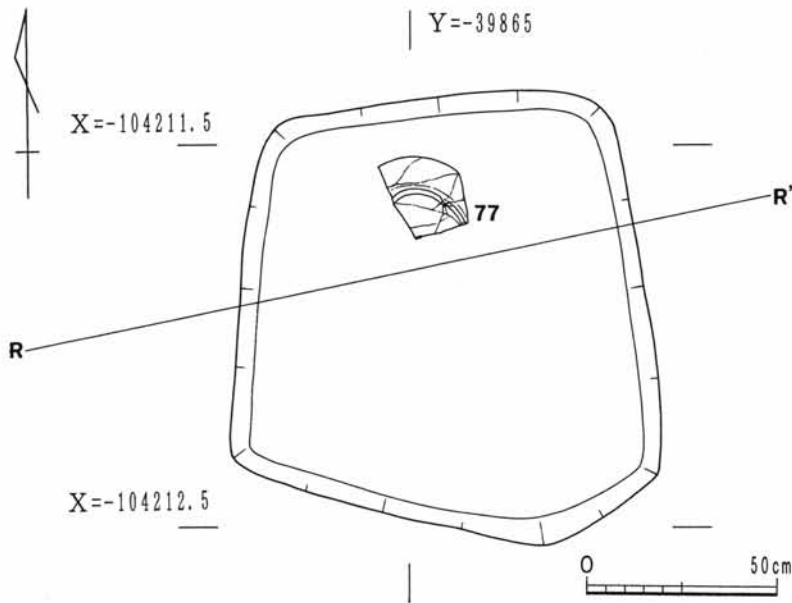
方形周溝墓ST01(第18～20図) F-1地区の北東側で検出した。墳丘の規模は、南北幅約12m、東西幅約9mを測り、墳形は長方形を呈する。墳丘をめぐる周溝は、溝SD01・溝SD04・溝SD310・溝SD311で構成される。墳丘をめぐる周溝は、それぞれ一部が途切れるものの全周する。主な遺物は、溝SD311からは弥生時代中期後半に属する完形の壺(第37図-63)が出土した。また、溝SD01からは弥生時代中期後葉～末に属する弥生土器や石鏃(第39図-108)や石斧(第39図-109)が出土した。



第25図 掘立柱建物跡SB02平面・断面図



第26図 掘立柱建物跡 S B 03平面・断面図



第27図 柱穴P50遺物出土状況図

方形周溝墓S T02(第21～23図) 方形周溝墓S T01の南側に隣接して検出した。墳丘の規模は、南北幅約6m、東西幅約4.5mを測り、墳形は長方形を呈する。墳丘をめぐる周溝は溝S D01・溝S D02・溝S D03・溝S D04で構成される。溝S D01・溝S D04は、方形周溝墓S T01と共有している。溝S D02からは、弥生土器の壺(第37図の59)

などが出土している。

方形周溝墓S T03 方形周溝墓S T02の南側に隣接して検出した。墳丘の規模については、周溝墓が調査区外に広がるため不明である。墳丘をめぐる周溝は、溝S D02・溝S D207で構成され、溝S D02は、方形周溝墓S T02と共有している。

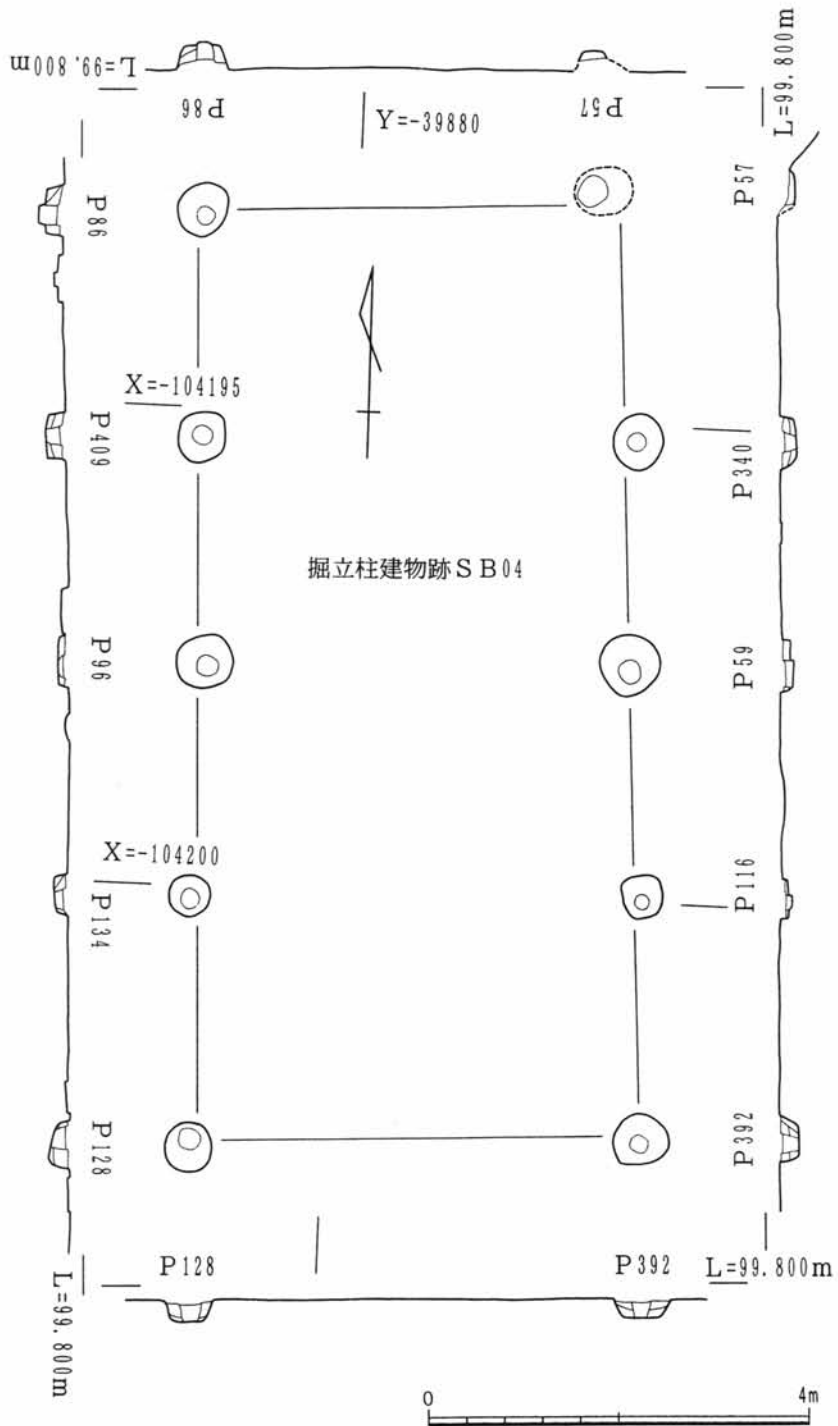
方形周溝墓S T04 方形周溝墓S T01の南側で検出した。周溝墓は、F-1地区とF-2地区にかけて広がり、さらに周溝墓が調査区外に広がるため、規模については不明である。墳丘をめぐる周溝は、F-1地区の溝S D05とF-2地区の溝S D01・溝S D02で構成され、溝S D02は方形周溝墓S T02と共有している。

方形周溝墓S T05 方形周溝墓S T01の北側に隣接して検出した。墳丘の規模は、東西方向は約6mを測るが、東西方向は調査区外に広がっているため不明である。墳丘をめぐる周溝は溝S D138・溝S D412・溝S D311で構成され、溝S D311は、方形周溝墓S T01と共有している。また、溝S D138と溝S D412の溝の深さは浅く、0.15mほどしかなかった。

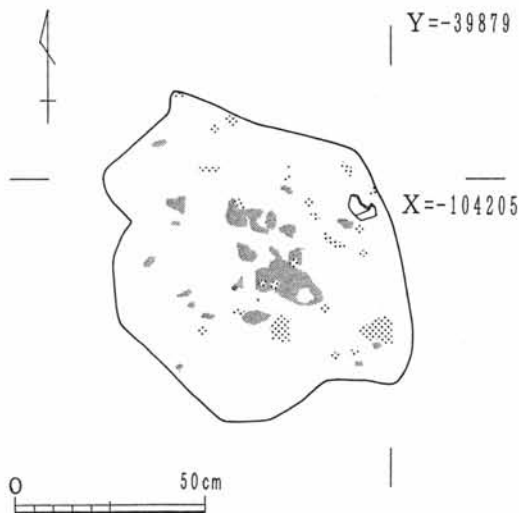
方形周溝墓S T06 方形周溝墓S T02の東側に隣接している。墳丘をめぐる周溝は、溝S D01・溝S D02・溝S D05・溝S D313で構成され、溝S D01は、方形周溝墓S T02と共有している。墳丘の規模については、南北方向は約6mを測るが、東西方向の規模については調査区外に広がっていくため不明である。

方形周溝墓S T07 この方形周溝墓は、方形周溝墓S T04の南側で検出した。北側の調査区外に広がっているため、規模については不明である。

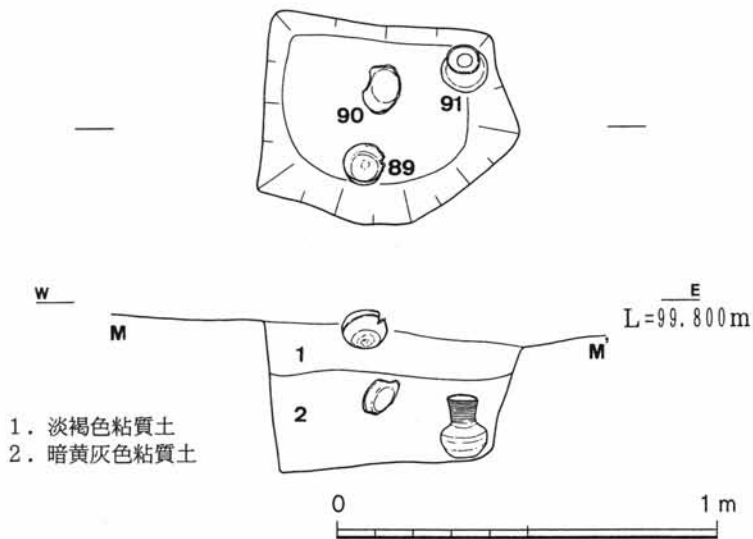
方形周溝墓S T01～07の周溝は、それぞれ一部が途切れるものの墳丘のほぼ全周をめぐる、隣接する墳丘と溝を共有している。周溝の検出状況や溝内の堆積状況から考えると、溝S D01を基準として、まず方形周溝墓S T01が造られ、そののちに溝を共有して周辺の周溝墓が造られたものと推測できる。すべての周溝墓の墳丘頂部はすでに削平されており、埋葬施設は検出できな



第28図 掘立柱建物跡 S B 04平面・断面図



第29図 焼土坑 S X 411 平面図



第30図 土坑 S K 413 遺物出土状況図

った。周溝からは、弥生時代中期に属す弥生土器や石器などの遺物が出土している。

②飛鳥～奈良時代

掘立柱建物跡 S B 01 (第24図) F-1 地区の北西隅に集中している建物群のうちの1棟である。この建物は、1間(約5.4m)×4間(6m以上)以上の規模をもつ。柱穴は一辺が約1mを測り、隅丸方形を呈する。この建物跡は、南北棟と考えられるが、北側にさらに延びていくことから、正確な規模は不明である。また、柱穴からは時期を示す遺物は出土しなかった。

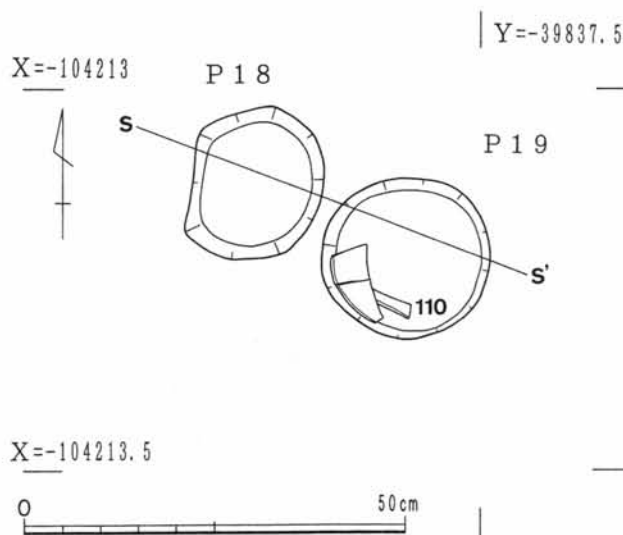
掘立柱建物跡 S B 02 (第25図) この建物跡も同じく F-1 地区の北西隅に集中している建物群のうちの1棟である。この建物は、2間(約5.8m)×2間(約4.6m)の規模をもつ総柱の建物である。柱穴は一辺が約1mを測り、隅丸方形を呈する。また、この建物は、掘立柱建物跡 S B 01 の東側の柱列と軸線をそろえて建てられている。出土した遺物から、奈良時代中頃に属すると考えられる。

掘立柱建物跡 S B 03 (第26図) F-1 地区のほぼ中央部で検出した南北方向の建物である。1間(約4.6m)×5間(約9.5m)の規模である。柱穴は一辺が約0.8mを測り、隅丸方形を呈する。この建物跡は、掘立柱建物跡 1・2 とは少し離れているが、建物の西側柱列を掘立柱建物跡 1・2 の東側柱列にそろえて南側に建てられている。この建物を構成する柱穴 P 50 (第27図)からは、須恵器の杯 B が出土している(第38図-77)。出土した遺物から、奈良時代中頃に属すると考えられる。

掘立柱建物跡 S B 04 (第28図) F-1 地区の北西隅に集中している建物群のうちの1棟であるが、ほかの3棟とは若干方向が異なっている。建物は、南北方向に建てられ、1間(約4.6m)×3間(約9.8m)の規模をもつ。出土遺物から奈良時代中頃に属すると考えられるが、この建物跡の柱穴は、掘立柱建物跡 S B 01・02 の柱穴を切り込んで掘り込まれている。よって、掘立柱建物跡 S B 04 は、掘立柱建物跡 S B 01~03 より新しい時期に建てられた建物であることがわかった。

焼土坑 S X 411(第29図) 不定形を呈する土坑で、埋土中には炭化物や焼け土が混入している。この遺構自体は浅く、深いところでも3cmにも満たないものであった。また、遺物は土師器の小片が数点出土しているが、時期を特定するのは困難である。

土坑 S K 413(第30図) 一辺約0.6mを測る隅丸方形を呈した土坑である。当初、柱穴と認識していたが、柱痕跡がなく、掘り進めていくと、上層で須恵器の椀(第38図-89)と杯



第31図 柱穴P19遺物出土状況図

(第38図-90)の2点が出土し、土坑の底部には須恵器の壺(第38図-91)が立てられた状態で出土した。この土坑の深さは約0.4mを測り、掘立柱建物跡の柱穴に比べると明らかに深く遺構の性格が異なると思われる。この遺構の性格については不明であるが、出土した土器の年代から飛鳥時代前半に属するものであると思われる。

ピット P 19(第31図) このピットは、F-2地区の東端部で検出した遺構である。ピットの深さは、約0.15mと浅いものであった。ピット内の埋土からは、須恵器椀の破片(第41図-110)が出土した。

(3) G地区(第32~34図)

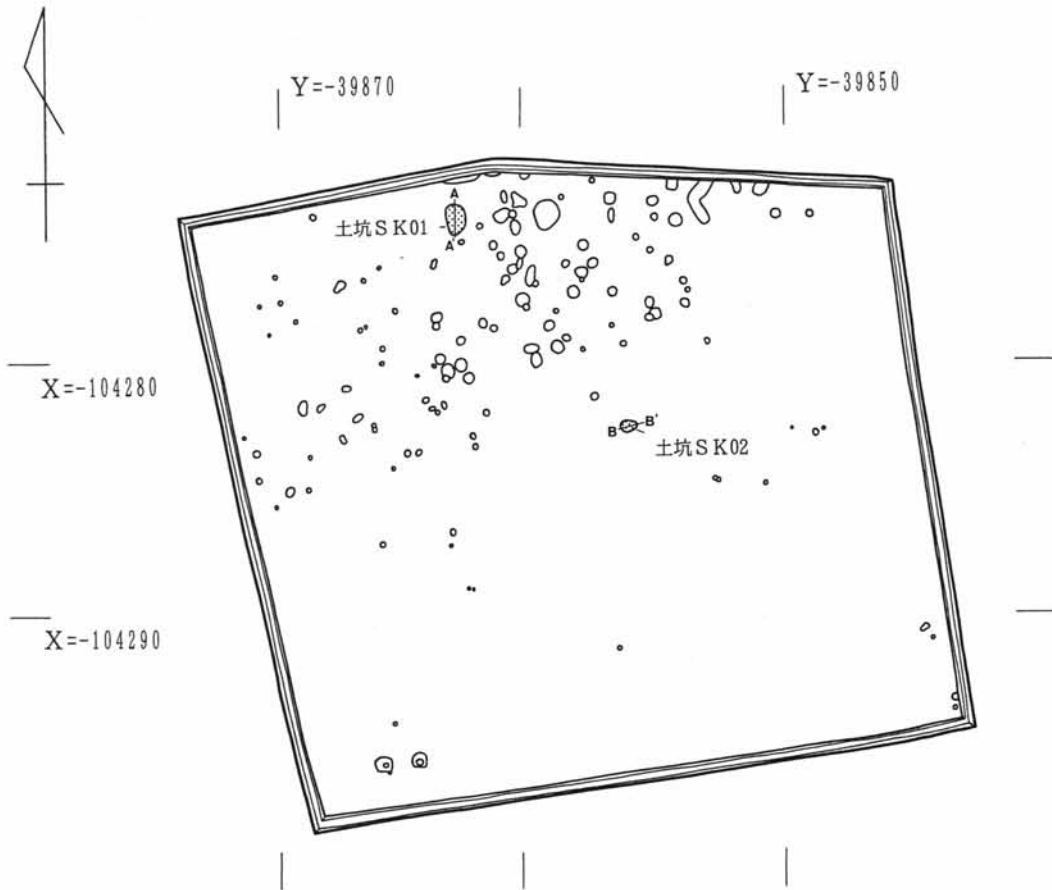
G地区は、昨年度調査区のB地区の南側にあたる。昨年度調査の結果、B地区の南側部分では後世の削平によってほとんどの遺構が残存していなかった。しかしながら、これまでの調査区でも最も南に位置するため、遺構の残存状態や、どの程度の密度で遺構が検出できるのかを確認することを目的に調査が計画された。G地区は、当調査研究センターが調査を行う前に、京都府教育委員会が遺構の有無を確認するために試掘調査を実施した。この試掘調査の結果、遺構が確認されたため面的な調査を行なうこととなった。

基本的な層序は、上層から順に現在の耕作土、床土、遺構検出面となる明褐色粘質土層であった(第33図)。

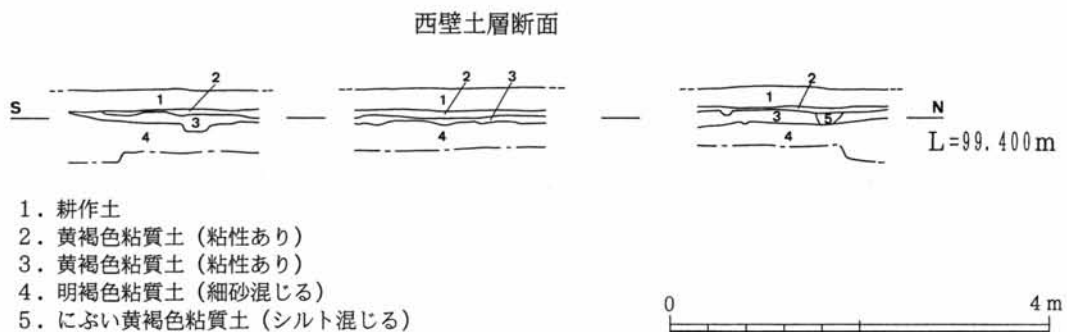
調査の結果、昨年度調査のB地区の南側部分と類似した状況であった。検出した遺構は、削平され密度は希薄ではあったが、B地区よりは遺構の残存状況は良かった。小規模なピットや土坑を検出した。検出した遺構からは、時期を示す遺物は出土しなかった。

遺構検出面の上面からは、ごく少量であるが土師質の細片が出土している。しかしながら、検出した土坑やピットなどの遺構も浅いことから、本来の遺構形成面は高い位置にあったが、後世に削平された可能性が高いと思われる。

土坑 S K 01(第34図) 長径1.3mの楕円形を呈する土坑である。深さは約0.2mを測る。土坑内



第32図 G地区遺構配置図(1/300)



1. 耕作土
2. 黄褐色粘質土 (粘性あり)
3. 黄褐色粘質土 (粘性あり)
4. 明褐色粘質土 (細砂混じる)
5. にぶい黄褐色粘質土 (シルト混じる)

第33図 G地区西壁土層断面図

からの遺物の出土はなく時期は確定できない。また、土坑の底部には炭が堆積していた。

土坑SK02(第34図) 長径0.8mの楕円形を呈する土坑で、深さは約0.15mを測る。出土遺物はなく、時期は不明である。SK01と同様に、土坑の底部には炭が堆積していた。

3. 出土遺物

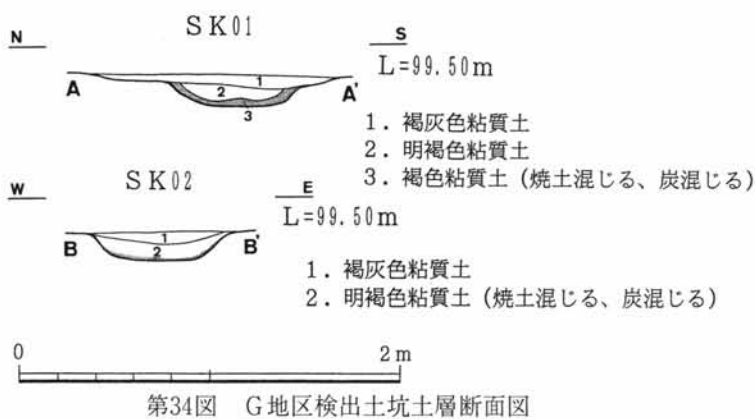
今回の調査で出土した遺物を調査地区ごとに分け、遺構ごとに報告する(第35～41図)。

1～57は、E地区から出土した遺物である。遺物は、弥生～飛鳥時代にかけての土器や土製品

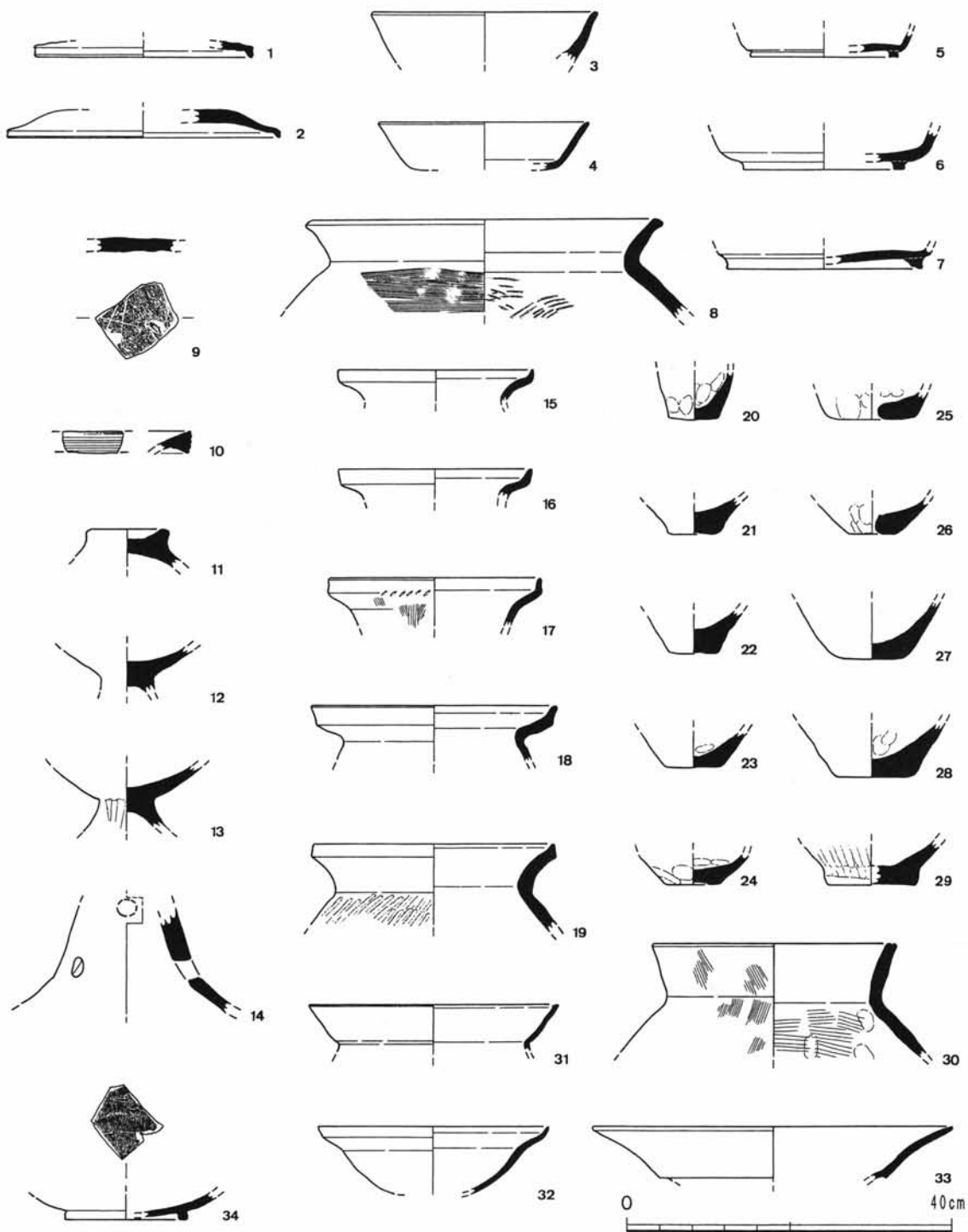
がある。1～8は、遺構精査作業時や現代の水田用暗渠の埋土から出土した遺物である。9～33は、溝S D01から出土した遺物であり、このうち、10～30は溝S D01 aから出土した弥生土器である。器種は、壺、甕、高杯、蓋などがみられる。遺物の時期は、おおむね弥生時代後期前半に属すると思われる。9・31～33は、溝S D01 bから出土した遺物である。9は須恵器杯の底部と思われる。底部外面には、線刻がみられる。31～33は古式土師器(布留式土器か)と思われる。34は、溝S D05から出土した無釉陶器の高台部分で、内面底部に花の線刻がみられる。高台は貼り付け高台である。

35～41は、溝S D14から出土した遺物で、おおむね弥生時代後期前半に属する遺物である。器種は、壺、甕、高杯、蓋などが出土した。41は、弥生土器で蓋と考えられる。出土した破片には、2か所に孔を穿った痕跡が残っていた。甕もしくは無頸の蓋と考えられる。42～45は、溝S D19から出土した遺物である。時期は、弥生時代中期に属するが、42は時期が異なることから混入遺物と思われる。45は、弥生時代中期に属する甕である。46は、土坑S X04から出土した土錘である。47はS K07から出土した底部に穿孔された弥生土器甕である。48～57は竪穴式住居跡S H03から出土した。48は、飛鳥時代の須恵器杯の底部であり、上層からの混入遺物と思われる。49は、土師器高杯の脚部であり、住居跡の時期を示す古墳時代前期の遺物と考えられる。50～56は、弥生時代後期の遺物であるが、住居の床面の認定が困難であったため、その下層で検出した溝S D01からの混入遺物である可能性も考えられる。

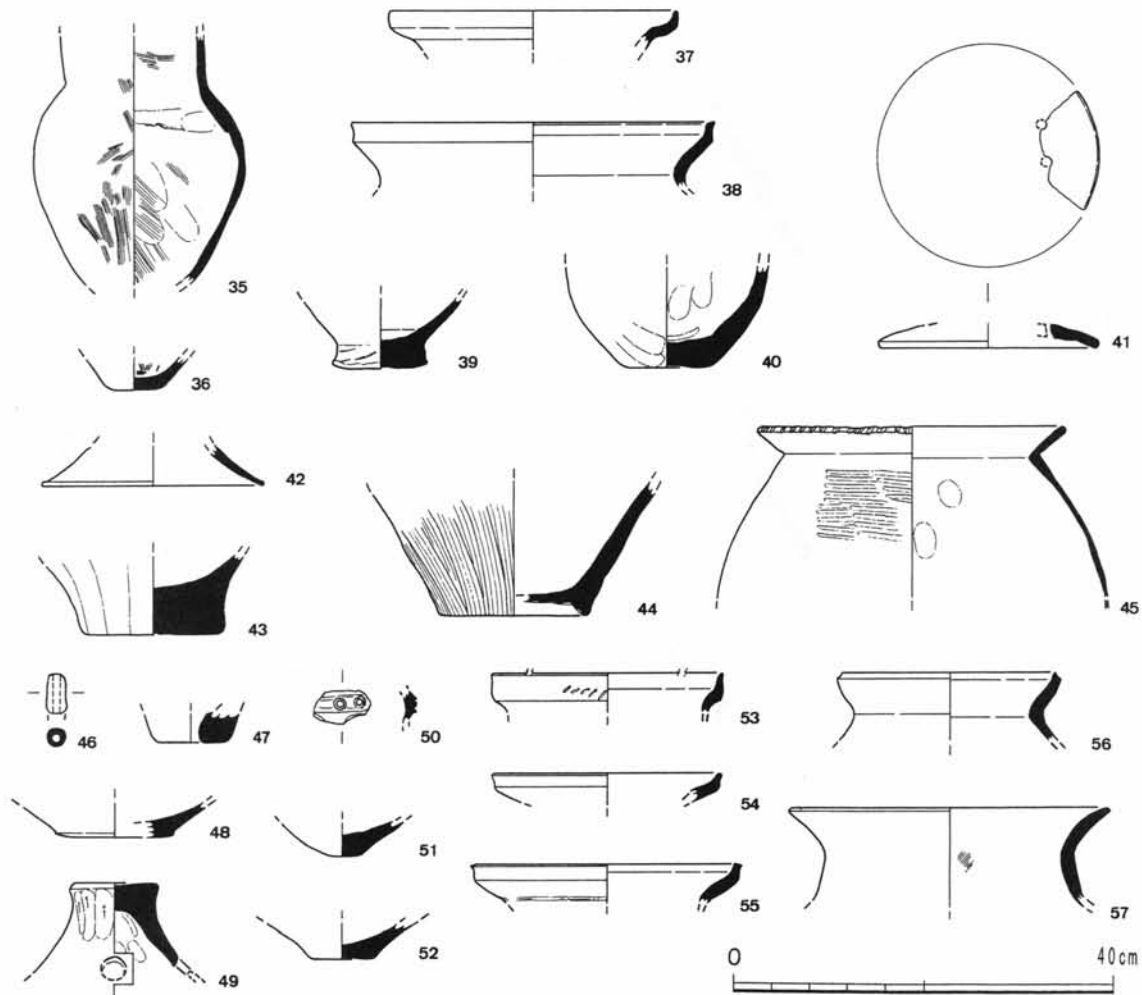
58～107は、F-1地区で出土した遺物である。58～65は、方形周溝墓の周溝から出土した遺物である。58は、溝S D01から出土した弥生土器の壺の底部である。59は、溝S D02から出土した弥生土器の壺の口縁部から体部までの破片で、頸部から体部にかけて2段の波状文がみられる。60・61は、溝S D03から出土した弥生時代中期に属する土器である。60は弥生土器の壺の体部片で、61は甕の口縁部から体部にかけての破片である。62は、甕の口縁部片で溝S D310から出土した。63は、溝S D311から出土した弥生時代中期後葉～末に属する壺で、溝の底部から完形で出土した。64は、溝S D311から出土した弥生土器の壺の頸部片で、頸部に2段の波状文がみられる。この土器も溝の底部から出土した。65は、溝S D138から出土した甕の口縁部片である。これらの方形周溝墓の周溝から出土した弥生土器は、弥生時代中期後葉～末に属する遺物で方形



周溝墓の時期を示す資料になると思われる。66は、溝S D54から出土した弥生土器である。67～70は、遺構精査時に出土した遺物である。67は須恵器の蓋、69は須恵器杯の破片、70は土師質の甑の把手部分である。71は溝S D60から出土した弥生土器の甕の口縁部片である。72～91は、F-1地区で検出した柱穴から出土した遺物である。これらのうち、掘立柱建物を構成する柱穴から出土したものがある。掘立柱建物跡S B02の柱穴からは72・73、掘立柱建物跡S B03の柱穴からは74～82、掘立柱建物跡S B04の柱穴からは83が出土している。掘立柱建物跡の柱穴から出



第35図 E地区出土遺物実測図(1)



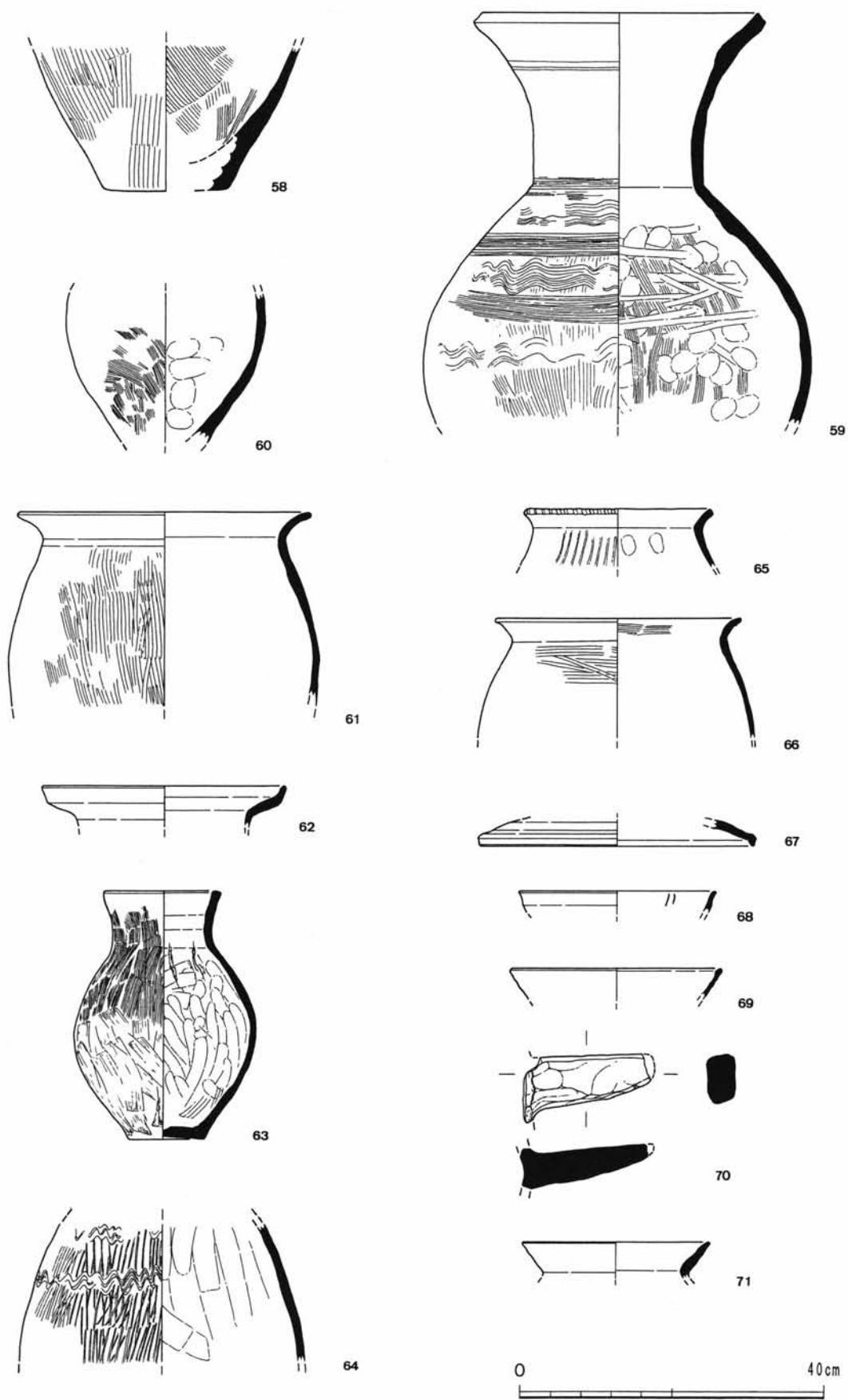
第36図 E地区出土遺物実測図(2)

土したこれらの遺物は、奈良時代中頃に属する。84～87は、ピットP190から出土した遺物である。84は、平安時代中期(10世紀代)に属する須恵器の椀である85は須恵器杯B、86は土師器皿、87は黒色土器の高台部分である。底部の内外面に一方向のミガキ調整がみられる。88は、ピットP307から出土した須恵器の杯である。89・90・91は、土坑SK413から出土した遺物で、飛鳥時代の前半に属するものである。89は、須恵器椀で底部に粗いヘラケズリ調整がみられる。90は、須恵器杯であるが、焼成が不完全である。91は、須恵器の壺である。これら3点は、ほぼ完全な形で出土した。93～107は、遺構検出時や現代の暗渠などから出土したもので、須恵器の杯や土師器の杯や皿、黒色土器、羽釜や播鉢などの陶器、中世以降と思われる瓦などがある。108・109は溝SD01から出土した弥生時代の石器である。108は打製石鏃で、石材は二上山産のサヌカイトである。109は磨製石斧である。

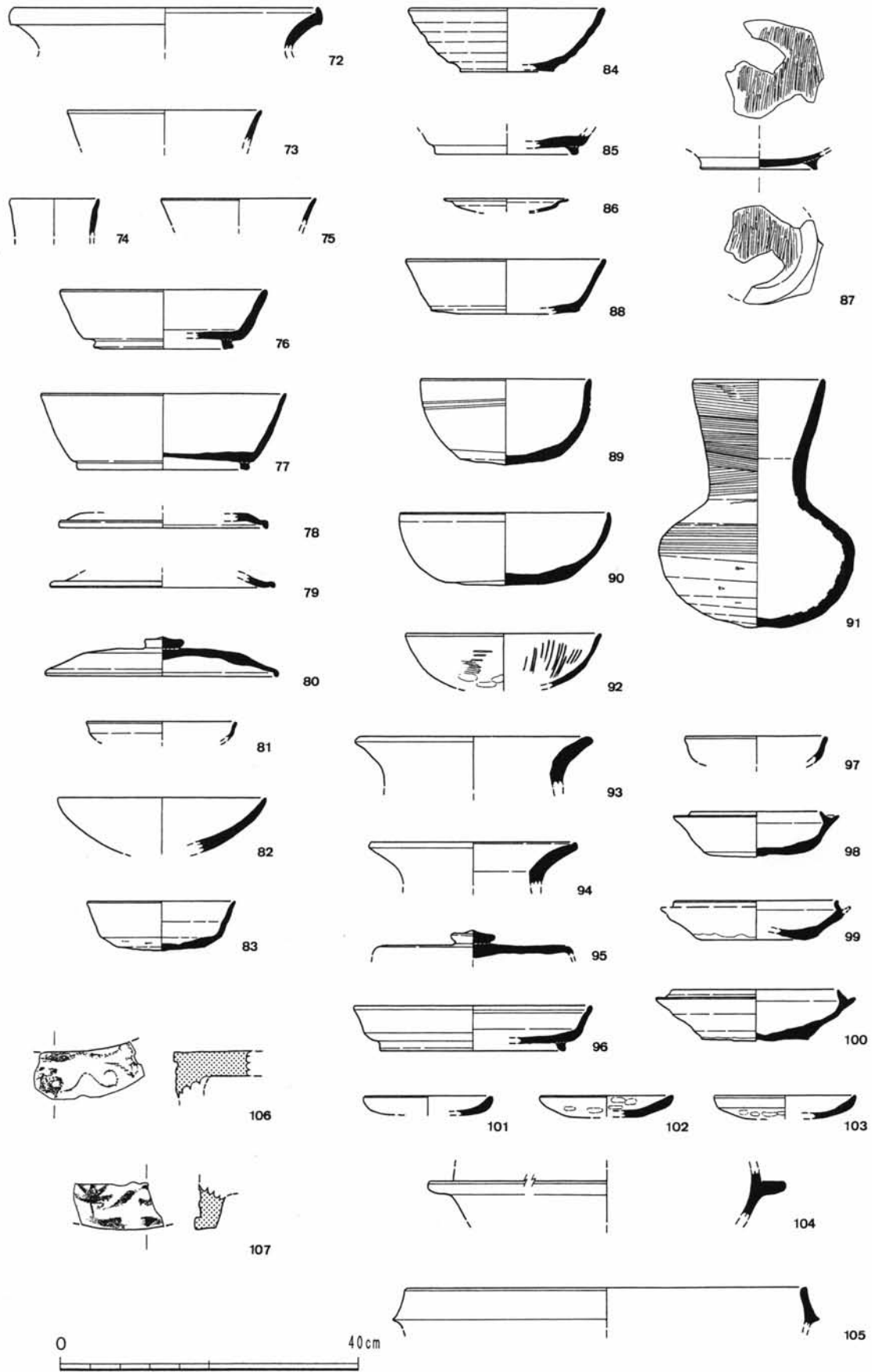
110～114は、F-2地区で出土した遺物である。須恵器の椀や土師器の皿などがある。110は、ピットP19から出土した須恵器椀である。

4. まとめ

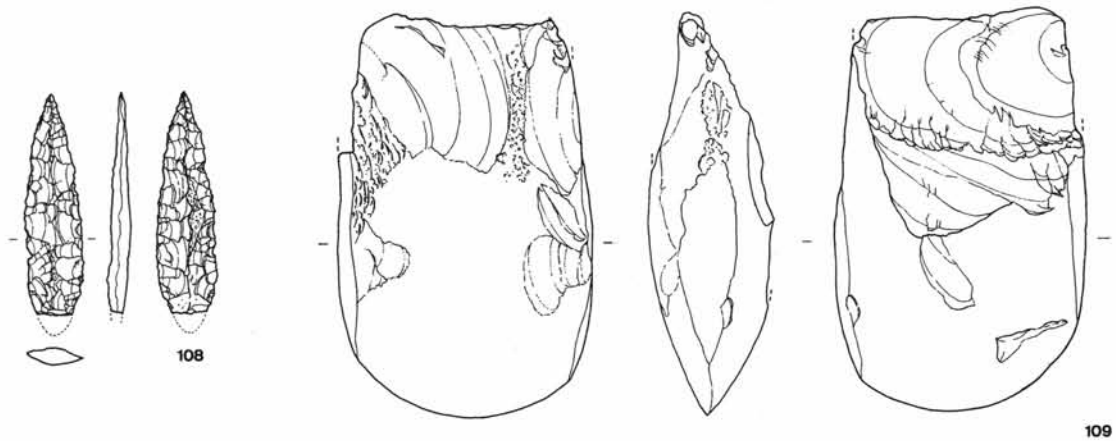
今回の発掘調査の結果、昨年度調査の調査区であるA・B地区で検出した遺構につながる遺構



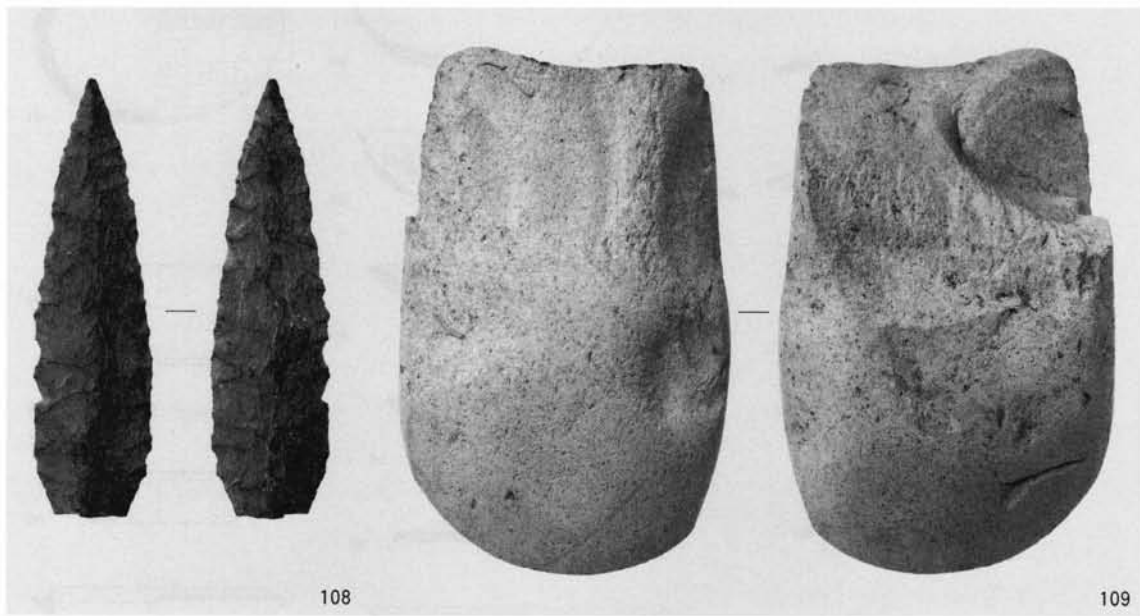
第37図 F-1地区出土遺物実測図(1)



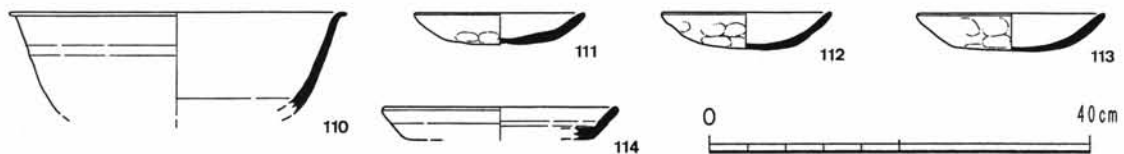
第38図 F-1地区出土遺物実測図(2)



第39図 F-1地区出土遺物実測図(3)



第40図 F-1地区出土遺物



第41図 F-2地区出土遺物実測図

や関連する遺構を確認し、多くの成果を得ることができた。

E地区では、平成15年度調査のA地区で検出した竪穴式住居跡と方向を同じくする古墳時代前期と考えられる竪穴式住居跡S H03や平成15年度に検出した溝S D516の延長である溝S D01などを検出した。また、A地区で検出した南北方向の溝の延長部分についても検出した。この調査

区で検出した遺構は、遺構密度も高く各時期の遺構を確認した。

また、遺構はさらに北へと続いており、現在の遺跡範囲の北限よりさらに北側へと広がることが確認できた。このことから、馬路遺跡の遺跡範囲について再検討が必要である。

F-1・2地区では、平成15年度調査区であるA地区で検出した掘立柱建物跡群に隣接して建物群を検出した。A地区とは建物の時期は異なるが、今回検出した奈良時代中頃の南北棟は方位をそろえて建てられていた。また、今回の調査地の東半分(F-1・2地区)では、隣接する墳丘と周溝を共有する方形周溝墓7基を検出した。

掘立柱建物跡SB01～04は、A地区で検出した建物群に隣接して建てられている。掘立柱建物跡SB01～03は、柱穴から出土した遺物から奈良時代中頃の時期、掘立柱建物跡SB04は、それより新しい時期の建物であることがわかった。A地区とは、若干方位が異なり、時期差があることから幾度かの建て替えが行われたと考えられる。

方形周溝墓は、F-1・2地区で大小の規模はあるが、7基の周溝墓が確認できた。方形周溝墓の周囲をめぐる溝は一部分が途切れるもののほぼ全周している。また、それぞれの方形周溝墓の周溝は隣接する方形周溝墓と共有している。周溝からは弥生時代中期後葉～末の時期を示す遺物が出土した。今回検出した方形周溝墓の周溝がさらに北側、東側にも延びていることから、方形周溝墓を主とする墓域がさらに拡大することと考えられる。また、馬路遺跡の北約200mの地点の池尻遺跡第7次調査においても、弥生時代中期初めの方形周溝墓が5基以上確認されており、この一帯には弥生時代中期初頭～中期後半にかけての墓域が存在していたことが想定される。

G地区では、時期は不明であるが土坑やピットを検出し、後世に削平を受け希薄であるが南側でも遺構が残存することが確認できた。

今回の調査成果やこれまでの調査成果を踏まえて考えると、弥生時代においては、方形周溝墓が遺跡の東側に展開していたようである。また、3地区にわたって検出した東西方向に通る幅約2mの規模をもつ溝SD01(E地区)・溝SD516(A地区)・溝SD60(F-1地区)は、一条の長い溝となり、北と南を区画する溝であったと考えられる。この一条につながる溝からは、中期～後期にかけての遺物が出土している。

飛鳥～奈良時代前期にかけては、A・C・D・E地区に竪穴式住居跡が点在し、奈良時代中頃～平安時代後期では遺跡の北東側であるA・F-1地区で掘立柱建物跡群が形成されており、時期差があることから幾度かの建て替えがうかがえる。そして、それ以降はD地区の焼土坑のように、火を使用した何らかの工房施設があるなど、散在的に各地点で小規模ながら展開していることがわかった。この遺跡は、断続的ではあるが比較的規模の大きな墓域や集落を形成しており、それぞれの時代において利用しやすく重要な場所であったことが想像できる。また、平成15年度調査では、「田中」と書かれた墨書土器も出土しており、何らかの公的な施設が存在していた可能性も考えられる。今後、周辺の遺跡も踏まえて弥生時代の墓域や集落、官衙的な施設の可能性についても検討していく必要がある。

(村田和弘)

(3) 池尻^{いけじり}遺跡第5次

1. はじめに

池尻遺跡は桂川東岸、呉弥山南裾に広がる低位段丘上に位置している。調査地点は、亀岡市馬路町池尻前ノ側に相当する。

池尻遺跡の調査はこれまで、亀岡市教育委員会の調査分を含め、4次にわたり実施され、平成4年と同5年に、当調査研究センターが実施した府道新設に伴う第1次・2次調査では重要な成果が上がっている。遺跡東端では、弥生時代前期の土坑・溝などが検出され、弥生時代前期の墓域である可能性が考えられた。また、遺跡中央から西端にかけては奈良時代の遺構・遺物が検出され、とくに第1次調査の第3調査区では、漆の運搬用に使用されたと考えられる長頸壺、パレットとして利用されたとみられる杯身など多数の漆関連遺物が検出された。また、第2次調査では礎石建物跡や多数の瓦が確認され、「池尻廃寺」として古代寺院の存在が想定されている。池尻廃寺周辺では寺域の確定のための調査が実施されており、奈良時代前葉～中葉にかけて営まれたものと考えられている。今回の調査地は、遺跡東端の第1次調査で弥生時代前期の遺構が検出された第1・第2調査区に近接しており、当該期の遺構・遺物が検出されるものと予想された。

調査は、面的調査を実施するための遺構密度の確認や調査範囲を限定するための試掘調査であり、現地の耕作の都合上、大きくA～Cの3地区に対象地を分割し、各耕作地にトレンチを設定し、遺構・遺物の有無、および現地表から遺構面までの深さを確認する調査を実施した。地権者および耕作者の了承を得られた段階で各トレンチの調査を実施したため、トレンチ番号は原則として掘削順に与えることとした。今回は調査の性格上、原則として遺構掘削は行っていない。また、遺構の記録に関しても、調査の性格上、京都府教育委員会・亀岡市教育委員会が実施する試掘調査と同様、座標などの記録は基本的に実施していない。

現地調査は、平成16年9月6日から重機掘削を実施し、一部、池尻遺跡第7次調査と併行しながら11月5日に全ての調査を終了し、備品などの搬出作業を実施した。調査面積は600m²である。

なお、今回の調査結果から、ほ場整備工事の掘削深度に達せず、遺構面が保護されることが明かになったため、試掘調査段階で調査を終了した。

2. 調査概要

各トレンチの調査成果は以下のとおりである。また、付表に調査トレンチ一覧としてまとめているため併せて参照願いたい。なお、検出遺構平面図は第44～47図、土層図は第48・49図に示すとおりである。

A1トレンチ 床土直下が粗砂および礫の堆積層となっている。遺構・遺物とも検出できなかった。この礫層は、調査対象地内の複数のトレンチで確認され、遺跡形成以前の土石流もしくはは



第42図 調査地位置図(1/1,000)

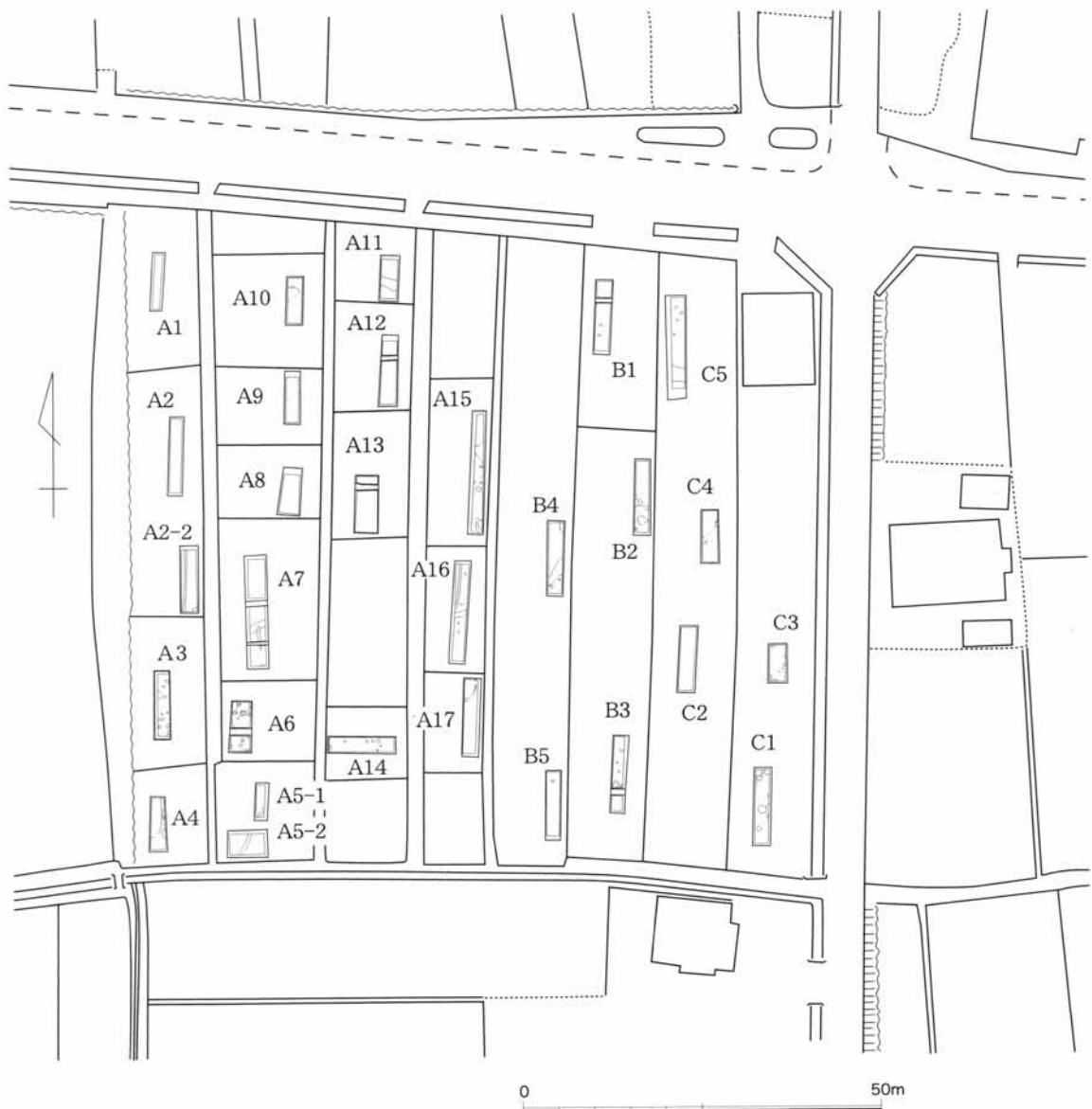
河川堆積層であると考える。

A 2・A 2-2 トレンチ 床土直下が茶褐色細砂を呈しさらに下層には暗茶褐色極細砂(いわゆるクロボク層)が堆積し、包含層を形成している。暗茶褐色極細砂上面で南北方向の溝、土坑などを検出している。遺物は第4層から第50図5・8の弥生土器、25の瓦器椀のほか、土師器・灰釉陶器・瓦器などの小片が出土した。

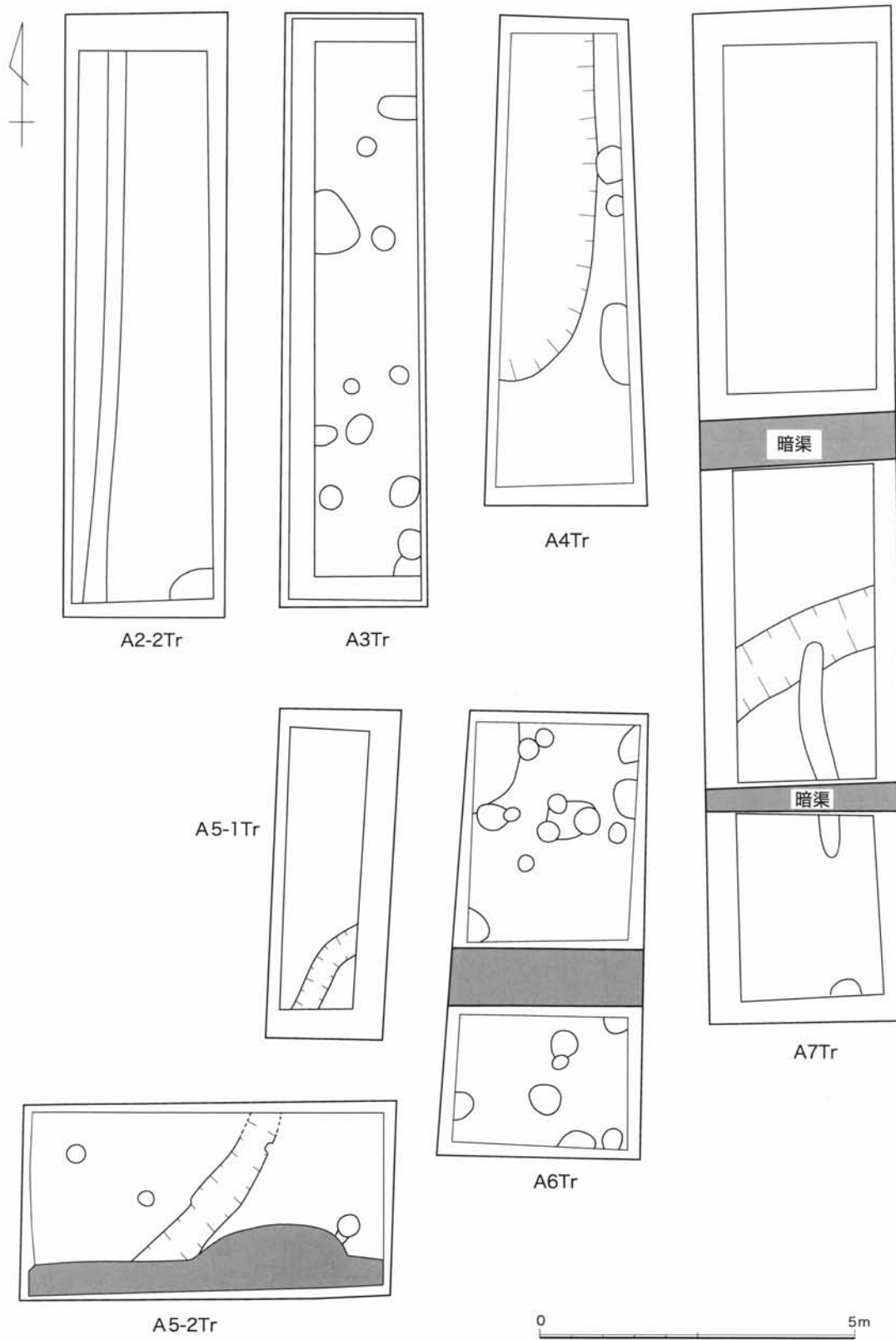
A 3 トレンチ 第5層上面で複数のピット・土坑を確認した。遺物は包含層(第4層)内から第50図10の布留式土器甕小片のほか、弥生土器、瓦器小片が出土した。

A 4 トレンチ 4層上面でピット、土坑状の落込みなどを確認した。遺物は包含層から第50図11・16・21の須恵器、22・26の瓦器、27~29の土師皿、32の灰釉陶器皿、36の瓦質羽釜、緑釉陶器細片などが出土した。

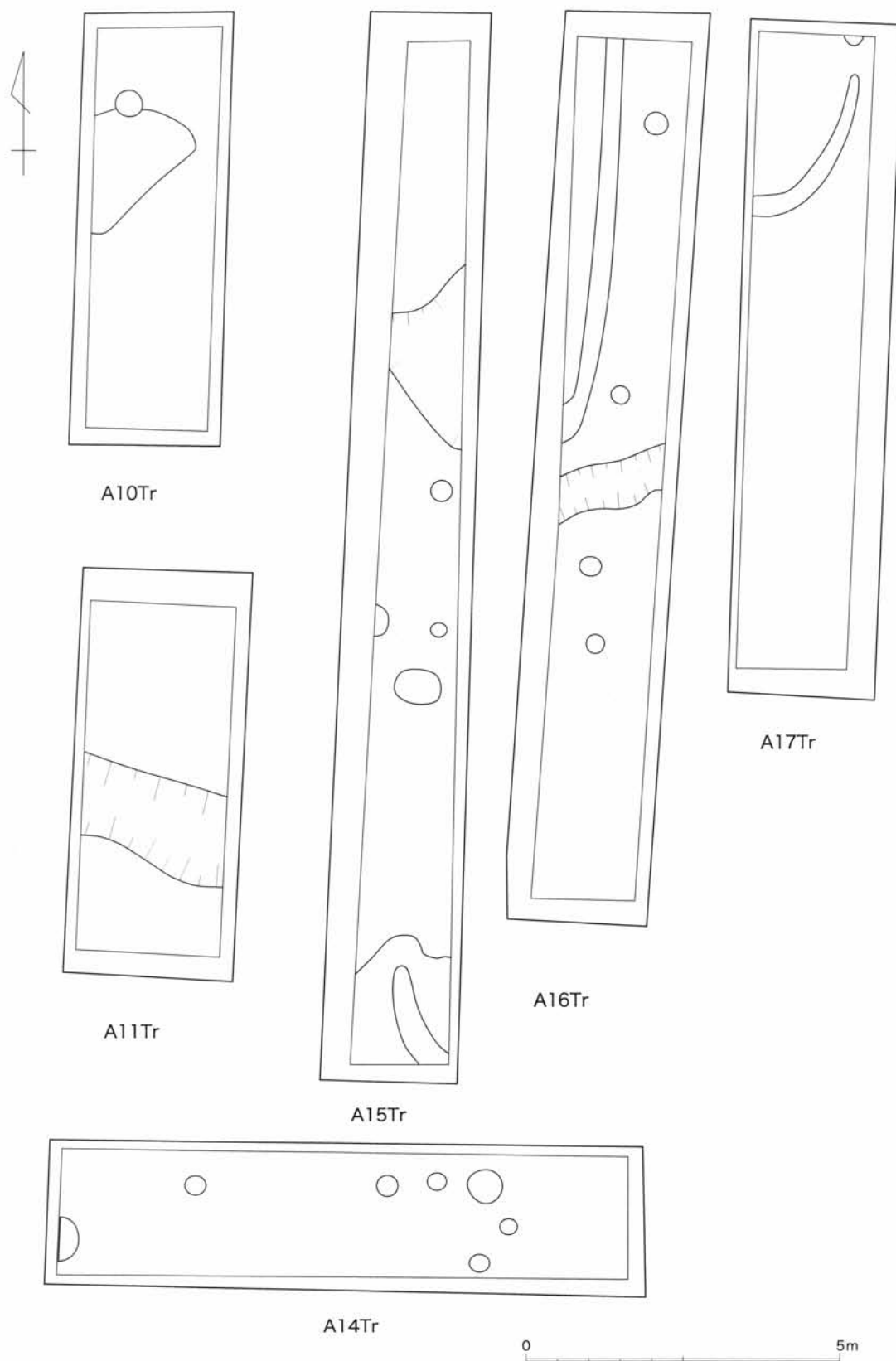
A 5-1・2 トレンチ 7層上面で蛇行する溝、ピットを確認した。遺物は3・4層を主体に



第43図 調査トレンチ配置図(1/500)



第44図 A地区主要トレンチ平面図(1)



第45図 A地区主要トレンチ平面図(2)

第50図19の須恵器、30の土師皿、38の土師器鉢、瓦器碗小片などが確認されている。また、1点のみであるが天井部に明瞭なヘラケズリをもつ古墳時代後期の須恵器杯蓋と思われる小片がある。

A 6 トレンチ 5層上面で複数のピット・土坑などを検出した。遺物は4層を中心に弥生土器や土師器が出土した。

A 7 トレンチ 6層上面で溝・ピットを確認した。溝は東西に主軸をとる。亀岡市教育委員会が実施した試掘調査や後述するA16トレンチで検出した東西方向の溝と一体のものと推測される。遺物は第51図38の磨製大型蛤刃石斧のほか、弥生土器、土師器の小片が出土した。

A 8 トレンチ 4層より下部はA 1 トレンチ同様、粗砂礫層となる。遺構・遺物とも検出できなかった。

A 9 トレンチ A 8 トレンチとほぼ同様の堆積状態を呈し、4層より下部は粗砂礫層となる。遺構・遺物とも検出できなかった。

A10トレンチ 4層上面で土坑1基、ピットなどを検出した。土坑については遺構の時期把握のため掘削作業を実施したが、遺物は検出されなかった。遺物は包含層内から土師器などが出土した。

A11トレンチ 4層下部の粗砂礫層上面で東西方向の溝を1条検出した。この溝については時期を把握するために掘削作業を実施した。遺物は出土しなかったものの溝埋土は黒褐色粘質土であり、第1次調査で検出された弥生時代前期の遺構と類似するものと思われる。

A12トレンチ 3層より下層は粗砂礫層である。遺構は検出されなかった。遺物は包含層中からごく少量であるが弥生土器、須恵器片が出土した。

A13トレンチ 4層より下層は粗砂礫層である。遺構・遺物とも検出されなかった。

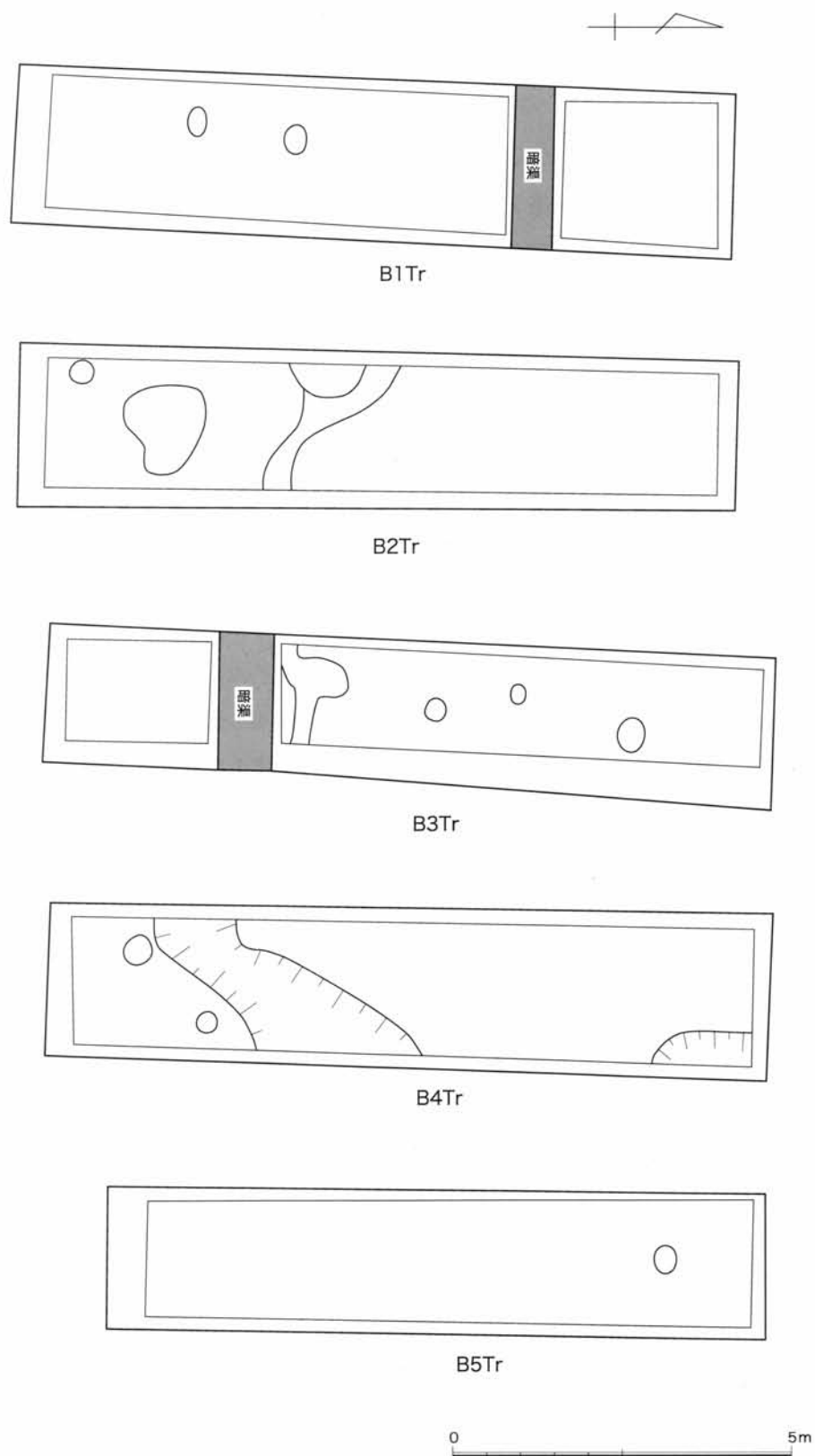
A14トレンチ 6層上面で複数のピットを検出した。また、包含層中から第50図4・7の弥生土器、31に示す緑釉陶器のほか、土師器・瓦器などの小片が出土した。

A15トレンチ トレンチ北側では粗砂礫層を確認した。トレンチ南半では5層上面で竪穴式住居跡状の落込み、ピット・溝などを確認した。遺物は第50図3・9に示す弥生土器のほか、瓦器小片が出土した。

A16トレンチ 5層上面で溝・ピットなどを確認した。東西方向の溝はA 7 トレンチのものと同一のものと推測される。また、南北方向の狭小な溝では遺構検出作業中に第50図1に示す弥生土器甕が検出され、弥生時代前期の遺構であると判断した。包含層中からは第50図2の弥生土器、14・17・20の須恵器などが出土した。

A17トレンチ 暗灰褐色極細砂層上面で溝・ピットなどを確認した。溝の平面は円弧を呈していることから円形竪穴式住居跡の周壁溝の可能性が考えられる。遺物は包含層中から弥生土器小片などが出土した。

B 1 トレンチ 4層の下層は淡黄灰色極細砂であり、この層の上面で南北方向に並ぶピットを確認した。掘立柱建物を構成する柱穴である可能性が高い。遺物は包含層中から弥生土器、須恵器、土師器、瓦器小片などが出土した。



第46図 B地区トレンチ平面図

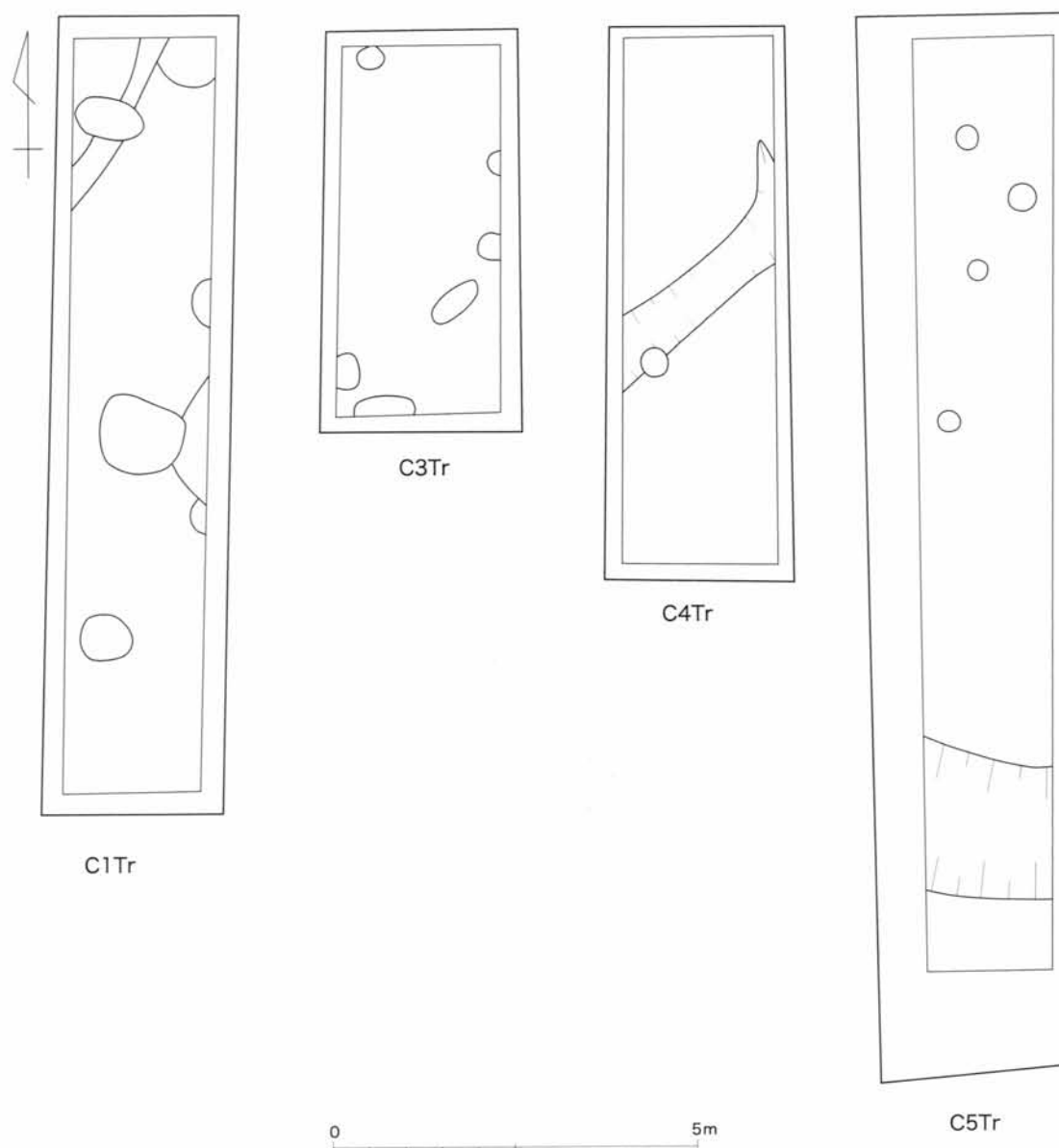
B2トレンチ 5層上面で土坑・溝・ピットなどを検出した。遺物は包含層中から弥生土器、サヌカイト剥片・須恵器・土師器小片などが出土した。

B3トレンチ 3層下層、暗茶褐色極細砂層上面でピット・溝などを検出した。遺物は出土しなかった。

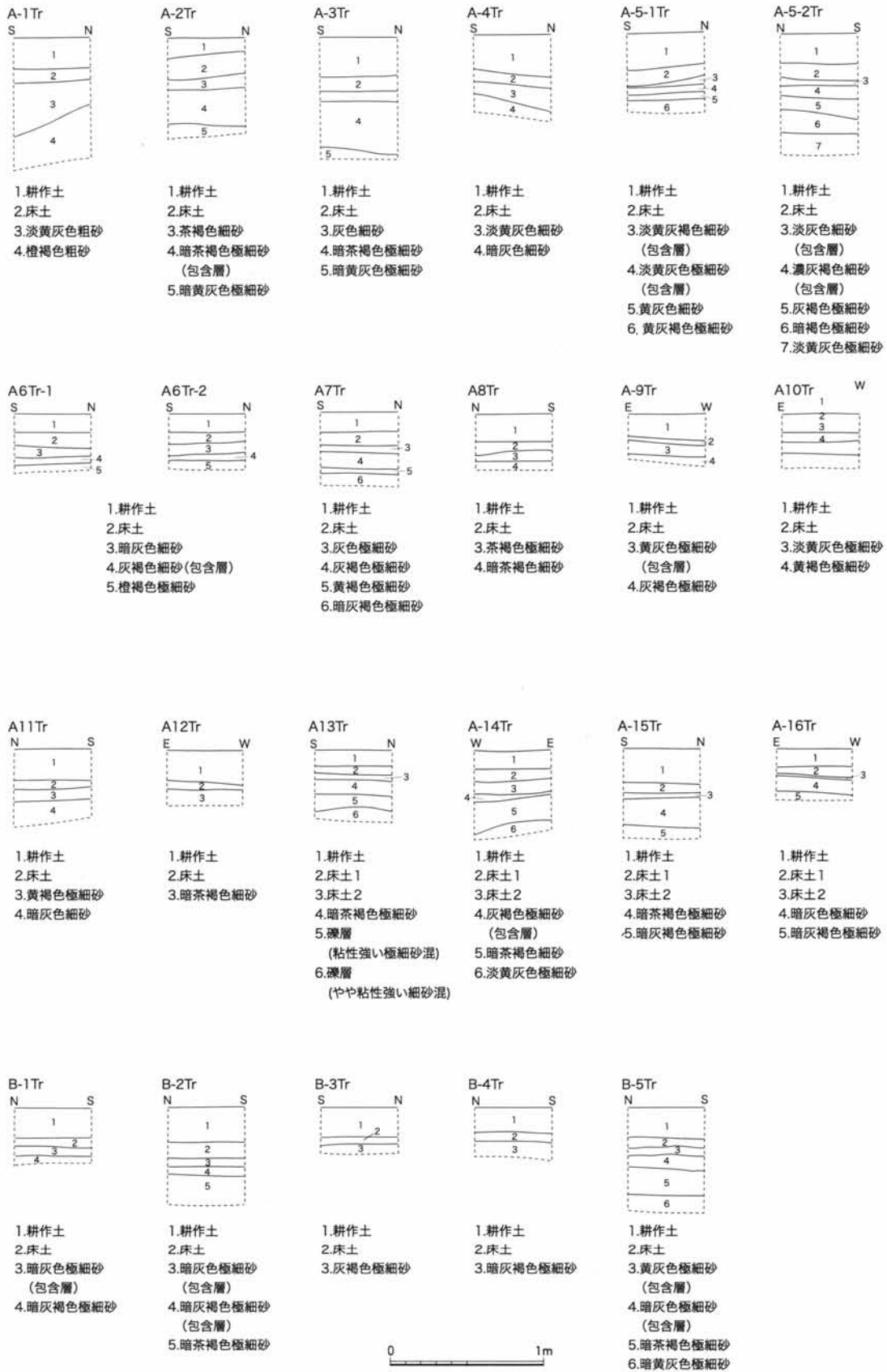
B4トレンチ トレンチ北半は粗砂礫層、南半は3層下層にあたる暗茶褐色極細砂層上面で溝・ピット・土坑などを検出した。遺物は出土しなかった。

B5トレンチ 6層上面でピットを確認した。遺物は包含層中から弥生土器、サヌカイト剥片、須恵器、土師器、瓦器などが出土した。

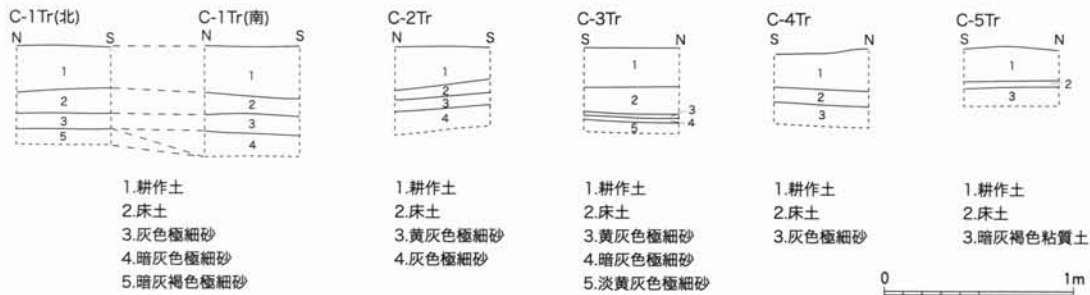
C1トレンチ 遺構面である第5層は北から南へ大きく傾斜する。この5層上面でピット・溝・土坑などを検出した。遺物は包含層中から第50図13の須恵器、23・24・35の瓦器、34の青磁碗、40のチャート剥片のほか、弥生土器、白磁、土師器小片などが出土した。また、図示してい



第47図 C地区トレンチ平面図



第48図 各トレンチ土層柱状図(1)



第49図 各トレンチ土層柱状図(2)

付表 調査トレンチ一覧

地区	番号	検出遺構	出土遺物	備考
A	1	なし		礫層
A	2	溝	土師器	
A	2-2	溝・ピット	弥生土器・灰釉・瓦器	
A	3	ピット	弥生土器・土師器(布留式甕)・瓦器	
A	4	ピット・土坑	須恵器(奈良・平安)・緑釉陶器・土師器・瓦器	
A	5-1	溝	土師器・瓦器	
A	5-2	溝	弥生土器・須恵器(古墳後期)・土師器・瓦器	
A	6	ピット・土坑	弥生土器・土師器	
A	7	溝・ピット	弥生土器・土師器	
A	8	なし		礫層
A	9	なし		礫層
A	10	土坑	土師器	
A	11	溝		礫層
A	12	なし	弥生土器・須恵器(平安)	礫層
A	13	なし		礫層
A	14	ピット	弥生土器・緑釉・土師器・瓦器	
A	15	ピット・土坑	弥生土器・瓦器	
A	16	溝・ピット	弥生土器・須恵器	
A	17	溝	弥生土器	
B	1	ピット	弥生土器・須恵器・土師器・瓦器	
B	2	土坑・ピット・溝	弥生土器・サヌカイト剥片・須恵器・土師器	
B	3	ピット・溝		
B	4	土坑・ピット・溝		
B	5	ピット	弥生土器・サヌカイト剥片・須恵器・土師器・瓦器	
C	1	土坑・ピット・溝	弥生土器・須恵器・白磁・青磁・土師器・瓦器 チャート剥片・チャート製火打ち石	
C	2	ピット	須恵器・青磁・土師器	
C	3	ピット・土坑	弥生土器・須恵器・土師器・瓦器	
C	4	溝・ピット	土師器	
C	5	溝・ピット		

ないがチャート製の火打ち石が存在する。

C 2 トレンチ 遺構面は第4層上面である。平面的に検出できた遺構はないが、トレンチ断面に第4層上面から掘り込まれるピットの存在を確認した。遺物は第50図18の須恵器椀、33の青磁椀のほか、土師器小片が出土した。

C 3 トレンチ 5層上面で土坑・ピットなどを検出した。遺物は包含層中から第50図6の弥生土器、15の須恵器のほか、土師器、瓦器小片などが出土した。

C 4 トレンチ 第3層の下層、淡黄灰色極細砂層上面で溝・ピットを確認した。溝埋土は暗灰色礫混じり細砂である。遺物は包含層中から土師器小片などが出土した。

C 5 トレンチ 床土直下、3層上面でピット・溝などを検出した。ピットは径20cm程度の小規模なものであるが、掘立柱建物跡を構成する柱穴の可能性が高い。溝は埋土が黒褐色粘質土であり、第1次調査で検出された弥生時代前期の遺構と類似するものといえる。遺物は包含層が形成されていないこともあり検出することはできなかった。

3. 出土遺物

出土遺物は包含層のものが中心であり、総量はコンテナ2箱に収まる。遺物総量は少ないものの、時期は縄文時代晩期と想定されるチャート剥片、弥生時代前期の土器、石器、布留式甕口縁破片、古墳時代後期に属する須恵器、平安時代の須恵器、緑釉、鎌倉時代の瓦器片など各時期のものがみられる。包含層の出土遺物という性格上、細片・磨滅の進行した個体が多いが、40点を図示した(第50・51図)。

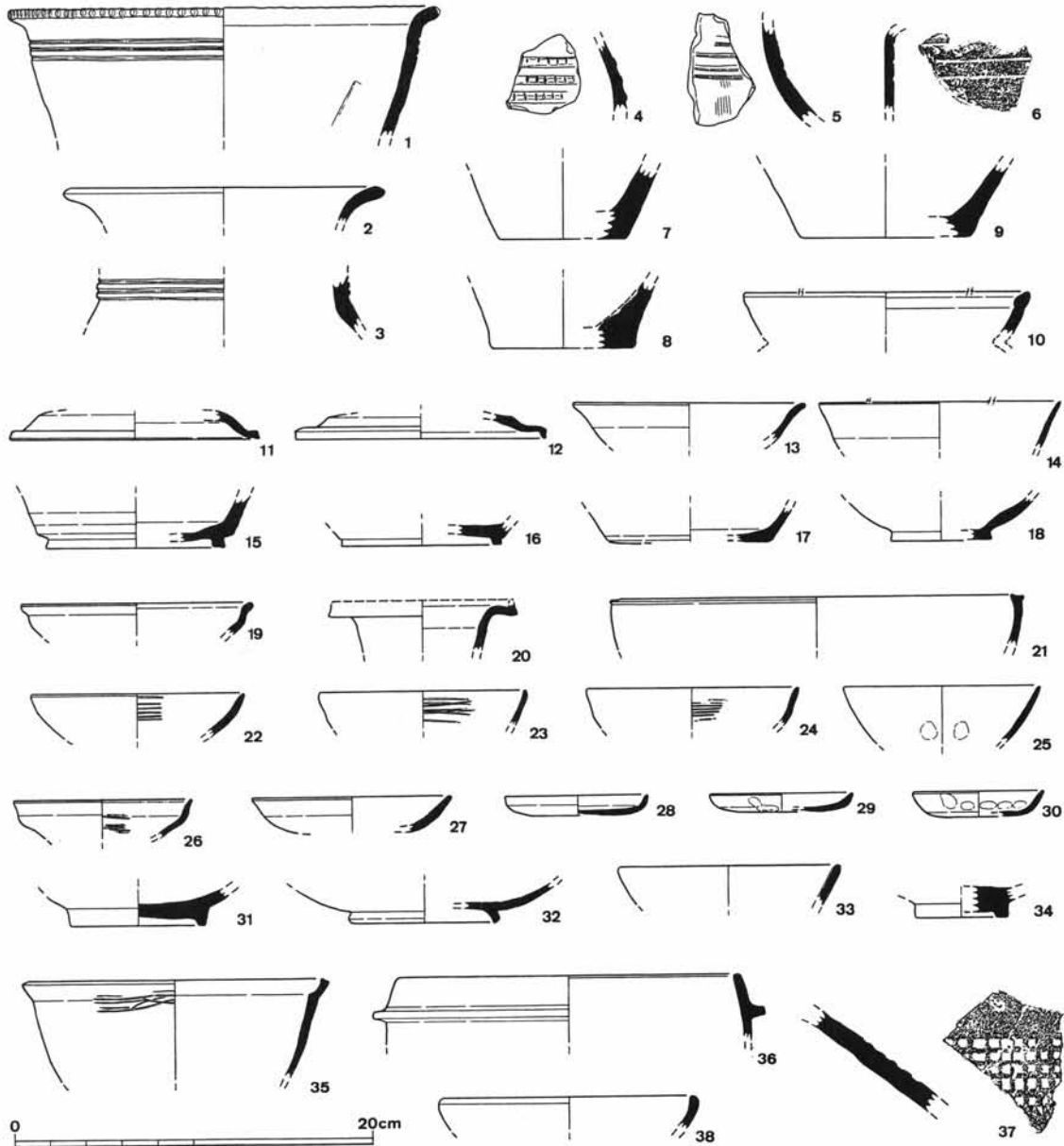
1～9は弥生土器である。1は如意形口縁をもつ弥生土器甕である。体部に3条の篋描き沈線文を施し、口縁端部には刻目が認められる。調整は全体に磨滅が著しく明瞭ではないが、体部内面に縦方向の板状工具の痕跡が認められる。A16トレンチの南北方向の溝検出中に出土した。色調は暗褐色を呈する。2は弥生土器壺口縁の細片である。3は弥生土器壺頸部の細片である。3条の篋描き沈線を施す。A16トレンチから出土した。4は弥生土器壺体部の細片である。3条以上の低い削り出し突帯をもち刻目を施している。A14トレンチからの出土である。5は篋描き直線文を施す壺頸部細片である。A2-2トレンチからの出土である。6は弥生土器甕の頸部付近である。3条の篋描き沈線文が認められる。C3トレンチからの出土である。7～8は弥生土器の底部である。7はA14トレンチ、8はA2-2トレンチ、9はA15トレンチから出土した。これら弥生土器はいずれもその諸特徴から弥生時代前期新段階に属するものと判断する。

10は土師器甕の口縁部小片である。端部を肥厚させる布留式甕の特徴を呈する。全体に厚いつくりであるため古墳時代中期のものである可能性が高い。当該時期の遺物は、この甕1点のみである。A3トレンチから出土した。

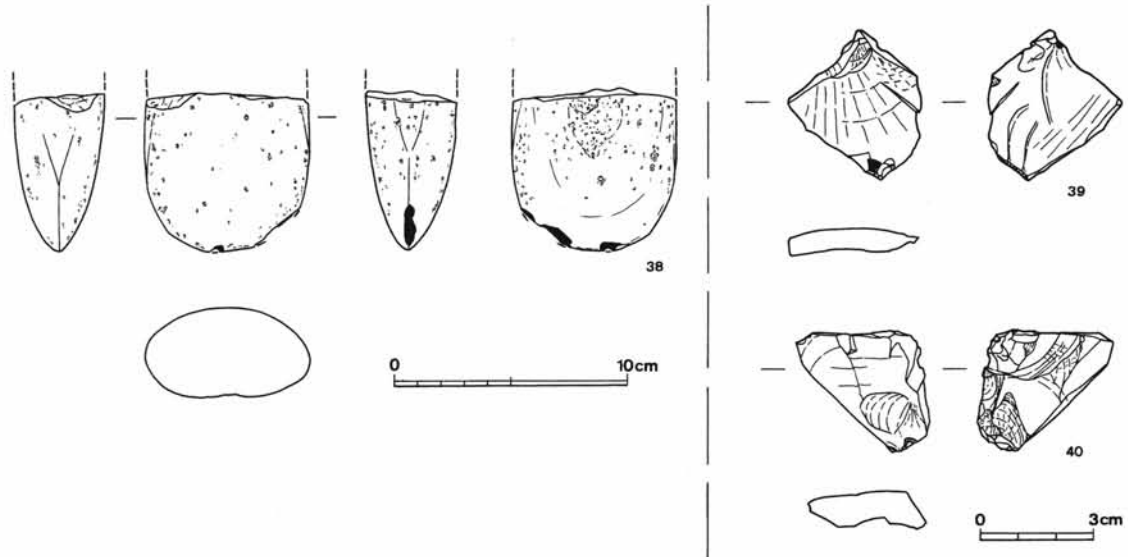
11～21は須恵器である。11は口縁部の屈曲する須恵器杯蓋である。天井部がやや高い。A4トレンチから出土した。12は11同様、口縁部の屈曲する須恵器杯蓋である。11に比して器高が低い。C3トレンチからの出土である。13は須恵器杯身である。口縁がやや外反気味に開く。C1トレ

ンチからの出土である。14もやや口縁が外反気味に開く須恵器杯身である。13に比して器高が高い。A16トレンチからの出土である。15は高台を有する須恵器杯身底部である。高台は底面内寄りに付され、高台はやや外に踏ん張る形態を呈する。C3トレンチから出土した。16は高台を有する須恵器杯身底部である。高台は低く底面外端に付される。A4トレンチからの出土である。17は高台をもたない須恵器杯身の底部である。焼成はやや軟質である。A16トレンチからの出土である。18は糸切り平高台の須恵器碗底部である。C2トレンチからの出土である。19は口縁部を外方に屈曲させる須恵器碗である。A5-2トレンチからの出土である。20は須恵器壺の口縁である。大きく外反する口縁端部を上方に屈曲させる。A16トレンチから出土した。21は須恵器鉢口縁である。口縁端部は緩い凹面を呈し、端部を外方に摘み出している。これら須恵器群は奈良時代後半から平安時代初頭を中心とする時期のものとする。

22~26は瓦器である。いずれも小片のうえ磨滅が著しい。22は内面にミガキが認められる瓦器



第50図 出土遺物実測図(1)



第51図 出土遺物実測図(2)

椀である。A 4 トレンチからの出土である。23は口縁端部をやや内湾させる瓦器椀である。ミガキは内面に観察される。C 1 トレンチからの出土である。24は23と同じくC 1 トレンチ出土の瓦器椀である。25はA 2-2 トレンチから出土した瓦器椀である。磨滅が著しい。26はA 4 トレンチ出土の瓦器皿である。口縁外側面をやや外反気味に仕上げる。これら瓦器群はおおむね鎌倉時代に属するものと考えられる。

27~30は土師器皿である。27~29はA 4 トレンチからの出土である。27はやや口径の大きいタイプである。28・29は浅いタイプの土師皿である。30はA 5-2 トレンチから出土した土師皿である。口径に比して器高がやや高い。これら土師皿も鎌倉時代に属するものとする。

31はA 14 トレンチ出土の緑釉陶器である。釉は剥離してしまっている。32はA 4 トレンチ出土の灰釉陶器皿である。やや内湾する高台をもつ。33・34は青磁椀の小片である。33はC 2 トレンチ、34はC 1 トレンチからの出土である。

35はC 1 トレンチ出土の瓦質鉢である。口縁は内湾し、端部は凹面に仕上げられる。36は瓦質羽釜である。A 4 トレンチからの出土である。38はA 5-2 トレンチから出土した土師質鉢の口縁部である。口縁部はやや内湾し端部は丸く仕上げられる。37はA 5-2 トレンチから出土した常滑焼甕体部片である。外面にタタキが認められる。

38~40は石製品である。38はA 7 トレンチ出土の磨製太型蛤刃石斧である。基部が欠損している。一面に叩き石として使用された痕跡があり、欠損品を再利用したものとみられる。39はA 3 トレンチ出土のサヌカイト剥片である。40はC 1 トレンチ出土のチャート剥片である。

4. まとめ

以上、池尻遺跡第5次の調査について概要を記した。今回の調査成果は、以下のように集約できよう。遺物は、弥生時代前期から鎌倉時代まで各時期のものがみられるが、量的に弥生時代前期・奈良時代・鎌倉時代の3時期の遺物が多くそれぞれの時期にピークが認められる。

調査地周辺のコンタを現況の畦畔のレベルから復原すると第52図のようになり調査地西側に谷



第52図 調査地周辺地形図およびコンタ・旧地形復原図

地形が存在することが窺われる。池尻遺跡東半部分はこの谷地形を取り囲む微高地上に立地しているものとみられる。

弥生時代前期の遺物は、調査対象地の広範な範囲で確認されている。また、池尻遺跡第1次調査や池尻遺跡第7次E地区の調査成果から、弥生時代前期末の池尻遺跡は本調査区から南西へ大きく展開するものと推測される。確実にこの時期の遺構といえるものとしてはA16トレンチで検出した南北方向の小規模な溝のみであるが、A17トレンチの円弧を描く竪穴式住居跡の周壁溝状の溝などの存在から集落域の一端を確認したと考える。池尻遺跡第7次E地区は中期初頭を中心とする方形周溝墓群が確認されており、その造墓時期は前期末に遡る可能性が考えられている。今回の地点が集落域であるとすれば、前述の谷地形を介して墓域と集落域とに分かれていたものといえよう。

古墳時代の遺物としては、A3トレンチで布留式土器甕、A5-2トレンチで図示していないものの天井部に回転ヘラケズリ痕を明瞭に残す古墳時代後期の須恵器杯蓋と考えられる個体があり、極少量ながら遺物が出土することは古墳時代にも何らかの土地利用がなされていたものと推測される。

奈良時代の遺物は、奈良時代後半から平安時代初頭のを主体とし、調査地各所に認められる。池尻遺跡では、奈良時代前半代の池尻廃寺を中心に大型建物群が広範に分布する状況が確認されているが池尻遺跡第7次調査D地区で確認された大型建物群は短期間で廃絶し、奈良時代後半代には継続しないと見られている。今回、検出した柱穴はいずれも小規模なものであり、仮に当該期の建物であったとしても官衙の様相を示す池尻廃寺周辺の建物群とは趣を異にするものといえる。

鎌倉時代に属する遺物も調査対象地の各所で出土しており、小規模ながら列状に並ぶピット群がB1・C5トレンチなどで検出されていることから、鎌倉時代の集落の一部を確認したものといえる。

以上のように、試掘調査という性格上検出遺構の時期・性格について明確な位置付けはできなかったものの、出土遺物の様相などから遺跡の性格の一部を明らかにできたものとする。今後の周辺部における調査成果に期待したい。

(石崎善久)

注1 調査参加者は以下のとおりである(順不同・敬称略)。

調査補助員 天池佐栄子・山岡匠平・奥浩和・村上奈弥・村上計太・井上亮・田村和成・北森さやか・草薙大蔵・武田雄志・田中洸太郎・平井耕平・松本景太・大道真由美・川上優・青石達哉・畑和弘・中津梓・坂内裕志・石井健太・谷秀平・吉村真美・吉田翔・野口昌宏・中村智・関正樹・中村領・安井蓉子・竹内律輝・杉崎哲郎・山田智子・豊田洋貴・塩田将人・田部直樹・橋本翔太・浅井達也・石井太基・津野義人・笠原直哉・戸塚悟史・野崎文人・藤本卓司・雪本敬人・宇野隼人・岡本寛明・藤田広海・澤鮎美・的場明日香・阿部絵理子・鷲見素直・米山紗矢香・中川祐輔・竹中慎詞・田邊義高・武内慎也

整理員 山本弥生・荻野富紗子・丸谷はま子・西村香代子・松下道子・山中道代・内藤チエ・森川敦子・高田真由美・関口睦美・藤井矢壽子・柿谷悦子・松元順代・清水友佳子・春日満子・兵頭真千・中川香世子・阪口美智代・俣野明子・堤百合美・中川由美子

作業員 西田千代和・村上福治・脇上妙子・関口トシ子・岩本勝美・田中千代子・松本栄子・大西啓之・桂孝子・山本君代・関口澄子・岡本ユカ・石本昇・茨木吉光・黒田武夫・牧澤文夫・森山兼夫・石本和江・桂邦雄・八木浩二・清水満里子・沼田みさを・小幡一幸・川本みち子・岸敬子・岸昇・平井武夫・岸妙子・林田祥子・茨木節子・関徹・藤木建直・関あさ江・水谷敏夫・中西秋江・森山きよ子・近藤正裕・寺町為三・小泉正男・中村幸二・安藤美智子・杉崎征夫・八木まゆみ・橋本幸子・畑弥生・堤和代・才津鈴美・畑信弘・北村博・澤田秀子・中澤まゆみ・福島智香・堤明裕・楠本小夜子・堤清子・中澤耕一・中沢義己・中沢春美・中澤一義・川村勇・堤富男・中野美代子・奥田宏・畑きく恵・堤洋一・大西勝治・堤富子・森江津子・平岩敬子・中川しづゑ・中澤多美・中川正之・人見正毅・中島千恵子・堤純子・林節子・中川慶弘・竹田晴美・広瀬宗吾・杉崎勉・山田優・平野かすみ・亀谷憲二・杉崎貢・岩本滝雄・堤達也・堤操・中澤次雄・岩田守・小川益次郎・堤務・河原博・名倉艶子・伊豆田進・堤翼・筑前明子・上田伊佐男・飯田久美子・畑和樹・名倉清司・畑純子・堤真凡・鈴木眞佐子・堤末夫・中沢好子・堤智恵子・中野和子・堤明・名倉達雄・中川一成・川村敏雄・中澤紀男・中川恵美子・林八郎・鈴木秀雄・堤隆師・藤井多恵子・堤奈智子・林儀治・安藤孝司・茨木福夫・中川末男・中澤豊・人見茂実・中川坦・小松とみ子・埜々下英美利・浅田昌子・中川将俊・浅田信仁・浅田圭二・野々村桂・村上英子・俣野明美・名倉正子・浅田マサ子・川村フクエ・人見美子・畑貢・畑八重子・堤廣子・中川章代・堀口慶子・林昭子・杉崎稔・興津嘉子・中澤大介・酒井勝美・松本憲明・西口則幸・田中壽男・中澤康夫

注2 亀岡市教育委員会「馬路遺跡発掘調査報告書－府営宮前千歳線バイパス工事に伴う埋蔵文化財発掘調査－」（『亀岡市文化財調査報告書』第44集）1997

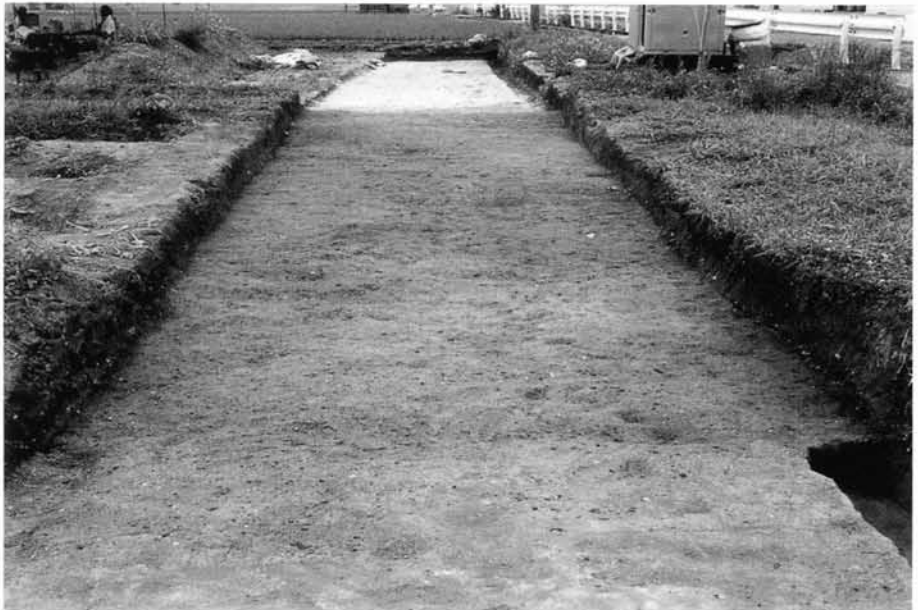
注3 京都府教育委員会「国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡平成15年度発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報』）2004

注4 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター「国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡(平成15年度)(2)馬路遺跡第3次」（『京都府遺跡調査概報』第114冊）2005

版 圖



(1)西区全景(西から)



(2)中央区・西区全景(東から)

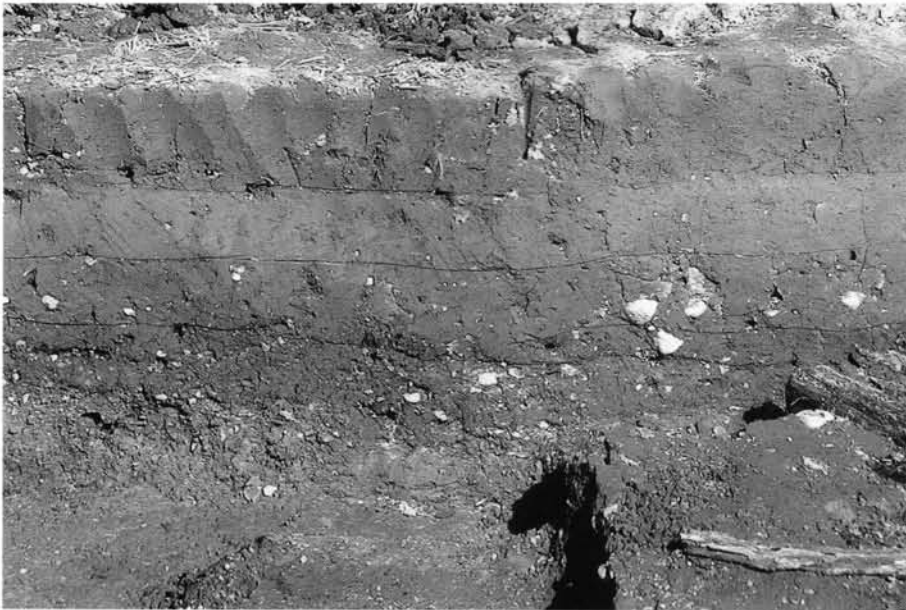


(3)東区西部全景(東から)

図版第2 三日市遺跡第4次



(1)東区東部全景(西から)

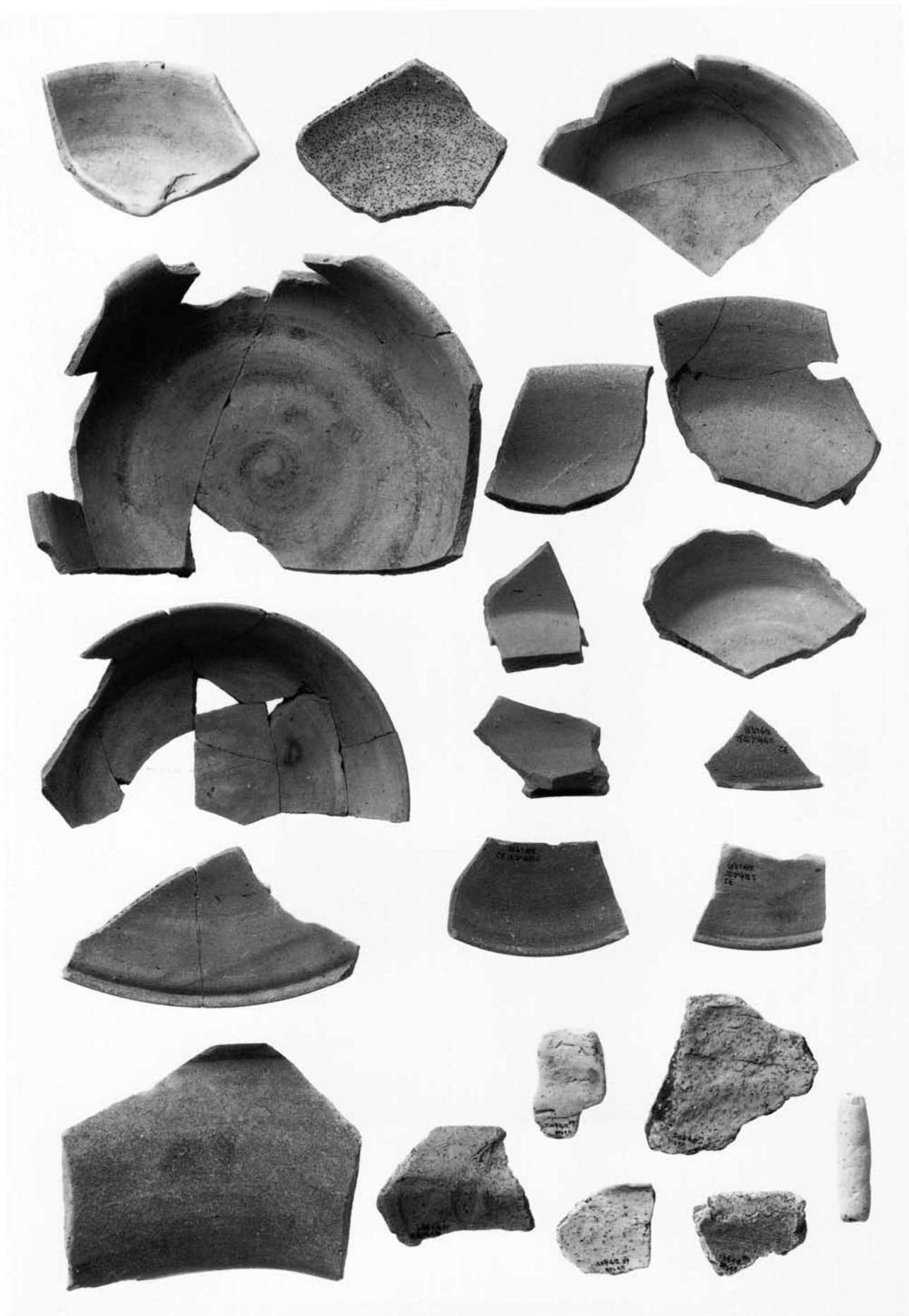


(2)北壁土層堆積状況(南から)



(3)遺物出土状況(南西から)





出土遺物(2)



10



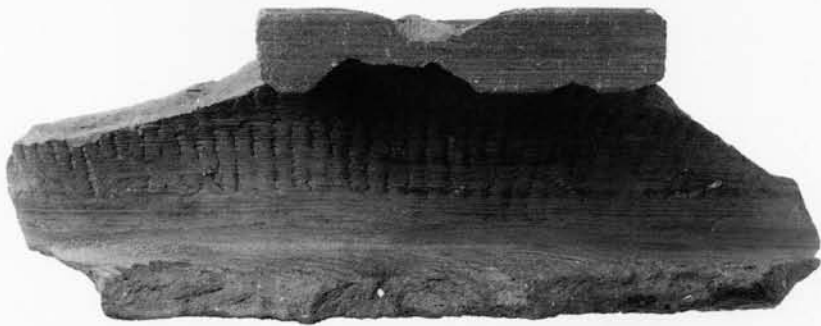
13



11



14

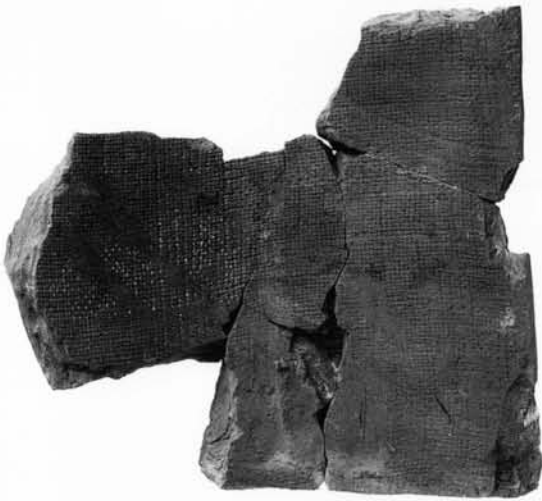


37



37





43



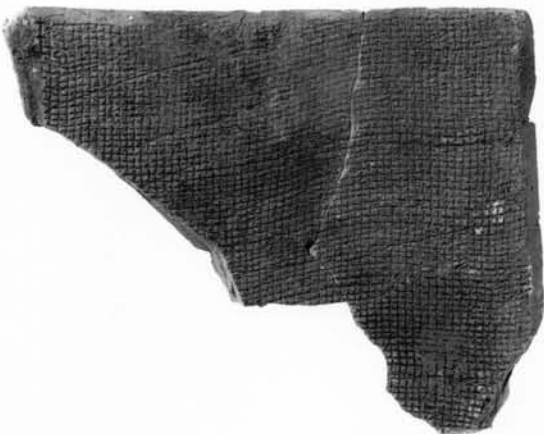
43



44



44



45



45



46



46



46



47



47



(1)調査地全景(北上空から)



(2)調査地全景(西上空から)



(1)調査前風景(北から)



(2)作業風景(東から)

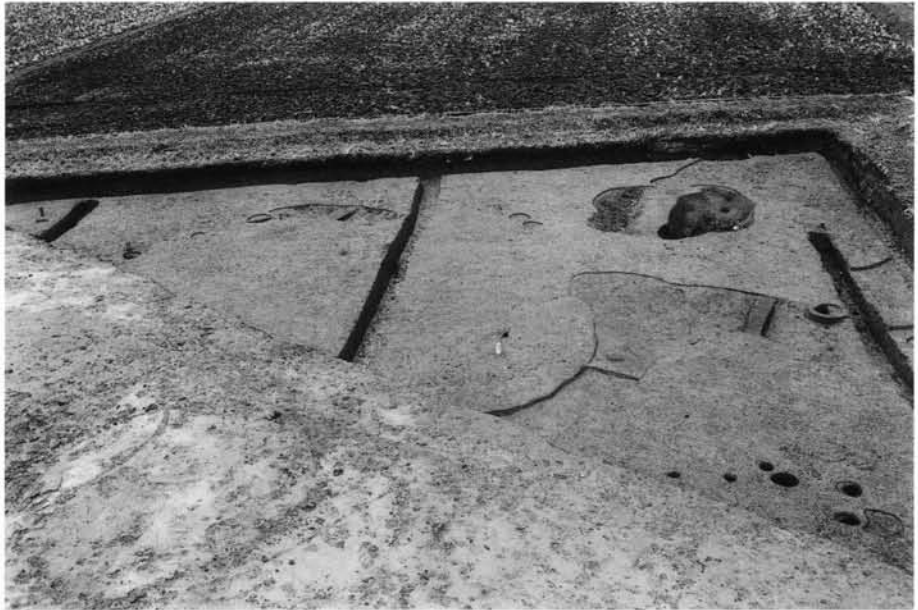


(3)E地区全景(南東から)

図版第11 馬路遺跡第4次



(1) E 地区溝 S D14・19完掘状況
(南から)



(2) F-2 地区全景(北から)



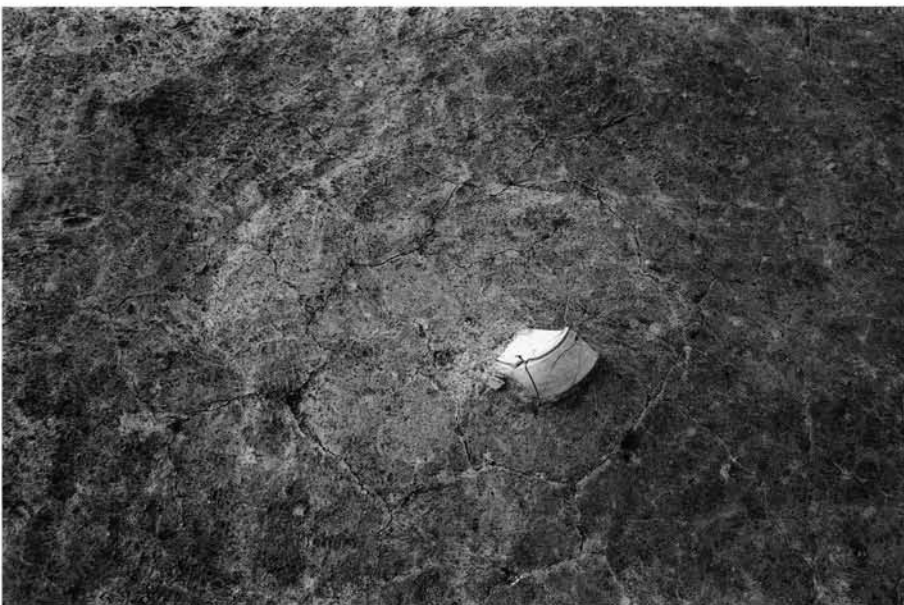
(3) F-1 地区遺構検出状況
(南から)



(1) F-1 地区掘立柱建物跡
検出状況(南から)



(2) F-1 地区掘立柱建物跡全景
(南から)



(3) F-1 地区柱穴P50
遺物出土状況(北東から)



(1) F-1 地区方形周溝墓 S T02
完掘状況(東から)



(2) F-1 地区方形周溝墓 S T02
完掘状況(南から)



(3) F-1 地区溝 S D05 全景
(北から)



(1) F-1 地区溝 S D01土層断面
(北から)



(2) F-1 地区溝 S D310土層断面
(北から)



(3) F-1 地区溝 S D311土層断面
(東から)



(1) F-1 地区溝 S D311
遺物出土状況(東から)



(2) F-1 地区溝 S D311
遺物出土状況(南から)



(3) F-1 地区溝 S D311
遺物出土状況(東から)



(1) F-1地区土坑S K413
遺物出土状況(北西から)



(2) F-1地区土坑S K413
遺物出土状況(北から)



(3) G地区全景(北から)



34



34



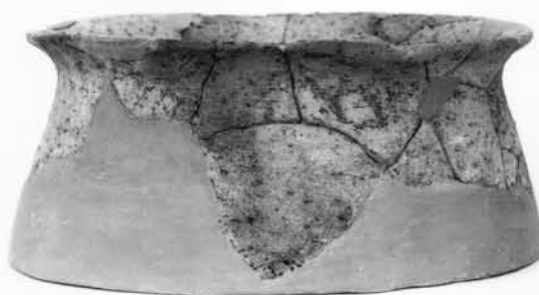
35



59



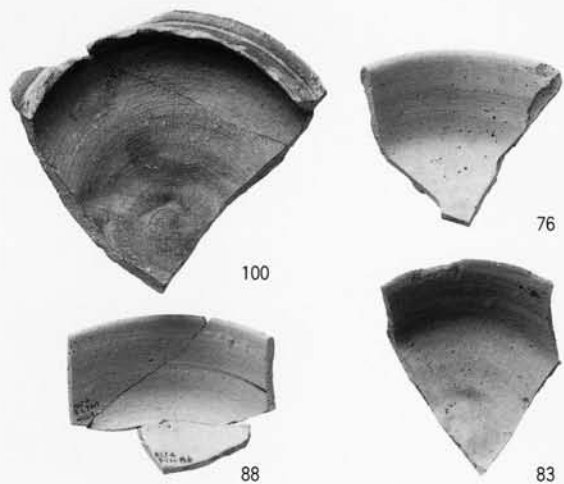
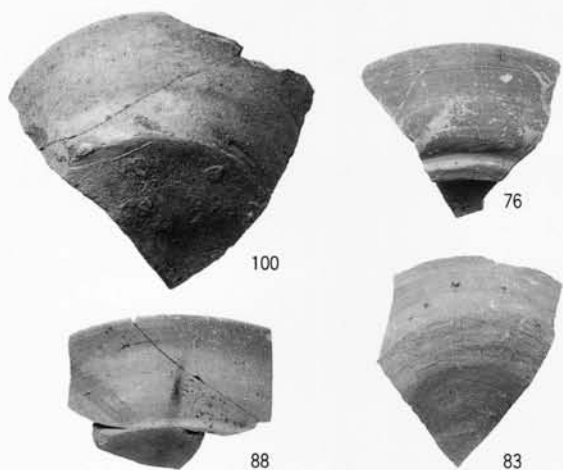
63



66



77



図版第19 馬路遺跡第4次



(1) A 2 トレンチ上層全景
(南から)



(2) A 2-2 トレンチ上層全景
(北から)



(3) A 2-2 トレンチ下層全景
(北から)



(1) A 3 トレンチ上層全景
(北から)



(2) A 3 トレンチ下層全景
(南から)



(3) A 5-1 トレンチ全景
(南から)



(1) A 5-2 トレンチ全景
(西から)



(2) A 6 トレンチ全景(北から)



(3) A 7 トレンチ全景(南から)



(1)A 8 トレンチ全景(北から)



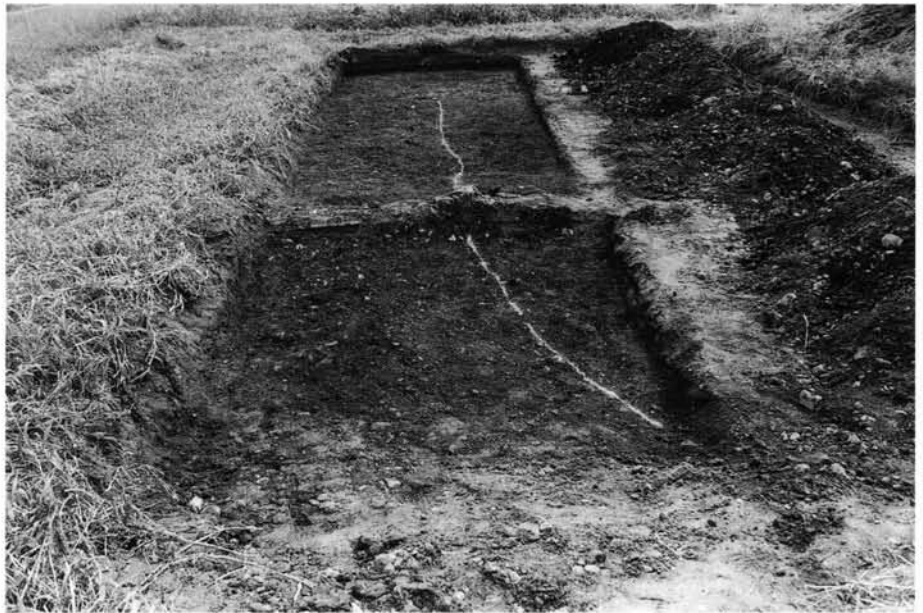
(2)A10 トレンチ全景(北から)



(3)A10 トレンチ全景(南から)



(1)A11トレンチ全景(北から)



(2)A12トレンチ全景(北から)



(3)A13トレンチ全景(南から)



(1)A14トレンチ全景(東から)



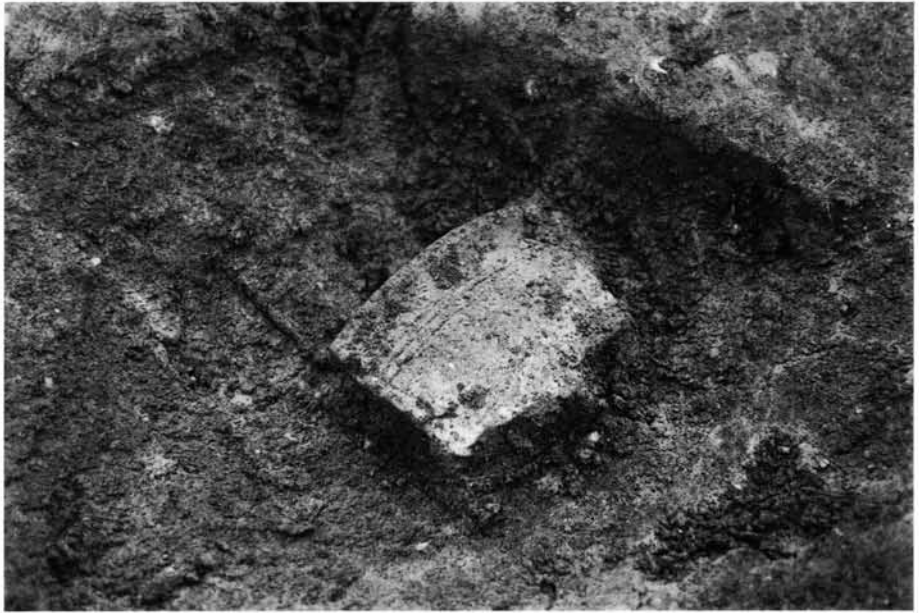
(2)A15トレンチ全景(南から)



(3)A15トレンチ全景(北から)



(1) A16トレンチ全景(北から)



(2) A16トレンチ溝上面
弥生土器検出状況(北から)



(3) A17トレンチ全景(北から)



(1) A17トレンチ
竪穴式住居周壁溝状遺構
検出状況(東から)



(2) B1トレンチ全景(南から)



(3) B3トレンチ全景(南から)



(1) B 4 トレンチ全景(南から)



(2) C 1 トレンチ全景(北から)



(3) C 3 トレンチ全景(南から)



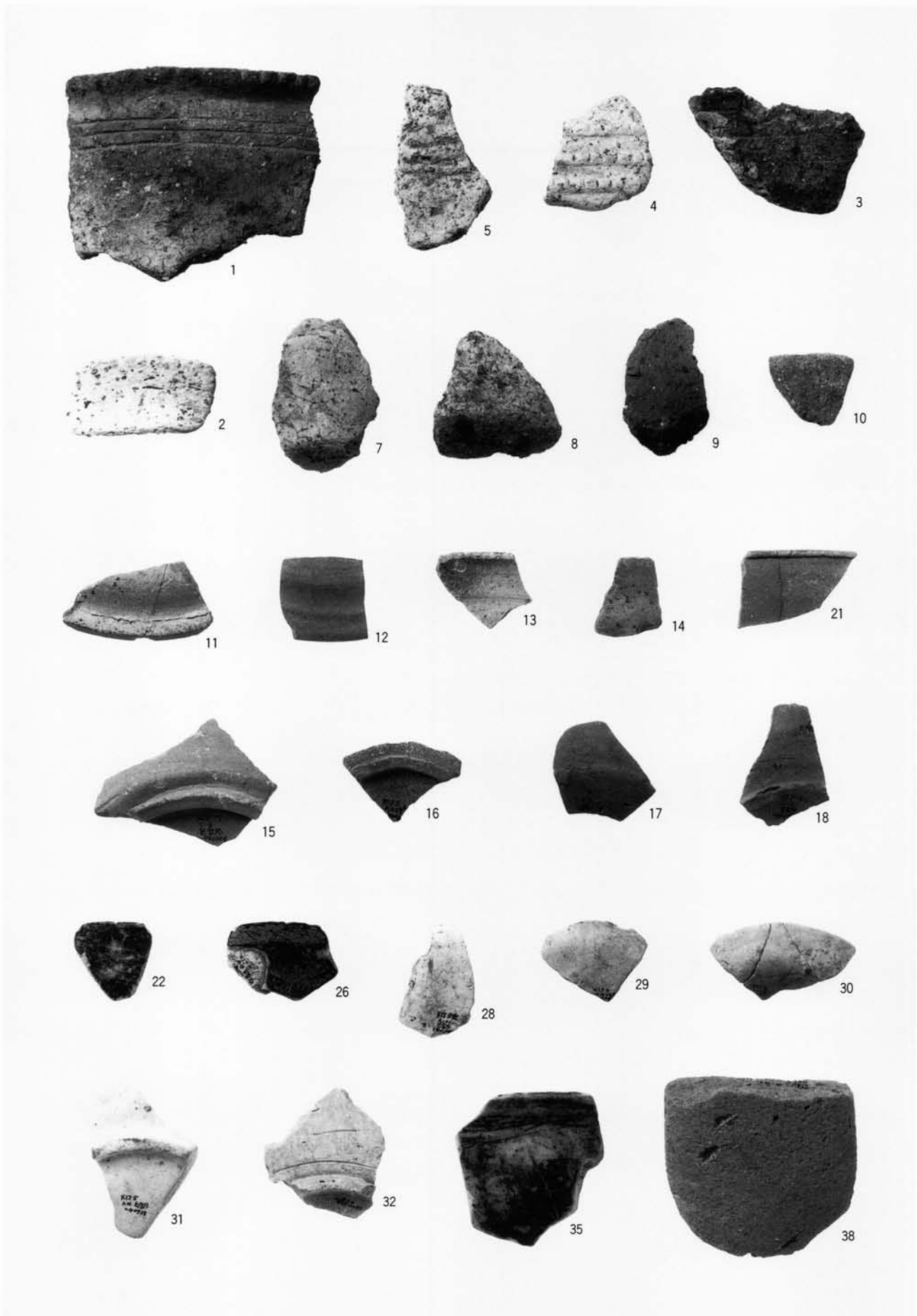
(1) C 4 トレンチ全景(北から)



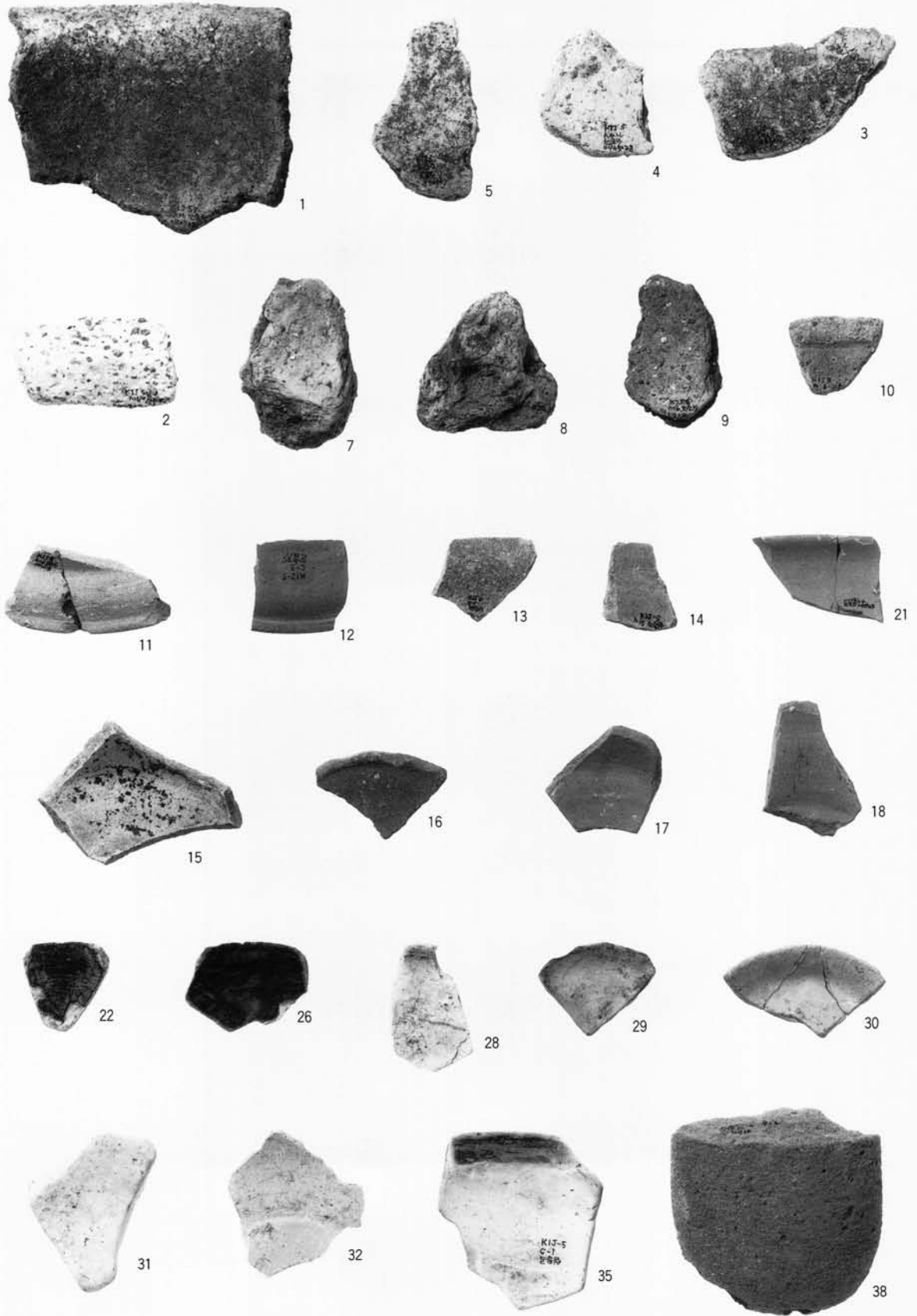
(2) C 5 トレンチ全景(南から)



(3) C 5 トレンチ全景および
C 地区近景(北から)



出土遺物(外面)



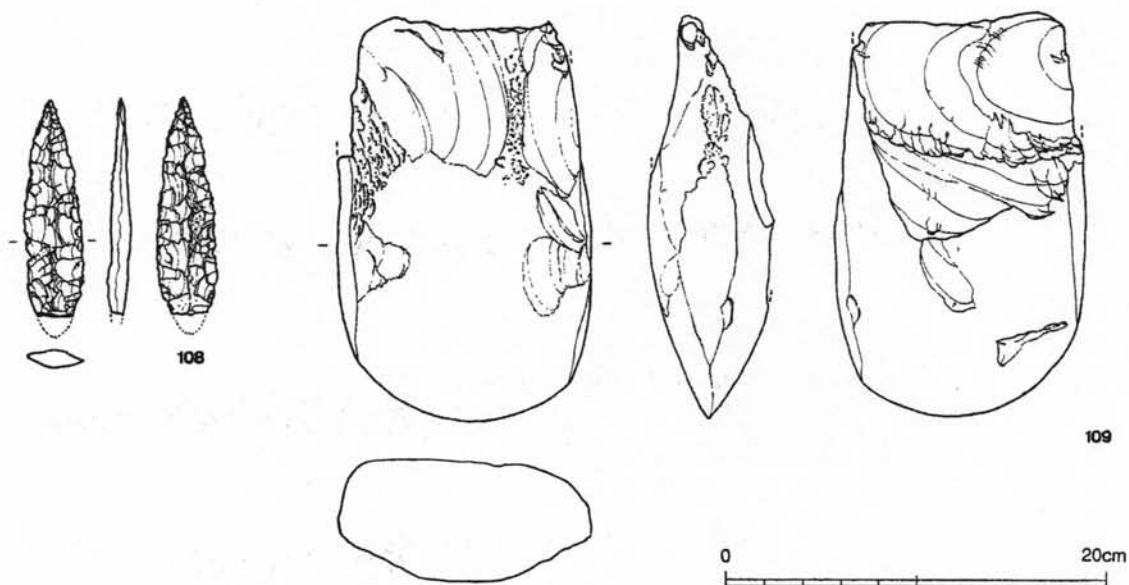
報告書抄録

ふりがな								
書名								
副書名								
巻次								
シリーズ名	京都府遺跡調査概報							
シリーズ番号	第120冊							
編著者名								
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3			Tel		075(933)3877		
発行年月日	西暦 2006 年 3 月 30 日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m ²	
みっかいちいせき きだいよんじ	きょうとふかめ おかしかわらば やしちょうかわ らじりしょうぶ							
三日市遺跡第4次	京都府亀岡市河 原林町河原尻菖 蒲	26206	12	35° 03' 4"	135° 34' 22"	20040524 ～ 20040702	150	ほ場整備
うまじいせきだ いよんじ	きょうとふかめ おかしうまじ ちょうろくたんだ							
馬路遺跡第4次	京都府亀岡市馬 路町六反田	26206	170	35° 03' 34"	135° 33' 44"	20041207 ～ 20050227	1,570	ほ場整備
いけじりいせき だいごじ	きょうとふかめ おかしうまじ ちょういけじり まえのがわ							
池尻遺跡第5次	京都府亀岡市馬 路町池尻前ノ側	26206	169	35° 03' 47"	135° 33' 46"	20040906 ～ 20041105	600	ほ場整備
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
三日市遺跡第4次	集落	奈良				土師器/須恵器/転用硯/製塩土器/土錘/灰釉陶器/回転台土師器/瓦器/丹波国分寺創建瓦		丹波国分寺創建瓦窯に近接。転用硯、墨書土器、製塩土器、丹波国分寺創建瓦が多数出土
馬路遺跡第4次	集落・墓	弥生～古墳		竪穴式住居跡/方形周溝墓/溝		弥生土器/石鏃/石斧		
	集落	飛鳥～奈良		掘立柱建物跡/溝/土坑		須恵器/土師器		
池尻遺跡第5次	集落	弥生 古墳 奈良 鎌倉				弥生土器 土師器/須恵器 土師器/須恵器 瓦器/青磁		試掘調査 遺構未掘削

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

『京都府遺跡調査概報』第120冊正誤表

頁	場所	誤	正
Ⅲ	本文目次	(3)池尻遺跡第5次遺跡	(3)池尻遺跡第5次
	付表目次	(3)池尻遺跡第5次遺跡	(3)池尻遺跡第5次
10	第9図の縮尺率	(1/1,000)	(1/2,000)
18	第20図のスケール単位	4 m	40cm
20	第23図のスケール単位	5 m	50cm
30	第35図のスケール単位	40cm	20cm
31	第36図のスケール単位	40cm	20cm
32	第37図のスケール単位	40cm	20cm
33	第38図のスケール単位	40cm	20cm
34	第39図	図面の訂正	
	第41図のスケール単位	40cm	20cm



第39図 F-1地区出土遺物実測図(3)

京都府遺跡調査概報 第120冊

平成18年3月30日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141